日本の中学生 国際比較でみる

千石 保
鐘ヶ江晴彦
佐藤郡衛

NHKブックス

現代中学生の"実像"と"虚像"

中学時代の〝選択〟が、人間の一生を決める
——宿命的な分岐点にたつ中学生の素顔を
様々な調査データ・分析と国際比較に探る。

広がる視野
深まる知識 NHKブックス 538

◉見えない中学生の〝実像〟を探る◉

校内暴力・いじめ・非行…教育の荒廃が叫ばれる現代の、揺れる中学生の周辺。反抗期を忘れ、希薄な友人関係の中で、ひたすら〝面白く〟生きようとする彼らの見えない実像を、日本・アメリカ・中国の中学生、教師、母親の意識と行動から探る。豊富な調査データの比較・分析によって鮮明に描き出される中学生群像は、彼らの内面の声なき声を代弁し、同時に、大人社会への鋭い警告となって現代の〝生〟を問う。

日本の中学生

国際比較でみる

千石　保
鐘ケ江晴彦
佐藤郡衛

NHKブックス

538

はしがき

私は仕事柄、世界各国の青少年に出合うチャンスに恵まれている。これまで、多くの国々を訪れ、様々な中学生とも触れ合いを持ってきた。同じ中学生といっても各国それぞれのお国ぶりがあるように思われる。

アメリカの中学では、強い子、親切な子が人気ナンバー・ワンであり、また、クラスのリーダーになる。たとえば、自分で、足の不自由な子や成績の悪い子に親切にすると決めたら、それを徹底的に実行する。ロサンゼルスでインタビューした一人の女の子は、足の不自由な子にいつも肩を貸し、成績の悪い子に、放課後、毎日勉強を教えていた。この子がまっすぐ筆者に向かって答えているとき、黒い瞳が光り輝いていたように思えた。

韓国の人気ナンバー・ワンは、新聞配達をし、親のいない別のクラスの子と、昼の弁当をいっしょに食べる子だった。もちろん、勉強も、抜群とは言えないがよくできる。そして、親孝行も忘れない。この国の成長の秘密は親孝行にあることをみた思いだった。

中国では勉強ができることが、なんといっても大きい要素だが、家の手伝いもかなり重要と言える。少なくとも、家での素行がクラスの人気にまで影響を持っているようだった。

どこの国でも、子どもたちの中でリーダーになるのは、だいたい相場が決まっているが、日本だけは異常である。勉強のできる子もだめ、スポーツのできる子もだめ、体の不自由な子や成績のよくない子に親切なのもだめ、ましてや、家の手伝いをするかどうかとか親孝行かどうかなど、全く

のところリーダーの資格とは無関係である。

今、日本のクラスの人気者は、冗談のうまい子、人をからかうのがうまい子である。親切、親孝行、弱い子を助けるどころか、こういう真面目を「マジ」と言ってからかうのがうまい子――それが人気の秘密である。

日本の中学生は、世界の中学生からみると、いびつで異常な環境で育てられている。かつまた、中学生自身も異常である。これはなんとしても残念である。

大人自身が「そんなに働いてどうする」だの「うさぎ小屋の働き蜂」だのと、真面目を自嘲するのと子どもの異常さとの間には、深い関係があるようだ。大人社会の規範が次々と解放の方向（自由化）に向かってゆく時代にあって、学校だけは性の解放もしないのは当然としても、髪の毛が何センチ長いとか、スカートの丈が短かすぎるとか叱っている。世の中にしっかり背を向けざるをえないわけだが、社会の中でただ一人頑張っているのが、学校となってしまった。それだけに、生徒指導は極端にむずかしくなっている。社会のありとあらゆることの解放の中で、学校だけが規則の孤島になっている。

かくて、学校が持っている文化（学校文化）と、生徒たちが持っている文化（生徒文化）が、大きく乖離した。友人、仲間の人気者が、冗談のうまい子になり、真面目をあざ笑う生徒文化が大手を振ってまかり通っている。日本では、勉強ができる子が、クラスのリーダーになれないのも、ここに理由があるし、試験科目さえやればよいという事態を、子どもたちは「くさい」と意識し、真面目であることに極端に疑問を持つようになっている。受験競争の過熱が、生徒たちの心に深く、「いびつ」「異常」の影を落としているのだ。このような状況を本書では、学校の置かれた社会的位置、

その中での教師の立場、友人関係、いじめなどの非行、親の立場など、さまざまな角度から光を当てることとした。

本書では、特に、アメリカや中国の中学生との比較を通して、日本の中学生の特色を浮き彫りにしようとしている。このような異常な事態に遭遇して、われわれは、中学教育の改革をどう行なうべきかについて、筆者らの主張を盛り込んでいる。おおかたの批判を賜りたい。

一九八七年一一月

千石　保
鐘ケ江晴彦
佐藤郡衛

本文のおもな調査データは、以下の調査報告書による（本文中は〈　〉の名称で表記した）。

①『日米中学生・母親調査報告書』〈日米中学生・母親調査〉
(財)日本青少年研究所・(財)生命保険文化センター、昭和六〇年二月）

②『日米中学校教師調査報告書』〈日米中学校教師調査〉
(財)日本青少年研究所、昭和六〇年一二月）

③『中国の中学生・母親・教師調査報告書～中国・日本・米国比較研究』〈中国の中学生・母親・教師調査〉
(財)日本青少年研究所、昭和六一年九月）

目　次

V 親子関係

VI 中学生の生活と価値観

調査方法

I　中学生をとりまく
社会的土壌

1　学歴社会

残酷な「一五の春」

はじめに、「一五の春」がなぜ残酷な春になるのかをみておきたい。ヨーロッパでもアメリカでも、中学生はいきいき、のびのびと生活を楽しんでいる。日本とは違った事情があるからで、OECD（経済協力開発機構）はこれについて調査した。「日本の社会には出生による階級はないが、一八歳の大学入試によって階級が生まれる」

一九七一年、OECD教育調査団は、日本の教育を調査して、その特徴を大学入試に求めたのだった。日本通のライシャワー氏、ドーア氏も調査団員だったが、やはり入学試験による階級の発生を日本の教育の特徴としてとらえた。

調査団のメンバーであったヨハン・ガルツング氏は、日本での「社会的出生」について述べている。

ヨーロッパの社会では、家柄によって子どもの将来が決定される。靴屋の子どもは靴屋になる。それが当然で、だれもがそう思い、本人もそう思って靴屋になろうとするし、別の道を歩こうと思っても困難がつきまとう。だから、靴屋になるのに、むずかしい数学はいらないことになる。この子が他の分野でどんな優秀な頭脳を持っていたとしても、靴屋の子どもは、靴屋になるしか道がない。つまり、子どもの将来は生まれたときにもう決まってしまっているというわけだ。ヨハン・ガルツング氏の言う「自然的出生」は、このことを意味している。

日本では全く違う。どんな家柄に生まれたかは問題ではない。要はどんな高校、どんな大学へ入るかによって、将来が決まる。家柄ではなくて、学校の銘柄が重要になってくるから、だれの子どもとして生まれてきたか、つまり「自然的出生」に対して、日本では「社会的出生」とも言うべき状況にあるというのである。ガルツング氏は、このことについて、さらに、次のように述べている。

学歴主義の場合には、生物的出生（biological birth）の後に、社会的出生（social birth）が起こるという点を除けば、生まれながらに階級が決められる点は同じである。さらに正確に言えば、どの階級に所属するかは入学試験の際に決まる。そして、すべての出生の場合と同じように、社会的出生にも妊娠期間（入学試験のための準備期間）があり、生みの苦しみ（試験そのもの）がある。

入試制度が悪名高い試験地獄（examination hell）をもたらし、若者たちに大きな圧力となっている。この試験地獄は高校だけでなく、それ以前の学校にもカゲをおとし、大多数の高校生の生活をみじめなものにし、また味気ない勉強を強いている。しかし、この地獄は青年期の一時期に集中している。試験に合格して大学に入学さえすれば、青年たちはずっと平穏に、自分の個人的関心を追求する自由を与えられる。そして、いったん企業に就職すれば自動的に上昇移動が保証されるのだから、そうした自由はある程度まで、一生を通じて与えられることになる。

（『日本の教育政策』朝日新聞社）

たった一度の試験で、自分の前途を決定してしまうのだから、考えてみれば残酷な制度と言えるだろう。試験のための圧力が、学校生活のスタートから始まるアメリカ社会に比べれば、日本の制度はいささか不合理である。特に、実社会へ出てからやり直しの効くアメリカの社会制度は、やり直しの効かない日本に比べて上等と言えるかもしれない。

やり直しが効かない日本の社会

能力によって人間を選別し、順位づける制度は、なんらかの形で人々に圧力（プレッシャー）を与えるものだが、日本の中学生は特殊な状況に置かれていると言える。

西欧社会と比べて、中学生に加わる圧力は、親の関心によって、また一味違ったものとなっている。ＯＥＣＤ教育調査団は、日本の親は子どもの出世に格段の関心を持っていることも指摘する。はっきり言って、アメリカやヨーロッパの親たちは、自分自身に強い関心を持ち、子どもの将来については、無関心といってよいほど興味を示さない。それが個人主義の個人主義たるゆえんかもしれないが、日本の子どもは、親の期待を一身に背負って試験地獄を勝ち抜かねばならない。それだけ日本の中学生は、高校入試に小さい胸を痛めているのである。

やり直しが効くか効かないかは、高校入試に強いプレッシャーを与えるかどうかに関係がある。アメリカのように、実社会へ出て自らの不勉強に気づき、もし、改めて学習の必要を感ずれば、やり直すことができるのとは明らかに違う。日本ではこのやり直しが容易ではない。

日本の就業構造の基本は、新卒一斉採用方式から成っている。この新卒は文字どおり、はじめて社会へ出る新しい卒業生を意味し、学校と社会を出たり入ったりする人を新卒とは言わない傾向がある。純血主義と言ってよいと思われるが、ある企業へ入社するについて、他社の色に染まってい

る人材も好まれない。だから、本当にやり直しが効かないのである。それだけ、最初の入学試験が子どもの将来を決めるしくみになっている。

ＯＥＣＤの調査は、一九七〇年のことで、あれからもう一七年も経過した。当時は大学入試に問題の焦点が置かれたが、競争が激しくなるにつれて、大学から高校へ、高校から中学へと焦点は移行していった。現在の状況では、どの高校だとどの程度の大学という具合に、高校の銘柄によって、将来の予見が可能な状態にまでなってしまった。しかも、この高校入試は子どもの〝偏差値〟が決めるようになった。かくて、中学での成績が最も重要な位置を占めるようになってきたのである。

将来を決める偏差値

どんな将来を歩むかは、日本では中学での偏差値による。つまり、将来に向かって走るコースが、中学で分かれる。こうした分岐を「トラッキング」と言っている。アメリカ流に言えば、日本でのトラッキングは、中学にある。それだけ、中学の位置が重要になったのだし、事実、激しいトラッキング競争を反映して、中学で多くの問題が発生した。登校拒否、自殺、校内暴力、いじめ、家庭内暴力などは、深刻なトラッキングに対する子どもたちの爆発とみることができる。

中学の置かれた状況が、日本の社会構造、特に優良企業と学歴の結びつきに遠因がある。その縮図が中学に表れたということができるだろう。

もう一つ考えておかねばならないのは、学歴の内容が、ほとんど学力偏差値だけに依存していることである。学歴社会をつくっている器が社会構造なら、選別方法の偏差値主義が中身である。社会構造が学歴社会をつくりやすくしているのは確かだが、偏差値主義が具体的な学歴社会をつくったと言える。

臨時教育審議会（臨教審）でも、学力偏差値だけでの選別を改め、もっと多様な子どもの能力を評価するように提言した。

しかしながら、現実の姿は、道徳の時間中に数学の勉強をした方が有利に展開する。級友に不親切であろうが、いじめを扇動しようが、試験で点数のつけられる学力偏差値さえよければ、最後の勝利者になる。これは明らかに誤りであり、ゆがんだ社会と言うべきだ。正直者や他人に親切な者が、それなりに評価されるシステムをつくるべきである。それが臨教審の主張なのだが、残念ながら具体的にこのような評価をすべきだという提言をしなかった。実際上のことを考えると、人格特性などは点数になじまないし、父母から批判される〝えこひいき〟の問題もある。言うは易く、行なうが難いのが学力偏差値主義の改善である。しかし、現在の状況を一刻も早く変えねばならぬことも事実だろう。

2　子どもの社会化

反抗期が消えた

子どもの成長は、社会化の過程だということができる。別の言葉で言えば、しつけをするということでもある。一人の生徒が友人や先生、その他の人々との相互行為を通して、集団として必要な資質を学び、その集団や社会に適合する行動を発達させる。この過程が、社会化の過程である。

個人が社会化されることは、社会に参加する個人の役割を学ぶことでもあり、規範を逸脱した場

合には、社会的な制裁がとられもする。

中学生の年代では、昔からこの社会化が大きな課題であった。一四、五歳という年齢は、第二反抗期として、社会適合を拒否する傾向が強いからである。しかし、奇妙なことに、最近の中学生は大人や社会に対して反抗しなくなってきたのである。多くの心理学者たちは、日本の中学生に反抗期がなくなっていると考えている。

だいぶ前にあった事例だが、反抗と社会化を見事に示したケースがあった。一人の中学生は、こう言って親や学校に反抗した。

「そもそもぼくは夜型の人間だ。だから、朝七時には起きられない。いったいだれが学校の始業時間を八時半と決めたのか。ぼくはこんな規則を拒否する」——血圧が低くて、朝起きるのがつらいという人もある。反対に夜遅くまではとても起きていられないという人もある。まさに世の中十人十色だが、多くの人々の便利を考えれば、太陽の出ている間に仕事や勉強をする、それが共通の利益を生む。だから集団や社会で生活の依るべき基準を設ける必要があり、それが八時三〇分の授業開始であり、工場や会社の始業時間というルールである。彼はそれに反抗した。

第二反抗期は、まさしく社会化に対する反抗だったのだが、最近ではこの反抗の色合いがとみに希薄になった。それは大人になることの拒否にも通じる。子どもたちは八時三〇分始業に反抗し、やがて、これを正しいものとして、自分の価値基準として内面化する。この経過を経て社会の一員として成長する。反抗を失った子どもたちは、社会のルールを内面化しない。それだけ、集団や社会に深くコミットし、その規範を支持し、かつ、それを守ることに熱意を示さない。かくて社会としての結合が希薄化する。

大人社会の規範と中学生

大人になりたがらない中学生が多くなった。それは、反抗をしないことと深い関係があると言える。一般には「ピーターパン症候群」と呼ばれるこの現象は、大人の規範解放が生んだと言える。

努力すること、自分を犠牲にしても他人や社会に尽くすことなどといった目標、性についての禁止や統制を、大人が自ら解放していった。その結果として、規範を崩した大人社会に対して、子どもは反抗する必要がなくなったのである。反抗期がなくなりつつあるのは、この解放が大きな原因だろう。かてて加えて、子どもだから責任を追及されないという面もある。いろいろな規範が解放されて、中学生であってもなんでもできるようになった。と同時に、まだ、子どもだからと責任を追及されることもない。中学生にとってみると、いつまでも子どもであった方がよいことになる。かくて、ピーターパン症候群が堂々と広がっていくようになったのである。

もともと、子どもが大人になることを願うのは、一人前として扱われること自体の誇りがあり、また、大人になれば時間の使い方も、なにを消費してもよいといった自由や、性についての自由も獲得できるからである。その反対報酬として、責任を追及されることになるのだが、子どもにとってみれば、なんでもする自由だけがあって責任を追及されなければ、結構このうえない立場を持てる。ダン・カイリーは、このピーターパン症候群の中の無責任について、次のように言っている。

〔エンジェル・ベイビー〕

いたずらを見つけられたとたん、天使のように無邪気で甘い顔をしてみせる。たちまち、涙を浮かべ、「ボクがこんな悪いこと思いつくはずがないでしょう?」と、抗議す

る。そう言ったまま、押し黙り、唇を震わせ悲しそうな顔をするので、先ほどまでの怒りも忘れ、つい許してしまう。

〔おませ〕

先制攻撃こそ最大の防御と考えていて、親の批判が得意。パパやママがすぐに親の権威を振りかざす、と文句を言う。とにかく、口が達者で、おませな態度を取るので、親は諦めて引き下がるより手はない。

〔バカか、耳や目の不自由なフリ〕

わが子が無責任な子だとわかっているからいいようなものの、知らない人が見たら、脳に欠陥でもあるのではと思うかもしれない。彼らは責任逃れのために、バカか、耳や目の不自由なフリを巧みに演じる。「そんなこと言ったの、聞いた覚えないよ」「忘れていたよ」「あれっ、カウンターに置いておいたと言われたって見てないよ」——彼らはオツムさえ正常に発達していなければ、責任を問われるはずがないと思い込んでいる。

〔ブリッ子〕

気立てのいい仔犬には腹が立たないのと同じように、すなおなブリッ子は得だ、と直感している。言われたとおりにして、ニッコリ笑うものだから、つい大人たちも怒れなくなる。ただし、やるといっても、二度、三度、催促してからでないとお神輿を上げない。親がきついことを言わないので、子どもはだらしなくなり、子どものためにもよくない。

（ダン・カイリー／小此木啓吾訳『ピーター・パン・シンドローム』祥伝社）

ダン・カイリーの言うように、子どもの無責任態度が強いし、親や社会も規範を緩め、責任追及をしなくなってしまった。それに問題なのは、叱って刑罰を加えると、かえって萎縮して、可能性の芽をつんでしまうという子ども可能性説の根強さである。理解すること、愛情を持つことが金科玉条になっており、それが、子どもの社会化を妨げる大きな問題だろう。

確かに、〝子どもだから〟〝無限の可能性を持っているから〟という理由で、学校は子どもを警察へ引き渡すことをしない。教育という美しい響きが、他方でピーターパン症候群を奨励していると言えるかもしれない。これは、「為すべきこと」「してはならないこと」の規範を緩めた結果だと言える。しかも、どうやら、このような規範放棄は日本に特有の問題なのである。

社会と学校の乖離

大人たちが、なぜ、当然の規範を緩めたか。それが中学生を取り巻く社会的土壌の最大のポイントである。というのは、社会一般で規範を緩めながら、一人学校だけが旧来の規範を死守しようとしており、それがさまざまな中学生の問題を生んでいるからである。髪の長さ、ズボンの長さ、持ち物のチェックなど、些細なことにまでの統制を思い起こせば、社会一般と学校の隔絶を直ちに了解することができるだろう。

明らかに、社会一般での価値観や規範は、学校での価値観や規範と乖離している。そこが、学校経営も、教師の生徒指導をも著しく困難たらしめているのである。

大人が旧来の規範を解放したのは、人々が当然と考える社会目標・努力目標がなくなったからだろう。これまでの日本社会の目標は、努力すること、頑張ること、耐えること、我慢すること、自己犠牲を課すことだった。それが最近に至って怪しい存在となりつつある。

そんなに働いてどうする、うさぎ小屋の働き蜂、君から会社を取ったらなにが残るか、家族・友

人・会社・社会のために犠牲になったら、自分というものがなくなってしまう……日本社会が成立して以来、続いてきた絶対と思われる価値に疑問が持たれるようになってきた。

努力と自己犠牲は、絶対的価値を持っていたのである。いつでも、どこでも、だれにとっても最高の価値であり、そうすることですべての人から賞賛された。それが絶対的価値の意味である。この絶対的価値が揺らいで、消費することが美徳であり、貯蓄や清貧が必ずしも絶対的価値を持たなくなった。また、働きづめに働くことは、むしろ罪悪視され、もっとゆとりのある生活が価値あるものとされるようになった。性はタブー視されてきたが、今日ではもう限界と言えるまで解放され、禁欲や自制が絶対的価値を持たなくなってしまった。

日本の社会には、かつて絶対視された努力や自己犠牲が相対視されるようになり、これが絶対と言えるような価値がなくなったのである。

「隣りの太郎君のように、少しは勉強したらどう！」

多くの母親がいうセリフだが、社会に絶対的価値が失われ、すべての事柄が相対視されるにおよんで、子どもたちは、こう答えるようになってきた。

「いいじゃない。太郎君のように頑張り屋がいて、ぼくのようなのんびり屋がいて！」

この問答の受け答えは、絶対的価値が失われて、相対的価値が台頭していることを示している。太郎君の頑張りは絶対ではなく、したがって、ぼくらもそうなる必要がない。相対的であることが大切だというのである。

臨教審の答申も個性主義をうたった。個人の特性を生かし、全部の人と同じである必要はない。太郎君は太郎君、ぼくはぼくであってよい。つまり、今日の若者が最もよく使う言葉である「自分

なりに」「自分らしく」「自分に忠実に」こそ大切であり、相対主義こそ絶対的価値を持っているのである。

目を学校に転じてみると、ここだけは異質の世界、ひどく言えば異様な雰囲気を持った世界になっている。個性尊重とは言いながら、スカートの長さ、髪型など、あらゆることが相対主義であってはならず、絶対的規範を設けている。学校の規範は、社会の価値に逆行しているのである。

絶対的価値が崩壊して、広く相対化現象が横行しているのは、かつて歴史に類をみない現象である。しかも、相対化現象は振り子が反対方向に振られすぎた傾向があり、いずれ、正常な位置に戻ることが予想されるものの、現状は明らかによくない。

努力や自己犠牲は、時間・空間をこえた絶対的価値として認められるべきものだろう。ただ、現在はやや行きすぎの状態であるに過ぎない。このような問題状況にあることを、教師も親もともにまず認識し、そのうえで、この困難な状況と悩みを、生徒ともどもに考えつつ、あるべき正常な価値を取り戻す、このような姿勢が求められると言えるだろう。

失われた教師と親の権威

今日現在、かつての絶対的価値が失われたために、教師と親の権威がはなはだしく下落した。理由は明らかだ。そもそも教師や親にとっては、これまで行なわれてきた価値を子どもに教え、学ばせることが教育やしつけの目的だからである。

努力や自己犠牲を説いても、他方でそんなに働いてどうする、自分に忠実に、自らを大事にして、という価値が一般的である。そのために、教師と親の持っていた価値は、精彩を失い権威がない。それにつれて、教師も親も尊敬されなくなってしまった。教師を「先公」とさげすんだ呼称で呼び、親を「てめえ」などと呼ぶ。残念ながら、親の歩いた道、教師が学習した価値自体が下落したから

である。後にも詳しく述べるが、親と教師の「位置づけ」は、ここ一〇年くらいの間に、目を覆うばかりの凋落ぶりである。かつて教師は、「三尺下がって師の陰を踏まず」と尊敬された。それは教師自体がサラリーマン化したことよりは、教え導く内容自体が価値を失ったからである。むしろ、教師のサラリーマン化現象そのものも、新しい価値にとって代わられた結果と言えるだろう。

3　生徒文化と学校文化

揺らぐ二つの文化の狭間で

努力や自己犠牲を絶対的価値として、これを生徒に内面化しようとするのが、「学校文化」である。そこでは、よく学び、他人のために頑張る生徒が、先生からみて、よい生徒である。しかし、この教師の価値基準で言うよい生徒は、必ずしも、生徒仲間からみてよい生徒ではない。

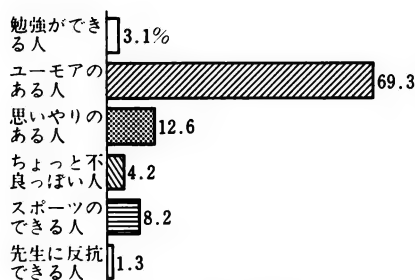
生徒たちの中には、学校文化と対立する「生徒文化」ともいうべき価値基準がある。特に、先生に反抗する生徒が、生徒文化ではよい生徒であることもある。生徒と接触する中で、この生徒文化の理解がなくてはならない重要な視点である。

かつては、学校文化と生徒文化の価値基準は、かなりオーバーラップしていた。なんと言っても、クラスのリーダーは、勉強もよくでき、スポーツもでき、品行方正な生徒だった。学校文化での価値からも、生徒文化での価値でも、優れて立派な生徒が、クラスでも職員室でも評価された。

時代が変わって、学校文化が社会一般の価値基準と乖離するにおよんで、独自の生徒文化が誕生

してきた。もともと、生徒文化の中核は、友人・仲間という人間関係での価値が強調される。時に学校の規制に反しても、友情に厚い行動が友人・仲間から評価される。このような素地の上に、社会の価値基準が崩壊するにおよんで、生徒間だけの文化が生まれるようになってきた。

生徒文化での価値基準は、人気者がだれであるかによって知ることができる。NHK世論調査部が行なった「中学生・高校生の意識と生活調査」（一九八二年）で、人気のある生徒を調べている。

この結果はI—1図で示すとおり、「ユーモアのある人」が他を大きく引き離している。「スポーツのできる人」「勉強のできる人」は、わずか八・二%、三・一%と、まるで人気がない。生徒文化の存在をはっきりと知ることができるだろう。

I－1図　人気がある生徒

（NHK世論調査部『中学生・高校生の意識』より）

面白いことに、生徒からみた先生の人気も、全く同じ傾向を示す。ユーモアのある先生が人気ナンバー・ワンだが、規則にうるさい先生（それが旧来の絶対的価値を背景としているのだが）は、全く人気がない。

アメリカでの人気者

アメリカの中学ではどうか。日本と比較することで、もう一つ、日本の状況が明らかになるだろう。アメリカにも生徒文化がある。しかし、学校文化との極端な対立はない。そこがまず、日本の現状と違うところだが、決定的に異なるのは、生徒文化にも正義という一本の筋がとおっていることだろう。

人気の条件は、①強いこと、②親切であること、③勉強がで

きること、の三つをあげることができる。中学生たちは、この三条件を備えた人物を尊敬する。

ロサンゼルスの下町の中学で、三つの条件を備えているとされる、小柄な黒人の女生徒をインタビューして、このイメージを具体的につかんだ。

彼女は、自分の人生目標は政治家になることだときっぱり答えた。そのために、毎日の生活を目標に合わせて過ごしているというのである。具体的に言うとこうだ。

彼女は教室の移動の際に、必ず足の不自由な子に肩を貸し、次の教室まで連れて行く。授業中には予習復習の効きめもあってかなり活発である。すべての授業が終わった後は、必ず二、三人の勉強が遅れた子どもを誘って学校の図書室へ行き、自分の勉強と遅れた子の手助けをする。家へ帰ってから、一時間、家業の雑貨店の手伝いをする。手伝いが終わってから、街の子どもセンターへ行き、犯罪や非行防止のためのキャンペーン、補導などコミュニティのために働く。夜は一時間自習する。

驚き、かつあきれて二の句がつげなかったのは、彼女が「コミュニティ活動をするのは、この地区は犯罪が多いから街のためになることはもちろんですが、これがやがて、私の政治基盤になると思っているからです」と答えた時だった。

彼女の友人たちは、彼女はとても強い人だと証言したのだが、改めて、強いということの意味を知らずにおれなかった。彼女が強いというのは、なにより、自分で決めたことをしっかり守っているからである。決して腕力が強いというわけではない。意志が強いという意味である。意志が強いことが人気条件のナンバー・ワンであることは、日本人に強烈な印象を与えずにはおかないだろう。彼女の行動は、アメリカの中学生流に言えば、まさにストロング（strong）なのである。

日本の人気者のユーモアの才に長けているという条件と、アメリカの強くて親切という条件は、きわめて対照的である。日本の人気者は、タレントの明石家さんまを思わせるが、強くて親切は、西部劇の主人公を思わせる。

アメリカを貫くマッチョイズム

アメリカ社会は、中学生のクラスだけでなく、いわゆるマッチョイズム（正義感に富んだ男らしさ）の気風が盛んである。電車の中の乱暴者を一発でのしてしまうような元気者、正義漢がマッチョイズムのイメージに合っている。

強くて親切であることとは、別の言い方をすると「正義」をも意味するだろう。アメリカのクラスには、校内暴力があるものの、いじめはない。それは、強くて親切のマッチョが、クラスの正義を守っているからである。残念ながら、日本のクラスには正義がない。強くて親切よりも、冗談を言って人を笑わせるのが人気の秘密だからである。この原因をたぐっていけば、日本でのかつての努力、頑張り、正義などの絶対的規範が崩壊したことにいきつく。ただ、クラスだけが異常ではないのである。

日本の中学の生徒手帳の多くは、たくさんの規則を書き並べている。それは、アメリカの生徒手帳も同じだが、一つだけ違った点がある。

日本の生徒手帳は、中学生らしく行動することを求めているのに対し、アメリカの生徒手帳は、「諸君がこの町の人々の税金によって勉強していることを忘れるな」と呼びかけている。中学生らしい行動とは、そもそもあいまいで、つかみどころがないが、たぶん、社会一般で行なわれている絶対的価値の中学生応用版の意味であろう。社会の絶対的価値が揺らげば、中学生らしさにも強い影響を与えるだろう。だが、アメリカの生徒手帳だと、税金でまかなわれていることを説いているの

だから、この事実は変わりようがない。生徒たちは納税した社会の人々に対して、義務を負っているることになる。この辺にも、日本の中学生の置かれている状況の違いをみる思いがする。

Ⅱ　受験体制の中で

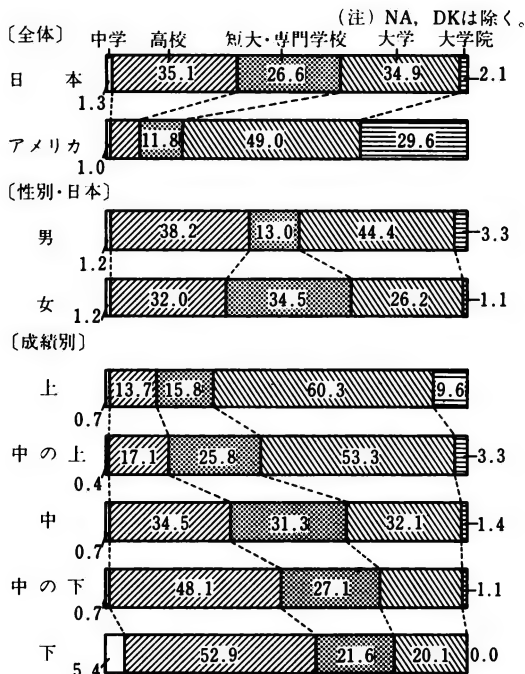
1 中学生の進路選択

様々な学校制度

日本の子どもたちは、小学校から中学校に進学すると、生活が一変する。教科ごとに異なる教師による授業、定期試験、クラブ活動、制服（標準服）など、変化は様々あるが、全員が高校受験を意識させられ、「受験体制」のただ中に置かれるということは、最も大きな変化の一つである。

ところで、中学生と受験とのかかわり、中学生の進路選択のありようは、学校制度や進学率の違いに応じて、国ごとに異なっている。

たとえばアメリカでは、州によって教育制度が違うが、多くの州で義務教育期間は一〇～一二年とされている（ちなみにカリフォルニア州は、六歳から一六歳までを義務教育とし、一八歳まで、つまり高等学校卒業まで教育を受けることを奨励している）。また、高校レベルが義務教育でない州でも、公立校へは希望者全員が入れる。したがって、高校受験ということは、一部のエリート私立高校に進学するごく少数を例外として、アメリカの中学生には無縁である。

それに対して今日の中国は、日本と同じように六・三・三・四制をとっており、義務教育は中学校までである。中学校卒業後の進路は、高等学校進学、専門学校（二年制の職業学校）進学、就職と分かれるが、高等学校は人口に比して数が少ないうえ、日本の名門受験校に当たる「重点校」というのが制度化されているので、受験競争は日本以上に激烈である（なお、中国では、義務教育で

ある小学校、中学校にも、重点校——もちろんすべて公立——が設けられており、エリート主義教育が徹底している)。

そして日本では、周知のように、高校進学率は九十数%であるが、高等学校は超一流校から底辺校までみごとに格付けされており、より上位の学校を目指しての激しい受験競争と、偏差値による「輪切り」進路指導が行なわれている。

II-1図　学歴希望
(日米中学生・母親調査)

中学生の進路希望

日本の中学生の進路選択の状況について述べる前に、中学生の進路希望(どの段階の学校まで行きたいのか、どんな高等学校に行きたいのか)についてみてみよう。

II—1図は、「日米中学生・母親調査」の結果である。これから、日本の中学生はアメリカの中学生に比べて、希望学歴が低いことが分かる。アメリカではいかに大学の「ユ

II－1表　中学生の進路希望

	全体	性別		学年別		
		男	女	中1	中2	中3
合計	1764	912	851	561	614	589
普通高校	76.3	69.6	83.5	78.8	75.8	74.4
職業高校（工業高校、商業高校、農業高校など）	18.7	24.9	12.1	12.9	19.9	23.0
高専	1.7	2.1	1.4	2.6	2.2	0.5
高校には行かず就職	0.7	0.7	0.6	0.9	0.5	0.6
その他	0.2	0.1	0.2	0.2	0.0	0.3
まだ決めていない、わからない、無回答	2.4	2.6	2.2	4.6	1.5	1.3

（NHK 世論調査部『中学生・高校生の意識』）

ニバーサル化」（一般化）が進んでいるとはいえ、大学進学率は五割前後である。したがって、ここに表れた数字は、アメリカの中学生は、学歴に関してかなり高望みをしているということを示している。

それに対して、日本の中学生の学歴希望は、やや高めとはいうものの、現実の進学率等にかなり近い数字となっている。また、成績と学歴希望との見事なまでの相関も、現実をほぼ正確に反映している。どうしてこうなるのだろうか。それは、アメリカの中学生にとって進路選択はまだずっと先の話なのに対して、日本の中学生にとっては、目前に迫った事柄だからであろう。アメリカの中学生の学歴希望は、己をわきまえない無謀さがあるとはいえ、「夢」にあふれている。ところが、日本の中学生は、どのぐらいの成績ならばどんな高校に行けるか、それぞれの高校の卒業生の進路はどうなっているかを、ことあるごとに知らされ、あきらめさせられる。社会学でいう「クーリング・アウト」（冷却）が、早くからなされるのである。

日本の中学生が「現実」を知らされ、クーリング・アウトさせられていく様子は、NHK世論調査部の「中学生・高校生の生活と意識調査」の結果からも推察できる。日本の中学生の卒業後の進路希望は、学年が進むにしたがって「普通高校」と「高専」（高等専門学校）が減り、「職業高校」が増えていく（II―1表）。（以下、同調査はNHK世論調査部編『中学生・高校生の意識』による）

一二歳から一五歳までの中学生期は、ちょうど思春期と重なっている。子どもから青年への移行期で、本来、大人になることへの期待と不安に心乱されつつ、将来への「夢」を育んでいく時期のはずである。「夢」をみることが許されない、あるいは、「夢」からあまりにも早く覚まされてしまうということは、人格形成の上からも大きな問題であろう。

志望校決定の過程　日本の中学生は、一年生の時から少しずつ、相対評価による成績、学年順位、卒業生の進学実績、内申点、偏差値、入試問題などの「現実」を知らされて、過剰な野心をクーリング・アウトされるが、二年生の後半から三年生になると、いよいよ具体的な進路指導が行なわれる。

公立高校の入学者選抜方法や学区編成は、都道府県ごとに異なるので、中学校の進路指導のやり方も地域によって差がある。東京近辺で言うと、たとえば神奈川県は、入学者選抜に際して、二、三年生の内申点と二年生の三月に実施されるアチーブメント・テストの得点の比重が大きいので、進路指導はかなり早くから行なわれる。東京都では、内申点は三年生二学期の成績で決まるので、受験する学校の最終決定はかなり遅くなる。

そこで、東京の公立中学校に通っていた私の子どもが体験した進路指導、志望校決定のプロセスを示すと、次のようになる。

4月　父母会で、進路選択、高校入試等についての詳しい説明がなされる。その際、前年度までの卒業生の進学状況も含めた詳しい資料が配られる。高望みをしないように、しかし、これからの努力いかんで大きく変わりうることが強調される。

学校で「月例テスト」が行なわれる。月例テストは業者が実施する模擬試験で、学校単位で参加し、費用は学校の教材費の一部として一括徴収される。これ以降月一回、一二月まで続けられる。テストの結果は、二週間ほどで郵送されてくるが、そこには各教科の得点、その学区内偏差値、三教科(英・数・国、私立高校の入試は、ほとんど三教科)合計、五教科(三教科+理・社、都立高校の試験科目)合計についての学内順位、学区内偏差値、都標準偏差値が記入されている。

5月　会場模擬テスト(会場模試)を受験する。会場模試は、学校に業者が来て申し込みを受け付け、各地区ごとに決められた会場を使って実際の入試のようなやり方で行なうもので、私立高校用と都立高校用と二種類ある。結果はやはり二週間ぐらいで送られてくるが、そこには、各教科ごとおよび三教科合計、五教科合計の得点、学区内偏差値、都標準偏差値の他、志望校の合格確率と「診断メッセージ」、私立高校用の場合は「学力と通学圏からみた〝適性校〟」などが記入されている。会場模試は五月から一月まで毎月、最後の方では月二回実施され、都立用、私立用の両方を受けることもできる。

第一回目の進路希望調査書を、家庭から提出する。そこには、都立、国・私立のどちらを第一志望とするかや具体的な志望校名の記入が求められる。

7月　第一回目の「三者面談」(担任教師、生徒、保護者による)が実施される。一学期の成績の絶対評価が示され、受験する学校の選定方針等について話し合われる。教師からは、かなりはっきりと、どの高校は無理だからあきらめるように、と言われる。

夏休み前の父母会。進路希望の状況、夏休み中の受験勉強のやり方等について話される。

9月　担任教師と生徒の個人面談が行なわれる。教師はかなり強い調子で、生徒が受験すべき高校を〝指導〟する。個人面談は、この後、志望校がスンナリ決まった生徒の場合で二回ぐらい、なかなか確定しない生徒の場合は四、五回行なわれる。

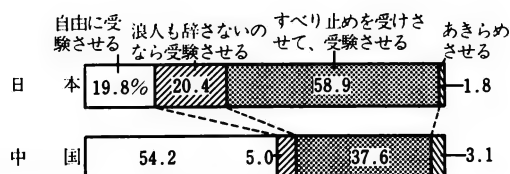
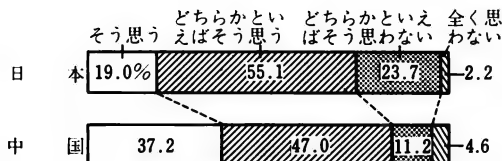
12月　二回目の進路希望調書を提出する。

二回目の三者面談が行なわれる。教師からは、二学期の成績に基づく実際の内申点が示され、先に提出した進路希望の当否が述べられる。この場で、第一志望校、本命校、すべり止め校等のほぼ最終的な選定がなされる。

1月　受験する高校を最終決定し、中学校に調査書の発行を依頼する。

2月　高校への願書提出。受験。

教師の意識・態度　以上のように、志望校の選定は、ほぼ一年かけて行なわれる。これは、教師にとっては、生徒、親の「無茶な願望」を打ち砕いて、全生徒を確実に合格させるプロセスである。日本の中学校の進路指導においては、一人も中学浪人を出さないこと(「一五の春を泣かせるな」)が至上課題とされ、そのためには情け容赦もなく、生徒、親の「かすかな望み」は打ち砕かれる。教師のエネルギーのかなりの部分は、生徒や親をあきらめさせることに費やされる。この点は、中国とはかなり違う。

II—2図は、「合格可能性の非常に低い高校を生徒や親が強く希望した場合、あなたはどのように対応しますか」と質問した結果である(「中国の中学生・母親・教師調査」「日米中学校教師調査」)。日本では「あきらめるように説得するが、聞き入れない場合、すべり止めに他の高校を受けさせた上で、

II-2図　生徒の高校受験への態度
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学校教師調査）

II-3図　中学校での指導は高校入試に左右されている
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学校教師調査）

その学校を受けさせる」というのが過半数を占めるが、中国では「自由に受験させる」が過半数に達している。

しかし、教師に「中学校での指導は高校入試に左右されている」との意見への賛否を問うと、賛成者の比率は、中国の方がずっと高い（II―3図）。

中国の調査は上海の中学校を対象としたもので、その中には「重点校」も少なからず含まれている。このような中国の大都市の中学校では、日本以上に教育活動が高校受験に振り回されているが、日本のような細かい進路指導は行なわれない。よくも悪くも、生徒と親の自主性に委ねられているのである。

受験勉強の評価

四分の三近くの教師が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えていることから分かるように、今日の日本の中学校教育は、高校受験の影響を強く受けている。

特に、三年生は（地域によっては二年生も）、学校の授業も含めてすべてが受験一色となっており、受験勉強に明け暮れる日々を、一年近く過ごす。

今日の状況では、受験勉強は、すべての中学生にとって避けて通れないものとなっているが、これに対する考え方は、中学生と親とで異なり、また、父親と母親とでも若干異なる。

「中学生・高校生の生活と意識調査」によると、「受験勉強は、学んだことをまとめるよい機会だ」と思っている人は、中学生、父親、母親ともに六割をこえるが、「受験勉強は、人間をきたえるよい機会だ」と答えた人は、中学生と父親は四五％なのに対して、母親は五〇％、「受験勉強は、よい学校へいくためだけで本当の勉強とはいえない」という人は、中学生では二九％だが父親と母親は五二％である（II—4図）。

中学生は、受験勉強に対して、いずれの側面に関しても肯定的な受け止め方をしている。しかし、親は、受験勉強はメリットもあるが本当の勉強とはいえないと、覚めた見方をしている。特に父親は、受験勉強に「学んだことをまとめる」という以上の価値を置いていない。父親に比べると母親の方が、受験勉強は「人間をきたえるよい機会」と考えており、より受験にのめり込んでいる様子がうかがえる。

これだけ身も心も翻弄されながら、なおかつ生徒に疑問を抱かせず、母親にもむしろ肯定的な見解を持たせてしまう日本の中学校の受験体制には、そら恐ろしさすら感じられる。

日本的進路選択・指導の問題点

日本の中学校は、高校受験の波に飲み込まれてしまっている。その中で、これまでみてきたような生徒、親の進路選択と学校の進路指導が行なわれているのだが、これには次のような問題点を指摘

A：受験勉強は，学んだことをまとめるよい機会だと思いますか。
B：受験勉強は，人間をきたえるよい機会だと思いますか。
C：受験勉強は，よい学校に行くためだけで本当の勉強とはいえないと思いますか。

II-4図　受験勉強の意味（父，母，子比較）
（NHK世論調査部『中学生・高校生の意識』より）

することができる。

①進路選択を行なう時期が早すぎる

社会が複雑化したため、今日では、人間の社会的成熟にきわめて長い時間を要するようになった。それにもかかわらず一四、五歳で人生の選択を迫るというのは、いかにも早すぎる。しかもこの年代は、思春期という、肉体的にも精神的にも不安定な時期である。

②リターン・マッチが難しい

日本の高等学校には、社会的評価、生徒の学力の点できわめて明確な格差があり、それが大学のピラミッド構造、職業や企業のピラミッド構造とストレートに結びついている。そこで、最初の進路選択で失敗すると、それが一生ついて回るしくみになっており、再挑戦の機会が乏しい。

③進路指導では失敗しないことに重点が置かれる

日本の中学校は、中学浪人を出すことをなによりも恐れるため、進路指導は安全第一となる。そこでは、生徒や親の希望をダウンさせるために、悲観的な見通しが強調される。このような過剰なクーリング・アウトは、チャレンジ精神を取り去り、否定的な自己イメージを定着させるため、人格形成上大きなマイナスとなる。

④学力が唯一の尺度となっている

日本の進路選択・進路指導に際しては、偏差値、内申点といった「学力」だけが判断の基準とされる。人間の能力の多様性、生徒の個性といったものは無視され、学力のレベルだけで「輪切り」にされる。これが、人間観・人間評価の画一主義化、高等学校の没個性化、不本意入学、高等学校への不適応などを生み出している。

2　偏差値

偏差値とは　標準測度（平均値からの偏差を標準偏差で割ったもの）を用いてテストの得点を二桁の正整数に換算した数値が偏差値である。分かりやすく言うと、テストの得点が全体の平均に対してどの程度よい方、悪い方に偏っているかを示した統計的な数値のことで、現在一般に用いられている「偏差値」は、平均を五〇、標準偏差を一〇として換算したもので、ふつう最高が七五、最低が二五となっている。

偏差値を用いると、問題の難易度に関係なく、集団の中での個人のおおまかな順位を見当づけることができるので、心理学などでは古くから使われていた。『新教育社会学辞典』（東洋館出版社）によると、学力テストの成績を偏差値で示す方式が、東京のテスト業者によって導入されたのは、一九六三年であったという。その便利さと、合理的、科学的体裁のために、偏差値はそれ以降急速に全国に広まった。

偏差値は、テストを受けた全員の中での個人の位置を示すものであるので、大規模な模擬テストが行なわれれば、その偏差値によって、実際の入試の合否をかなりの精度で予測することができる。そのため、塾や予備校だけではなく、学校でも積極的に受験指導に利用されるようになったのである。

そのため、生徒の学力上の位置だけではなく、全国の大学や高等学校まで偏差値によってランク

づけされるようになった。その結果として、生徒は、偏差値だけによって、受験する学校を選んだりあきらめたりするようになった。また、学校も家庭も、テストの点数だけを上げることに血眼になり、人間的価値まで偏差値でみるような「偏差値信仰」が一般化した。

よく偏差値を、日本の教育における諸悪の根源のように言う人がいる。しかし、偏差値そのものは、純粋に統計的数値であり、よいとか悪いとかいう類のものではない。問題なのは、偏差値そのものではなく、このような「偏差値信仰」、それを生み出した「偏差値体制」なのである。

実際の進路指導において、偏差値はどのように使われているのか。これも、私の子どもの体験を例として示してみよう。

進路指導と偏差値

都立高校の選抜は、現在、内申点と学力検査の成績を組み合わせて、総合成績が上位の者から合格者を決めていくようになっている。

内申点は、九教科をそれぞれ一・二・三・四・五と五段階に相対評価したものを用いる。九教科のうち、入試科目である五教科の評価はそのまま合計し、音楽・美術・保健体育・技術または家庭の四教科の評価は一・三倍して合計し、小数点以下を切り捨てる。さらに、内申書に特記事項がついていれば三点加えられて、内申点（換算内申）は最高五四、最低一〇となる。

学力検査の成績とは、入試の得点のことで、各教科一〇〇点、合計五〇〇点満点である。

次に示す表のように、内申は三点または四点きざみで一四の段階に区分し(内申段階)、入試の得点は三〇点きざみで一六の段階に区分（学力段階）する。この内申段階と学力段階を組み合わせて二二四段階の総合成績段階がつくられ、総合成績のよい者から順に合格者が決められる。

したがって、本人の内申点、入試の得点、高校の難易度（受験者の総合成績段階）が分かれば、

都立高校選抜総合成績段階表

（昭和61年春実施）

学力＼内申		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
		54・53・52	51・50・49	48・47・46	45・44・43	42・41・40	39・38・37	36・35・34	33・32・31	30・29・28	27・26・25	24・23・22	21・20・19・18	17・16・15・14	13・12・11・10
1	500〜470	② 1	③ 1	④ 1	⑤ 2	⑥ 2	⑦ 2	⑧ 4	⑨ 4	⑩ 6	⑪ 6	⑫ 8	⑬ 8	⑭ 10	⑮ 10
2	469〜440	③ 2	④ 2	⑤ 1	⑥ 1	⑦ 1	⑧ 2	⑨ 2	⑩ 4	⑪ 4	⑫ 6	⑬ 6	⑭ 8	⑮ 8	⑯ 10
3	439〜410	④ 3	⑤ 3	⑥ 3	⑦ 3	⑧ 1	⑨ 1	⑩ 2	⑪ 2	⑫ 4	⑬ 4	⑭ 6	⑮ 6	⑯ 8	⑰ 8
4	409〜380	⑤ 4	⑥ 4	⑦ 4	⑧ 3	⑨ 3	⑩ 1	⑪ 1	⑫ 2	⑬ 2	⑭ 4	⑮ 4	⑯ 6	⑰ 6	⑱ 8
5	379〜350	⑥ 5	⑦ 5	⑧ 5	⑨ 5	⑩ 3	⑪ 3	⑫ 1	⑬ 1	⑭ 2	⑮ 2	⑯ 4	⑰ 4	⑱ 6	⑲ 6
6	349〜320	⑦ 6	⑧ 6	⑨ 6	⑩ 5	⑪ 5	⑫ 3	⑬ 3	⑭ 1	⑮ 1	⑯ 2	⑰ 2	⑱ 4	⑲ 4	⑳ 6
7	319〜290	⑧ 7	⑨ 7	⑩ 7	⑪ 7	⑫ 5	⑬ 5	⑭ 3	⑮ 3	⑯ 1	⑰ 1	⑱ 2	⑲ 2	⑳ 4	㉑ 4
8	289〜260	⑨ 8	⑩ 8	⑪ 8	⑫ 7	⑬ 7	⑭ 5	⑮ 5	⑯ 3	⑰ 3	⑱ 1	⑲ 1	⑳ 2	㉑ 2	㉒ 4
9	259〜230	⑩ 9	⑪ 9	⑫ 9	⑬ 9	⑭ 7	⑮ 7	⑯ 5	⑰ 5	⑱ 3	⑲ 3	⑳ 1	㉑ 1	㉒ 2	㉓ 2
10	229〜200	⑪ 10	⑫ 10	⑬ 10	⑭ 9	⑮ 9	⑯ 7	⑰ 7	⑱ 5	⑲ 5	⑳ 3	㉑ 3	㉒ 1	㉓ 1	㉔ 2
11	199〜170	⑫ 11	⑬ 11	⑭ 11	⑮ 11	⑯ 9	⑰ 9	⑱ 7	⑲ 7	⑳ 5	㉑ 5	㉒ 3	㉓ 3	㉔ 1	㉕ 1
12	169〜140	⑬ 12	⑭ 12	⑮ 12	⑯ 11	⑰ 10	⑱ 9	⑲ 8	⑳ 7	㉑ 6	㉒ 5	㉓ 4	㉔ 3	㉕ 2	㉖ 1
13	139〜110	⑭ 13	⑮ 13	⑯ 12	⑰ 11	⑱ 10	⑲ 9	⑳ 8	㉑ 7	㉒ 6	㉓ 5	㉔ 4	㉕ 3	㉖ 2	㉗ 1
14	109〜 80	⑮ 14	⑯ 13	⑰ 12	⑱ 11	⑲ 10	⑳ 9	㉑ 8	㉒ 7	㉓ 6	㉔ 5	㉕ 4	㉖ 3	㉗ 2	㉘ 1
15	79〜 50	⑯ 14	⑰ 13	⑱ 12	⑲ 11	⑳ 10	㉑ 9	㉒ 8	㉓ 7	㉔ 6	㉕ 5	㉖ 4	㉗ 3	㉘ 2	㉙ 1
16	49〜 0	⑰ 14	⑱ 13	⑲ 12	⑳ 11	㉑ 10	㉒ 9	㉓ 8	㉔ 7	㉕ 6	㉖ 5	㉗ 4	㉘ 3	㉙ 2	㉚ 1

合格可能性が推定できる。進路選択・進路指導に際しては、通常、入試の得点は「月例テスト」や「会場模試」の得点および偏差値で、高校の難易度は過去の実績（どのくらいの偏差値、内申点の者が合格できたか）によって予測される。月例テストはクラス全員が受け、その結果は全部、教師に知らされるので、学校の進路指導では、主にこの結果が用いられる。塾でも進路指導が行なわれるが、この場合は、塾独自のテストおよび会場模試の結果が主に用いられる。

以上は都立高校の場合であるが、私立高校の場合は、内申書は参考程度で、学力検査の結果でほとんど合否が決まる。そのため、私立高校への進路選択・進路指導では、偏差値だけが唯一の頼りとなる。

多くの場合、受験生は都立一校と私立（国立）二、三校を受験するので、進路指導においては、模擬テストによる偏差値が非常に重要な資料となっている。学校や塾の教師は、生徒や親に対して、偏差値いくつ、内申点何点だから〇〇高校は確実だ、××高校は無理だと〝指導〟するのが通例である。

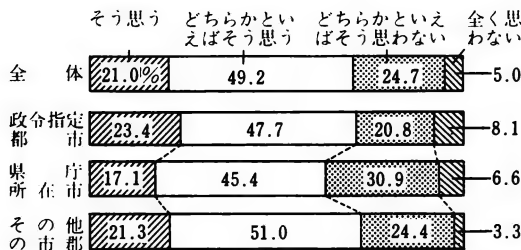
教師の認識

このような進路指導の状況を、中学校の教師もまた、「偏差値中心」と認識している。

II—5図は、日本の中学校教師に、「現在の中学校では、生徒の進路指導が偏差値中心になっている」という意見に対する評定を問うたものである（日米中学校教師調査）。二割以上の教師が「そう思う」と、約五割の教師が「どちらかといえばそう思う」と答えている。「偏差値体制」による教育のゆがみが大きな社会問題になっている中で、このように多くの教師が、中学校の進路指導は偏差値中心になっていると判断しているということは、きわめて重大な事実であると言えよう。多くの

教師は、問題を感じながら、それに代わる方法がないため、「仕方がない」とあきらめているのであろうか。

中学校の進路指導が偏差値中心になっている、と考えている教師は、地域別では政令指定都市と県庁所在地以外の市および郡部に多く、県庁所在市ではやや少ない。これは、大都市では私立高校が多く、ほとんど公立とかけ持ち受験するからで、小都市や郡部では高校の選択幅が小さく、数少ない高校がきっちりとランクづけされているからであろう。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	全く思わない
全体	21.0%	49.2	24.7	5.0
政令指定都市	23.4	47.7	20.8	8.1
県庁所在市	17.1	45.4	30.9	6.6
その他の市郡	21.3	51.0	24.4	3.3

（注）「進路指導が偏差値中心になっている」という問いに対する回答の比率。

II－5図　偏差値への教師観

（日米中学校教師調査）

偏差値に対する親の意識

それでは、進路指導が偏差値中心になっていることを、中学生の親はどう評価しているのだろうか。NHK世論調査部「中学生・高校生の生活と意識調査」では、中学生と高校生の親に対して「業者テストによる偏差値が、進路指導に使われることについてどう思いますか」という質問をしている。その回答結果は、次のとおりである。

●志望校を決めるのに便利だ（父二一%、母二五%）
●好ましくないが、やむをえない（父五六%、母五八%）
●全く好ましくない（父一九%、母一二%）

偏差値による進路指導を積極的に肯定する親は二割強であるが、やむをえないとする人まで合わせると、七割以上の父母が偏差値の利用を認めている。

中学生の親と高校生の親を比べると、「志望校を決めるのに便利

だ」と答えた積極肯定派は、中学生の父親が一九％、高校生の父親二三％、中学生の母親二二％、高校生の母親二八％というように、高校生の親の方が多い。これは、偏差値による進路指導は好ましくないと思っていても、実際に体験してみるとその「効用」を否定できないからであろうか。

また、親の属性との関連をみると、偏差値による進路指導積極肯定派は、大学卒の父親一五％に対して中学卒の父親二四％、大学卒の母親一三％に対して中学卒の母親二七％と、大学卒より中学卒の学歴の親に多い。これは、自分が受験を経験しておらず、高校入試について判断する手掛りの乏しい場合は、偏差値に頼らざるをえないからであろう。

ここにみたような親の意識は、教師の場合と同様に親も、偏差値支配を大きな問題だと考えてはいるが、それを打破できるような大幅な入試・教育制度改革の展望を持てないこと、偏差値に代わりうる有効な進路指導の手段を見出せないという、いわば「出口なし」の状況に陥ってしまっていることを示しているといえよう。

偏差値体制下の生徒

このような「偏差値体制」は、日本の中学生、および彼らのその後の人生を、次のような特徴を持ったものにしてしまう。

①早い段階で人生の先がみえてしまう

偏差値によって、自分の希望とは関係なく、入れる高校が決まってしまう。同時に、その高校へ行けば、どの程度のレベルの大学や企業に行けるか、大学を卒業した後どんな職に就き、どの程度まで出世できるか、あるいは、どの程度の人と結婚できるかなど、人生の見通しが、かなり先までついてしまう。なりたい人間よりもなれる人間、願望は一切拒否されて「できる」というハードルだけをみていく人間になる。

②少数のエリートとその他大勢への分解

偏差値競争に勝ち、一流高校→一流大学→一流企業というコースを歩むことができるのは、ごく少数にすぎない。大部分の者は、トップ・レベルに到達できず、希望とは違った人生コースを選ばされる。この両者は、偏差値という絶対的な能力評価をめぐる優者と劣者であるため、混じり合わず、異なったタイプの若者となる。

エリートの道に進めた者は、頭がよく勉強したからそうなれたと考え、優越感やエリート意識を強く持つようになる。一方、エリートの道に進めなかった者は、屈折した感情を持つようになる。否定的な自己意識を内面化し、やる気や冒険心を失ってしまう。

偏差値教育の功罪

偏差値は、確かに合理的で便利なものである。学力によって人をグルーピングする際のものさしとしては最も有効であり、これを利用することによって、入試の合否予測の精度は非常に高まり、受験指導はやりやすくなった。

しかし、偏差値は、無数のものさしの中の一つにすぎない。にもかかわらず、これが唯一のものさしとされ、これのみによって人間がふるい分けられ評価される今日の偏差値体制、それを生み出した偏差値教育には、やはり大きな問題がある。

偏差値教育の問題は様々あるが、その最大のものの一つは、学校、集団の同質化である。偏差値によって学校も受験生も細かくランクづけられ、偏差値のほとんど同じ者が入学してくるようになった結果、高校や大学は、生徒、学生の質が非常に均一化した。これは、一面では、指導しやすいというメリットをもたらすが、同質性が高すぎる集団は、平穏すぎて活気がなくなる。植物は同種のものだけが植わっていると成長が遅れるので、雑木がまじっている方がよい。大きくなりすぎた

単一動物のコロニーはやがて滅びると言われるが、人間も同じである。均質な集団の中では成長が遅れ、やがてその集団には病理現象が起きるであろう。アパシー(無関心)、いじめ、ドロップアウトの続出など。

もう一つの大きな問題は、創造性の喪失である。これからの日本は国際社会に向かって情報の発信者にならなければならず、そのためには創造性が非常に大切だが、偏差値教育では、これが育たない。正確な偏差値を出すためには、大量の受験生が同じテストを受け、その結果ははっきりした点数として出される必要があるが、このようなテストの場合、○×式やマークシート方式で、記憶や計算力を確かめるものにならざるをえない。したがってそのための教育は、もっぱら正解を覚えさせるものになる。このようなトレーニングからは、創造性の基礎になる、柔らかい発想、柔らかい頭は生み出せない。

3　塾

放課後の過ごし方

中学生の放課後や休日の過ごし方は、個人個人それぞれ違うと同時に、国によっても大きな違いがみられる。

まっすぐ家路を急ぐ生徒たちの日課はさまざまである。将来をじっくり見つめて一生懸命勉強する者、何もしないでボンヤリと夕食まで過ごす者、友だちを訪ねる者、電話で宿題の説明

をし合ったりの友人との長電話、ペットと遊ぶ者、ピアノレッスンに出かける者、バレエダンスを習っている者、TVやステレオそしてロックに熱中する者、町内のスポーツ行事に参加する者……。

このスポーツ行事は、学校とは完全に切り離されたアクティビティ（活動）で、市の主催する行事である。これには、ベースボール、フットボール、サッカー、バレーボール、バスケットボールや水泳などがあって、スポンサーを後ろ盾にして結成されるチームであるだけに多くのチームが相対する。

（瀬光悟・惇子『アメリカの中学生は、いま』毎日新聞社）

これは、アメリカの公立中学校で長らく教師をしている日本人夫婦が紹介する、アメリカの中学生の放課後の様子である。塾と宿題に追われ、遊び時間はテレビとマンガ、コンピュータ・ゲームで孤独に過ごすことの多い日本の中学生とは、かなり違う放課後の過ごし方といえる。

中国の大都市の中学生も、一部は日本の中学生と同じように、高校受験のための補習教室通いが忙しく、友だちと遊ぶ時間がなくなっている。

塾・教室・クラブ　II－6図は、日本、アメリカ、中国の中学生のうち、塾に行ったり家庭教師についている（アメリカでは「学校の勉強に関してレッスンを受けている」、中国では「補習の教室に通っている」）者、音楽・美術・踊りなどの習いごとをしている者、スポーツの教室やクラブに通っている者それぞれの比率を示したものである。

塾に行ったり家庭教師につくなど、放課後も勉強を習いに通っている中学生は、日本ではほぼ四

割に達するが、アメリカでは五%とごく少ない。中国ではアメリカよりは多く、一割をこえている。生徒の塾通いというのは、日本特有の状況である(韓国や台湾でも学習塾は隆盛を極めているという)が、中国の大都市部も、だんだん日本に似てきているようである。

これに対して、音楽・美術・踊りなどの習いごとをしている中学生は、アメリカが最も多く(二四%)、日本と中国はこれより七~一〇%少ない。

また、スポーツの教室やクラブに通っている中学生の割合は、アメリカは全体の三分の一、中国は四分の一であるのに対して、日本は八%弱と、一二分の一にも満たない。日本の中学生で放課後スポーツ・クラブ等に通っている者は、実にアメリカの四分の一、中国の三分の一もいないのである。

このデータから、日本の中学生の、アメリカや中国と比べて異常に多い塾通いは、この年代の青少年の心身の発達に不可欠な、スポーツ活動や芸術活動の機会を犠牲にして実現していることが分かる。このような生活が、日本の中学生の現在および将来にとって、決して好ましい影響をもたらさないことは言うまでもない。

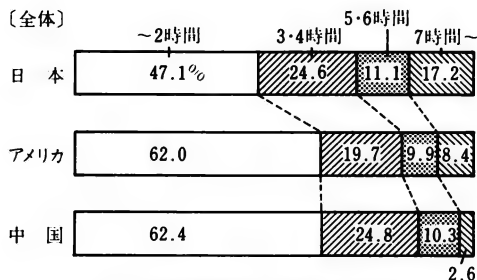
I-6図 塾や習いごと
(中国の中学生・母親・教師調査)

通塾の時間と日数

私の中学校一年生の娘は、現在ある大手の学習塾に、週二回、一回三時間ずつ通っている。今年高校一年生になった息子が中三のときには、塾に週三回通い、家庭教師に週二回来てもらっていた。一回当たりの時間は、いずれも三時間程度であった。私の子どもたちが塾に通ったり家庭教師についていた回数や時間は、特に多い方ではない。東京の

郊外住宅地の中学生としては、ごく平均的だと言えよう。

日本の中学生の塾（家庭教師も含む）をめぐる問題は、通塾率の高さもさることながら、それ以上に、時間の長さや回数の多さにある。

日本、アメリカおよび中国の中学生調査によると、塾や家庭教師についている者の週当たりの授業時間数は、日本では三時間以上が過半数を占め、七時間以上とかなり長時間の者が二割近くもいる。それに対して、アメリカと中国では、多くの場合（六割以上）は二時間以内で、それ以上といっても、せいぜい三～四時間の者が多く、七時間以上などというのは数%、実数で言えば、両国とも千数百名の調査対象者のうち六～七名にすぎない（II－7図）。

II－7図 塾や家庭教師についている時間
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学生・母親調査）

これをみても、日本の中学生の塾通いが、他国と比べていかにすさまじいか、その時間が生徒の放課後の生活をいかに奪っているか分かるであろう。

日本の中学生の通塾日数は、どのような高校を受験するかで、かなり異なる。

ここに、一九八五年に国立教育研究所の研究員らが実施した「学習塾に関する調査」の結果がある（この調査は、首都圏一〇一の学習塾を対象とした「塾経由調査」と、首都圏の公立小・中学校各一一校を対象にした「学校経由調査」からなる。結城忠・佐藤全・橋迫和幸『学習塾』ぎょうせい、一九八七年）。

（%）

	塾経由			学校経由		
	受験する	受験しない	未定	受験する	受験しない	未定
1～2日	9.8	16.6	19.2	29.5	29.3	31.7
3～4日	65.4	65.0	61.5	45.9	25.4	33.1
5日以上	17.5	8.0	10.1	12.3	7.0	5.1
NA	7.3	10.4	8.7	12.3	38.3	30.1
計	439人	163人	840人	292人	287人	1,068人

（注）学校経由のNAには、日数0日のものも含まれる。

Ⅱ-2表　校外学習の週あたり日数(中2)：有名高校受験予定別　（『学習塾』より）

これによると、週当たりの通塾日数は、有名高校を「受験する」という中学生（二年生）は、「受験しない」あるいは「未定」という中学生より、「塾経由調査」では週五日以上の者の比率が、「学習経由調査」では三～四日と五日以上の者の比率が、それぞれ二倍近く高くなっている。有名高校を受験しようと思っている首都圏の中学生は、二年生のときから、六割近くの者が、週三日以上塾に通っているのである（II—2表）。

通塾についての考え

それでは、日本の中学生は、どういう動機で塾に通うようになったのだろうか。塾をどの程度必要だと考えているのだろうか。（II—8図）。

①通塾の動機

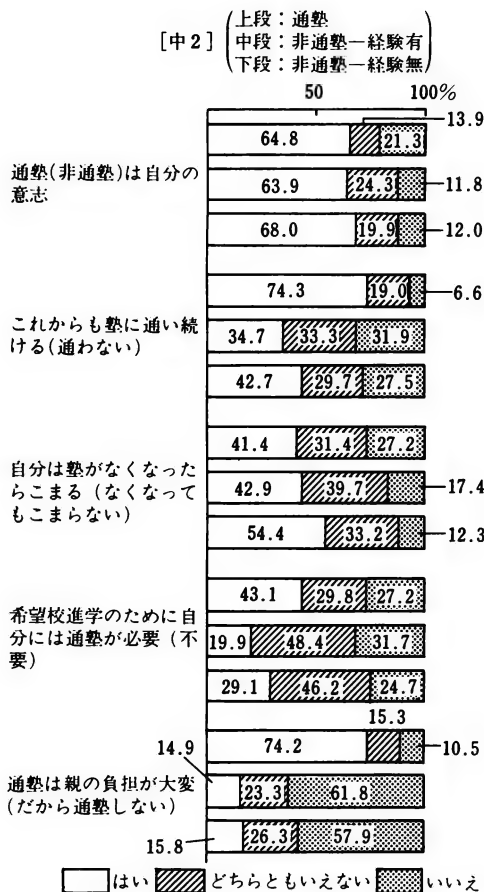
まず、塾に通っていること（非通塾者については、塾に通っていないこと）が本人の意志によるものかどうかについては、通塾者、かつて塾へ行っていたことのある非通塾者、一度も通塾経験のない者という三つのグループ間に、ほとんど差はない。いずれも、ほぼ三分の二の者が、「通塾（非通塾）は自分の意志だ」と回答している。

②今後の予定

これからも塾に通い続けたい（通塾者）、あるいは、これからも塾に通わない（非通塾者）かどうかについては、通塾者と非通塾者との間で差がみられる。

これからも塾に通い続けたいという通塾者は七五％もおり、これからも塾に通いたいとは思わないという非通塾者より、比率がずっと高い。さらに、同じ非通塾者でも、これからも塾に通わないという者は、一度も通塾経験のない者に多い。かつて塾に通っていたことがある場合には、今後再び通ってもよいとの志向を持つ者が少なくないのである。

③塾の必要感

自分にとっての塾の存在意義については、通塾経験のない者の場合はスッキリしているが、通塾

(注１)「通塾」は「今，通っている」者，「非通塾―経験有」は「前に通ったことがあるが，今は通っていない」者，「非通塾―経験無」は「一度も通ったことがない」者。
(注２)質問内容のうち，(　)内は非通塾者に対するもの。

II－8図　通塾についての考え：通塾・非通塾別(学校経由調査)
(『学習塾』より)

者と過去に通塾経験のある非通塾者の場合は、あいまいである。

非通塾者における「自分は塾がなくなってもこまらない」という者の比率は、通塾経験のない者では五五％近いのに対して、かつて通塾経験がある者では四割そこそこにとどまる。また、「自分は塾がなくなったらこまる」という通塾者も、同じように四割そこそこである。

非通塾者でも、かつての経験者は、塾がなくなってもこまらないと言い切れないところに、塾の影響力の大きさが表れているが、他方、現在通塾している者でも、塾がなくなったらこまると考えているのは多数ではないという事実は、注目に価する。

希望校進学という、具体的な目的との関連で問われた塾の必要性については、また事情が異なる。通塾者の場合、希望校進学のために塾が必要だという者の比率は四割強と、自分にとって塾は必要だという者とほぼ同じである。しかし、非通塾者においては、塾に通わなくても希望校に進学できると考えている者は、塾がなくてもこまらないという者に比べてずっと少ない。特に、過去に通塾経験のある場合はこの比率が二〇％と、全然ない場合よりも約二割低くなっている。

以上のように、このデータは、塾に通っている中学生は自分の意志で通っており、今後も通い続けようと思っているが、必ずしも塾が必要だからそうしているのではない、ということを示している。これは、派手な宣伝をくり返す塾の存在そのもの、あるいは多くの者が塾に通う事態そのものが、中学生を塾に向かわせているかなり大きな要因となっていることを示していよう。しかし、このデータは同時に、現在塾に通っていない者は、そのことにかなりの不安感を感じていること、塾は今日の日本の中学生にとって、それほど大きな存在になってしまっていることを示している。

通塾の効果と問題点

今日、東京など大都市とその周辺では、子どもが小学校高学年になると塾のダイレクトメールが舞い込み、勧誘の電話がかかるようになるが、中学入学前後と中二の後半には、これが激増する。きれいなカラー印刷で施設の立派さを誇ったものや、高校受験の実績を細かく刷りこんだものや、大小様々なダイレクトメールが洪水のように押し寄せ、親や本人に、断るのにほとほと苦労するほどしつこい勧誘電話が毎日のようにかかる。

このような塾の攻勢や、友だちや知り合いの子が次々と塾に通い出すという事態によって、中学生は、必ずしも絶対的な必要性は感じないにもかかわらず通塾するようになることは、先に示したとおりである。それでは、彼らは、通塾の効果や問題点を、どのように考えているのだろうか。

「学習塾に関する調査」では、「もしも塾をやめたら（非通塾者は、もし塾に通いはじめたら）どうなると思うか」という質問をしている。中学生についての結果は、次のとおりである。

「勉強がわからなくなる」（通塾者）四五・八％、「勉強がよくわかるようになる」（非通塾者）通塾経験者、未経験者ともに四二・七％。勉強が分かるようになる点での塾の効果を認める中学生は、半数以上にとどまる。

「勉強をあまりしなくなる」（通塾者）五六・七％、「勉強をよくするようになる」（非通塾者）それぞれ三一・六％と三四・七％（前は通塾経験者、後は未経験者、以下同様）。勉強の習慣化という通塾の効果について、通塾者の多くはこれを認めているが、非通塾者は認めていない。別の言い方をすると、通塾者は、塾に通っているから勉強するのだ、という気持ちが強く、学習に対して自主性が低い。

「学校の成績が悪くなる」（通塾者）四三・六％、「学校の成績がよくなる」（非通塾者）四二・四％と三九・一％。成績向上という通塾の効果についても、これを認める生徒は半数をかなり下回っているのである。

「生活のはりあいがなくなる」（通塾者）一四・三％、「生活のはりあいが持てるようになる」（非通塾者）一三・五％と一一・一％。この面での通塾の効果をみとめる生徒は、ほとんどいない。

「もっと遊べるようになる」（通塾者）五九・九％、「あまり遊べなくなる」（非通塾者）六八・八％と七五・六％。通塾は遊び時間を奪うという意識を、かなり多くの中学生はもっている。特に、塾に通っていない中学生にこの意識が強い。

「家でゆっくりする」（通塾者）七三・九％、「家でゆっくりできなくなる」（非通塾者）七一・二％と七八・二％。ほとんどの中学生は、通塾が家でのくつろぎの時間を奪うという見方をしている。

「寝る時間がゆっくりとれる」（通塾者）四六・七％、「寝る時間が少なくなる」（非通塾者）四八・六％と五〇・八％。通塾は睡眠時間を奪うと思っている中学生は、通塾者では半数に満たないが、非通塾者ではほぼ半数いる。

「学校の勉強を熱心にするようになる」（通塾者）二五・二％、「学校の勉強を熱心にしなくなる」（非通塾者）三〇・二％と三四・五％。塾に行くと学校の勉強がおろそかになる、とよく言われるが、そのように考えている中学生は少ない。しかし、通塾者に比べると非通塾者の場合、この比率はやや多い。（以上、前掲書二三二〜二三六頁）

以上のように、中学生は塾の効用をあまり信じていない。それに対して、塾のマイナスの影響は

かなり感じている。そうであるにもかかわらず多くの中学生が塾に通うのは、なぜなのだろうか。次にその一端を探ってみたい。

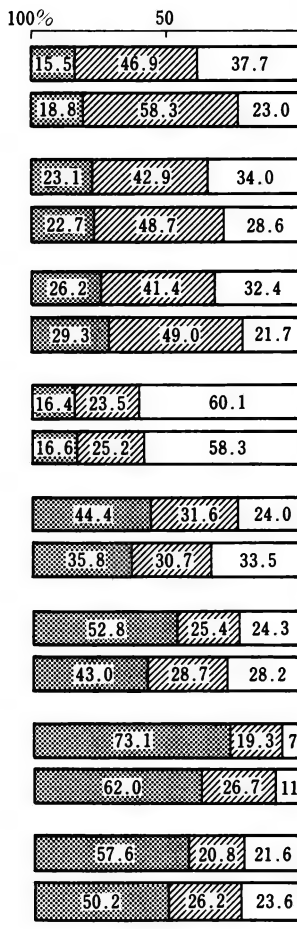
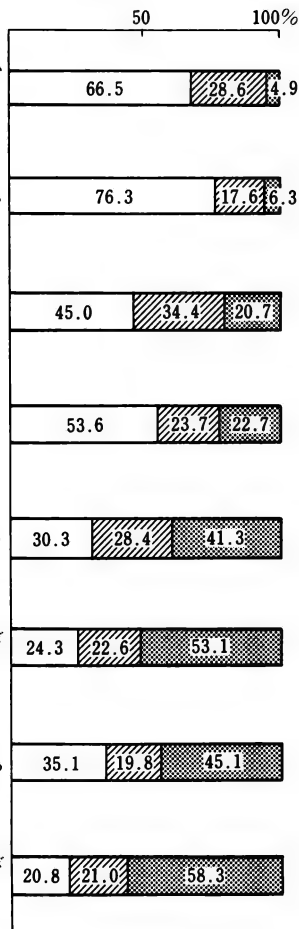
学校と塾

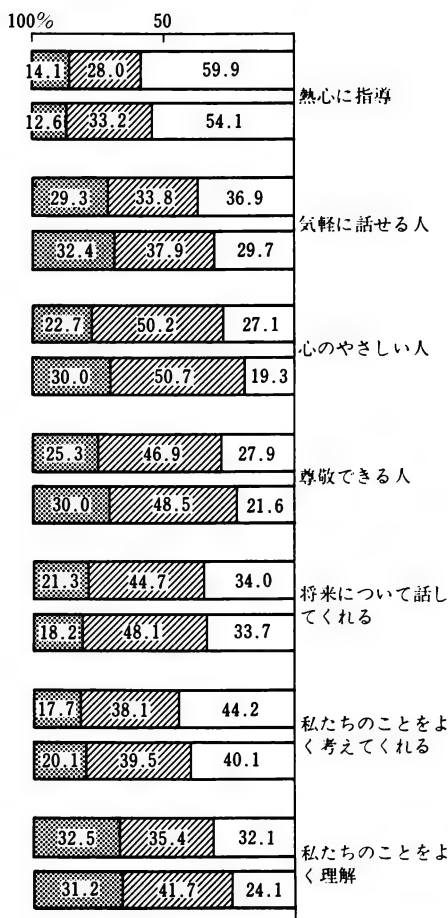
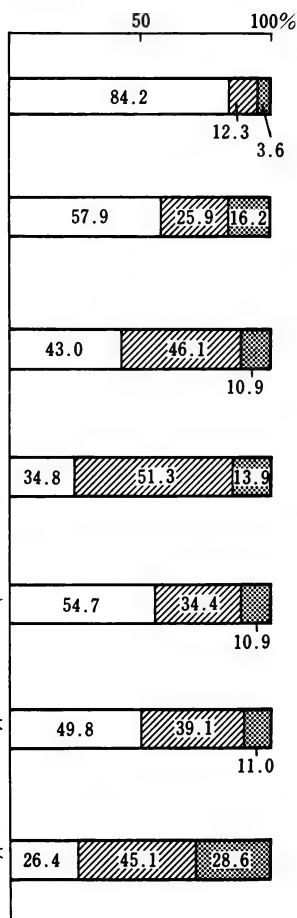
今日、塾の問題を語るときに必ずといっていいほど言われるのは、塾の繁栄の背後には、親や生徒の学校や教師に対する不満がある、ということである。

次ページII－9図は、八つの項目をあげて、学校と塾の勉強にそれが当てはまるかどうか、通塾者と非通塾者の評価（塾の勉強については通塾者のみ）を聞いたものである。

肯定的な面については、「わからないことは教えあう」を除いて、いずれの点に関しても、「そう思う」という者の比率は、塾についての方が高い。特に「指導がていねい」ということに関しては、塾と学校との間には、二倍以上の開きがある。「授業がよくわかる」に関しても、塾と学校に対する評価の差は大きい。学校の方が評価が高い、「わからないことは教えあう」にしても、その差はわずかである。

一方、否定的な面についても、それを指摘する中学生の比率は、塾に関しての方が高いものが多い。両方についての評価を行なっている通塾者の場合、「授業がはやすぎる」という者と「テストが多すぎる」という者の比率は、学校についても塾についても変わらないが、「勉強が多すぎる」という者と「宿題が多すぎる」という者の比率は、塾についての方が高い。特に、宿題が多すぎるという者の比率は、学校よりも塾の方が五倍近くも高くなっている。

次に、学校の教師と塾の教師それぞれについての評価の違いをみると、全体として塾の教師の方が評価が高い（II—10図）。ここでは七つの側面について、学校の教師、塾の教師それぞれの評価を問うているが、学校の教師の方が高く評価されているのは、「生徒をよく理解している」という点だ

I－9図　学校と塾の勉強（中２・学校経由調査）

（『学習塾』による）

Ⅱ-10図　学校の先生と塾の先生（中2・学校経由調査）

（『学習塾』による）

けで、しかもそれとて、それ自体としては決して高い評価ではない。

他方、塾の教師については、「熱心に指導してくれる」「気軽に話せる人」「将来について話してくれる」という点についての評価が高い。この三点と「心のやさしい人」については、学校の教師についての比率の一・五倍以上にもなるのである。

このように、中学生からは、学校よりも塾の方が肯定的に評価されており、学校の教師よりも塾の教師の方が高く評価されているのである。それほど効果があるとは思っていないにもかかわらず、遊ぶ時間や休息の時間を犠牲にしてまでも中学生が塾へ通う理由の一つは、この点にあると言えよう。

乱塾時代を終わらせるには

以上述べてきたように、日本の中学生は、他に類をみないほど校外生活を塾に支配されてしまっている。しかも、さらに問題なのは、中学生たちは、塾の効用をそれほど信じているわけではないのに通塾しているということである。

その背景としては、塾の激しい宣伝・勧誘と、塾に行かないことへの子どもと親の不安とともに、彼らの学校や教師への不信・不満があることをみてきた。

したがって、この「乱塾時代」を終わらせるには、一方で、野放しにされている塾のセールス活動になんらかの枠を設けたり、塾についての正確な情報を生徒や親に提供すると同時に、学校が信頼を回復することが重要である。そのためには、生徒や親の学校への不満が、主として指導のやり方や教師の人柄や熱意にあることを考えると、教師の資質の向上がなにより重要である。しかし、塾の繁栄の原因、親や生徒の要求と学校・教師の方針とのズレ、相互不信の原因を探っていくと、いずれも受験体制に逢着する。それゆえ、入試制度の抜本的改革を含む高等学校制度の改革が、問題の根本的解決のためには不可欠なのである。

Ⅲ　問題行動

1　中学生の問題行動

見えにくい問題行動

アメリカ映画『暴力教室』（原題『ブラックボード・ジャングル』一九五五年）の上映は、大きな衝撃を与えた。三〇年以上も前に、アメリカでは校内暴力が社会問題化していたのである。しかし、当時、日本では対岸の火事であった。

日本では、昭和五〇年代に入るや、青少年の非行発生率は上昇の一途をたどり、しかも非行の学校内化が進み、校内暴力、特に教師に対する暴力の嵐が全国各地に吹き荒れた。昭和五五年、校内暴力鎮圧のため、東京の中学校についに警官が導入されるという事態が起こり、だれの目にも「荒れる中学校」は大きく印象づけられた。

校内暴力の嵐が去ると、今度は集団いじめが蔓延し、大きくクローズアップされ、マスコミでも連日のように、「いじめ」問題が大きく取り上げられた。いじめを苦にした子どもが自殺にまで追い込まれるという悲惨な事件さえ発生している。

ごく最近になり、校内暴力は沈静化に向かい、いじめも数の上では減少した。しかし、それと裏腹にいじめの陰湿化、登校拒否、自殺といった内攻的な問題行動の増加傾向が指摘されている。事実、文部省の昭和六二年の「児童生徒の問題行動実態調査」も、そのことを裏づけている。

だが、こうした統計に表れる数字は氷山の一角にすぎない。校内暴力、いじめは、見えにくかったり、事実を隠したがったりするために、実際にどれだけ発生しているかを正確に把握することは

容易ではない。問題行動の裾野は、大人の想像以上に広がっている。

また、校内暴力やいじめがこれほどまでに深刻化したのは、そうした行動を支持したり、傍観したりする生徒が大勢いるためでもある。校内暴力やいじめは、ごく一部の子どもの問題ではなくなってきている。

問題行動の中心は中学生

ところで、こうした様々な問題行動の中心はなんといっても中学生である。非行発生率、校内暴力やいじめの発生件数、そして登校拒否、そのどれ一つとっても中学生が最も多くなっている。中学校の現場からは、「今、泥棒、ゆすりやたかりが最も多く日常化しているのは中学校だ」といった声さえ聞かれる。こうした状況の中で、今や中学校のあり方そのものさえ問われてきている。

非行、校内暴力に代表される反学校的な傾向も、登校拒否に代表される脱学校的な傾向も、その根は共通である。

これまでは、ともすると問題行動が起きるたびに、個別に対策がとられ、その問題行動をゼロに押さえ込むように動いてきたきらいがある。その結果、また別の問題行動が顕在化してきた。それは、あたかも〝モグラたたき〟の感すら受ける。事実、校内暴力を力で押さえ、管理主義を強化した結果、いじめが発生し、登校拒否が増えている。中学生の問題行動は、共通の土壌で育った同根異株である。

本章では、中学生の問題行動として、非行、校内暴力、いじめ、登校拒否の四つを取り上げ、その実態をふまえたうえで、共通の背景を探り、今後の指導や対策について検討していく。

2　問題行動の実態

(1) 非行の主役としての中学生

第三のピーク を迎えた非行

今日、非行は戦後第三のピークを迎えている。III―1図は、少年犯罪の刑法犯（少年非行は、①一四歳以上、二〇歳未満の罪を犯した犯罪少年、②一四歳未満で刑罰法令に触れる行為をした触法少年、③非行予備軍のぐ犯少年の三つに分けられるが、図は①の犯罪少年のうちの刑法犯で補導された少年の数である）の戦後の推移を示したものだが、これをみると大きく三つの山があることがわかる。

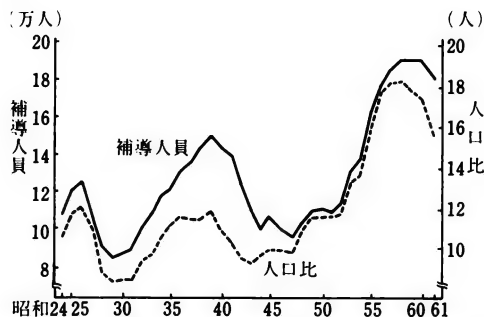
まず第一は、昭和二六年を頂点とする時期で、戦後の物質的貧困と社会的混乱がその背景になっており、いわば「貧困」からの盗みがおもな内容であり、また非行の中心は一八歳、一九歳の「年長少年」であった。

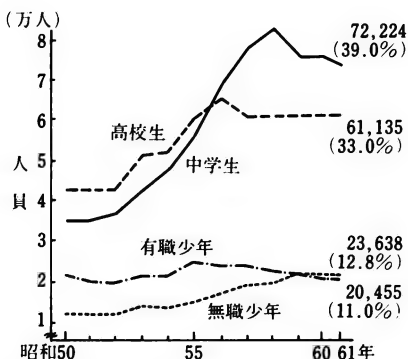
第二のピークは、昭和三九年の東京オリンピックの時期で、急激な高度経済成長とそれを基盤とした享楽的な風潮とがその背景をなしており、いわゆる遊び型非行が多発した。高校進学率が七割をこえ、非行の主役として高校生が登場してきた。しかし、この時期までの非行発生率は八～一二%ほどで推移しており、それほど大きな増加はなかった。

ところが、昭和五二年から上昇し続けてきた今日の非行は、きわめて高い発生率を示し、昭和五

八年をピークに減少に転じたものの、昭和六一年の非行発生率は、一五・七%と依然として高い水準で推移している。

非行というゲーム

今日の非行の最大の特徴は、なんといっても低年齢化だろう。昭和四〇年代に入り、非行の低年齢化が進み、今では一四歳～一五歳の「年少少年」が全体の半数をこし、その中でも一四歳が三割近くを占めている。この低年齢化傾向は、当然ながら生徒非行の増加を伴う。III－2図のように、犯罪少年中、四割が中学生で占められており、今日の非

（注1）人口比とは、同年齢層の人口1,000人当たりの補導人員をいう。
（注2）主要刑法犯とは、刑法犯のうち凶悪犯（殺人、強盗、放火、強姦)、粗暴犯（暴行、傷害、脅迫、恐喝)、窃盗、知能犯(詐欺、横領)および風俗犯(賭博、わいせつ）をいう。

III－1図　主要刑法犯少年の人員および人口比の推移
（昭和24～61年）
（『警察白書』より）

III－2図　刑法犯少年数(14～20歳未満)の学職別推移(昭和50～61年)
（『警察白書』より）

行の主役はまさに中学生なのである。

この他、第二の特徴として集団化、粗暴化、第三に一般化、第四に女子非行の増加、そして第五に学校内非行の顕在化などが指摘され、質的にも深刻化してきている。

このうち、中学生で問題になるのが、学校内非行と万引きの増加だろう。ここ数年、特に中学生の万引きが増えており、一種のゲームのように流行さえしている。中学生に聞くと、万引きの魅力は、「みつかるとヤバイというあのスリルと、大人をうまく出しぬいたという達成感、それに友だちと万引きをしたという秘密を共有することで一体感が強くなる」ことだという。社会的規範からみれば、れっきとした犯罪も、中学生にしてみれば、ある種のゲームであり、仲間との一体感を強める儀式のようなものなのかもしれない。こうした万引きに代表される比較的軽微な犯罪は、「初発型非行」(警察庁)と呼ばれるが、中学生の非行の大半はこの「初発型非行」である。

しかし、傷害、暴行といった粗暴犯も決して少なくない。その代表が学校内非行、つまり校内暴力である。

(2) 校内暴力

反抗の手段としての暴力

校内暴力は古くて新しい問題である。アリエスの『子供の誕生』の中には、西欧中世のころの学校にすでに校内暴力があったことが書かれている。しかし、今日的な形での校内暴力が顕在化してくるのは、やはり、ごく最近のことである。

わが国では、昭和四〇年代に入り、全国各地で、中学生や高校生の反学校的な傾向が目立ちはじ

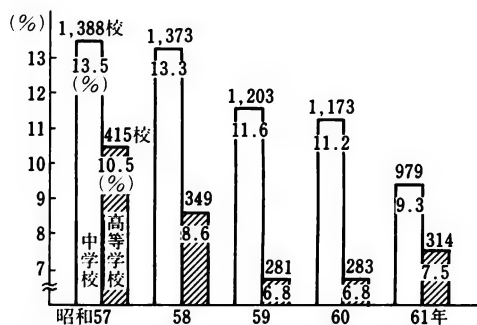
Ⅲ-1表　校内暴力事件の推移（昭和51～61年）

	総数			中学生による事件			高校生による事件		
	件数	補導人員	被害者	件数	補導人員	被害者	件数	補導人員	被害者
昭和51年	2,301	6,221	3,602	1,575	4,053	2,526	726	2,168	1,076
52	1,873	6,343	3,648	1,294	4,358	2,546	579	1,985	1,102
53	1,292	6,763	2,882	853	4,288	1,859	439	2,475	1,023
54	1,208	6,719	3,174	892	5,141	2,296	316	1,578	878
55	1,558	9,058	4,827	1,202	7,108	3,837	356	1,950	990
56	2,085	10,468	4,444	1,842	8,862	3,820	243	1,606	624
57	1,961	8,904	4,267	1,851	7,952	3,804	110	952	463
58	2,125	8,751	4,265	2,035	8,227	4,032	90	524	233
59	1,683	7,110	3,136	1,606	6,657	2,954	77	453	182
60	1,492	6,094	3,127	1,416	5,683	2,885	76	411	242
61	1,376	5,225	2,581	1,314	4,924	2,333	62	301	248

（『警察白書』昭和62年版より）

Ⅲ-2表　教師に対する暴力事件の推移（昭和51～61年）

	総数			中学生による事件			高校生による事件		
	件数	補導人員	被害者	件数	補導人員	被害者	件数	補導人員	被害者
昭和51年	161	416	234	139	330	204	22	86	30
52	215	405	252	193	342	221	22	63	31
53	191	330	245	174	296	226	17	34	19
54	232	510	328	211	473	304	21	37	24
55	394	798	532	372	763	503	22	35	29
56	772	1,612	943	738	1,542	905	34	70	38
57	843	1,894	1,162	825	1,790	1,123	18	104	39
58	929	1,989	1,286	914	1,943	1,266	15	46	20
59	742	1,369	914	732	1,349	904	10	20	10
60	672	1,164	924	658	1,117	905	14	47	19
61	627	1,038	913	622	1,033	910	5	5	3

（『警察白書』昭和62年版より）

Ⅲ－3図　校内暴力の発生学校数（公立学校：昭和57～61年）
（文部省『児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策』より）

め、その一部が暴力という手段で、学校や教師への反抗をしはじめた。その後、昭和五〇年代に入ると、番長グループによる暴力的な脅迫やリンチ事件、さらに他校生との抗争事件などの生徒間暴力が目立ちはじめ、五〇年代の半ば頃からは教師に対する暴力や学校の施設、設備の破壊という器物損壊に焦点が移ってきた。

では、実際に校内暴力はどの程度発生しているのだろうか。警察庁の調査からその実態を把握しておこう。

前ページⅢ—1表は、昭和五一年～六一年までの校内暴力の発生件数と補導人員、被害者の推移を示したものである。最も校内暴力が多発したのは、昭和五八年で、発生件数は二一二五件を数え、このうち九六％にあたる二〇三五件は中学校で発生している。また、中学校での被害者は四〇三二人、補導された中学生は八二二七人にも達した。校内暴力の大半は中学校で発生していることが分かる。

その後、減少傾向をたどり、昭和六一年の発生件数は一三七六件で、補導された中学生も四九二四人とピーク時のほぼ半数となった。

また、文部省の調査によると、昭和六一年には全国の公立中学校の九・三％にあたる九七九校で校内暴力が発生しているという。それでも一〇・七校に一校の割で発生していることになり、依然として大きな問題であることには変わりはない（Ⅲ—3図）。

校内暴力の中で、最も悪質な対教師暴力についてみると、六九ページIII—2表に示すように、昭和五六年から急増し、五八年が最も多く発生している。中学校では、昭和六一年に、六二二件発生し、一〇三三人の中学生が補導され、被害を受けた教師は九一〇人にのぼっている。ピーク時からみると三〇％以上減少しているが、それでも対教師暴力は、相当数発生していると言える。

校内暴力を起こす生徒

校内暴力はどのような生徒によって引き起こされているのだろうか。

文部省の調べでは、成績が下位の者が八五％に達し、性別では男子が八割以上、学年別では三年生が八割と圧倒的に多い。また、パーソナリティ特性では気ままな生活を好み、外からの規制に反発し、自己顕示欲が強く、自己中心的であるという結果がでている。

校内暴力の発生場所は「普通教室」二三・三％、「便所」一七・五％、「校外」一七・五％など、学校の内外どこででも発生している。生徒間暴力で最も多いのが「なぐる、けるなど」で八割に達し、比較的単純な暴力行為や腕力によるいじめやケンカに近い。対教師暴力の発生場所は「廊下等の通路」三四・四％、「普通教室」三二・三％、「特別教室」一五・七％など教育現場そのものの中で発生しており、その動機は「校則違反をとがめられて」三五・九％、「授業妨害を注意され」二九・七％、「非行を注意され」一〇・九％などで、教師の指導の過程で発生していることが分かる（全日本中学校長会「校内暴力アンケート調査」昭和五六年）。

こうした事実からみる限り、校内暴力を起こす生徒は、学校生活から疎外されていると言える。また、これは、彼らの学校や教師へのある種の復讐とみることもできる。しかも、その行為は単に一人芝居ではなく、多くの生徒が観客の役回りを演じていることが要注意である。観客の拍手喝采が校内暴力を引き立てているのである。

非行にしろ、校内暴力にしろ、公的な統計で把握される数は氷山の一角にすぎない。校内暴力で補導される中学生は一〇〇〇人中数人にとどまる。では、他の多くの中学生が非行や校内暴力と全く無縁なのだろうか。実際は、無縁どころか、

(3) 逸脱行動

校内暴力へつながる傾向

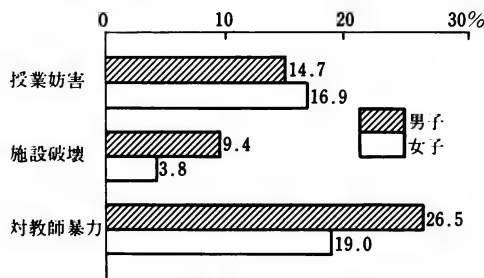
校内暴力につながる傾向を強く持ち合わせているのだ。

たとえば、総理府(現総務庁)が実施した「青少年と暴力に関する研究調査」(昭和五七年)によると、校内で暴力行為を起こしたいという生徒は、男子で三二・九%、女子でも二七・六%にも達する。具体的に、「授業妨害」「施設破壊」「先生への暴力」の三項目についてその願望をみたのがIII―4図である。「先生をなぐりたい」という者は男子で四人に一人、女子で五人に一人と非常に多い。また、「授業妨害」をしたいという者も男女とも一割をこしている。驚くべき結果だ。

また、中学生の逸脱経験をみても、問題行動の広がりがうかがえる。

逸脱行動の裾野

「日米中学生・母親調査」では、万引きなど法に触れる行為から学校内での逸脱にかかわるものまで、一一項目にわたりその経験の有無をたずねてみた。III―5図に示すように、アメリカほど深刻ではないが、それでも逸脱行動の裾野が広がっている。「友だちをいじめる」の半数をトップに、「遅刻」の三分の一、「先生への反抗」の四分の一、「学校の建物や公共の物を壊す」の二割、「深夜徘徊」と「喫煙」の一割などとなっており、学校内での逸脱経験が多くの生徒に広がっていることが分かる。また「喫煙」や「万引き」といった法に触れる行為も決して少なくない数字である。

この逸脱経験は、学校生活への適応—不適応と密接にかかわっている。次ページIII—3表に示すように、「学校生活が楽しくない」という生徒ほど逸脱経験が多くなっている。「喫煙」をみると「学校がとても楽しい」という生徒では五・六％しかいないのに対し、「学校が全然楽しくない」という生徒では実に三分の一にも達する。また、「万引き」をみても「学校がとても楽しい」という生徒は四・三％なのに対し、「学校が全然楽しくない」という生徒は二割にも達する。校内暴力や非行、さらに怠学のいずれをとっても、学校生活に適応していない中学生の逸脱経験はきわめて多くなって

III－4図　校内暴力の願望
（総理府青少年対策本部「青少年と暴力に関する研究調査」より）

（注）NA, DKを除いた比率を示した。

III－5図　逸脱経験（日・米：全体）
（日米中学生・母親調査）

Ⅲ-3表　逸脱経験

(%)

	日本			
	とても楽しい	いくらか楽しい	あまり楽しくない	全然楽しくない
友だちをいじめる	44.6	49.4	53.9	55.6
タバコをすう	5.6	9.3	15.4	33.3
無断外泊をする	3.2	4.8	9.0	16.9
シンナーをすう	1.1	1.6	3.6	7.8
万引きをする	4.3	5.0	13.0	21.1
先生に暴力をふるう	1.8	1.7	4.8	7.8
学校の建物や公共の物を壊す	15.6	19.4	25.0	37.8
遊びまわって夜遅くまで家に帰らない	6.0	9.8	17.5	23.3
授業をさぼる	4.9	5.4	13.3	28.1
遅刻をする	30.9	34.8	40.1	58.9
先生に反抗する	21.4	24.9	26.3	48.3

（注）NA，DKは除く。

（日米中学生・母親調査）

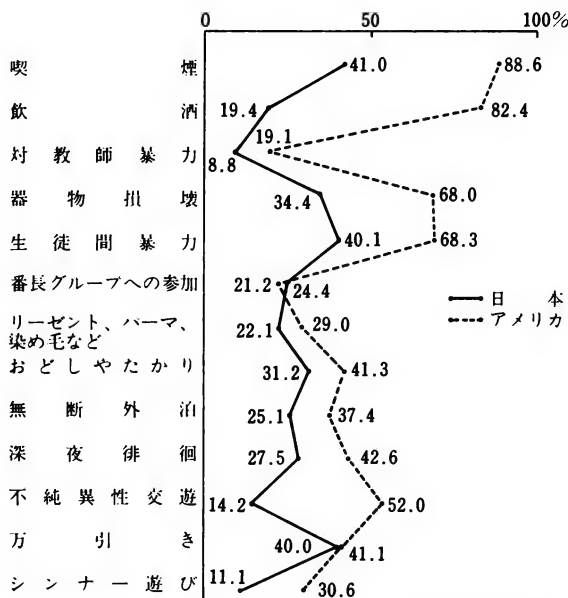
いる。このことからも、学校生活から疎外されている生徒の間に問題行動が広がっていることがよく分かる。

深刻さを増すアメリカの問題行動

中学生の逸脱経験の広がりを教師自身も深刻に受け止めている。「日米中学校教師調査」では、Ⅲ—6図に示すような一三項目について、「現在、担任しているクラスにそうした行動をする生徒がいるかどうか」を質問した。一三項目中、一二項目までは、アメリカの教師に「いる」という回答が多く、アメリカでの問題行動の深刻さが把握できる。特に、「喫煙」「飲酒」「生徒間暴力」「器物損壊」などが多いとしている。

実際にアメリカでは、学校で麻薬汚染と凶器の浸透が深刻化しているといわれる。たとえば、朝日新聞の小林泰宏氏は次のような事例を紹介している。ニューヨーク州の一九八五年の中学生調査では、「一度は麻薬の経験のある中学一年生」が六〇%もいるという驚くべき結果になっている。また、拳銃殺傷事件の多さにも驚かされるという。カンサス州ゴダードの中学三年生が、高性能ライフル銃を学校のホールで乱射し、校長が死亡、教師二人と生徒一人が負傷。犯人の生徒は戦争ゲームや軍隊が大好きだったが、成績はよく、動機は不明という。こうした拳銃殺傷事

件が続々と発生していると報告している（小林泰宏『アメリカで進む教育改革』朝日新聞社）。

むろん、日本ではまだアメリカほど深刻ではない。それでも、「喫煙」「生徒間暴力」、それに「万引き」については、四割の教師が自分の担任しているクラスにそうした行為をする生徒がいると答えている。この他、「器物損壊」「おどしやたかり」「番長グループへの参加」「リーゼント、パーマ、染め毛」「無断外泊」なども多くなっている。このように、教師自身、中学生の問題行動をかなり深刻に受け止めている。

（注）「いる」と回答したものの比率を示した。

Ⅲ－6図　問題行動の実態（日・米：全体）

（日米中学校教師調査）

(4) いじめ

現在のいじめの特徴

校内暴力に続き、いじめが深刻な広がりをみせている。そもそもいじめといわれる現象は、いつの時代にも、どの国でもみられるものである。しかし、今日のいじめは、これまでとは質的に異なり、その深刻化、陰湿化の度を強めているし、また弱いも

のいじめという非人間的な行為に走りながらも、罪悪感がみられず、しかもそれを傍観する子どもが大勢いるというのも大きな特徴となっている。

いじめはみえにくいために、その実態をなかなかとらえきれないのが実状であり、このことがますますいじめをみえにくくしている。いじめ問題が深刻であればあるほど、その実態を客観的に把握することが必要である。とは言っても、いじめの実態を把握することは、その概念が多義的であるためもあってなかなか容易ではない。

松本良夫氏は、いじめを重層的に把握する必要性があるとして、次の四層にいじめを整理している。第一層は、刑事事件や自殺事件につながる深刻ないじめ、第二層は、学校が公的に認知したいじめ、第三層は、「いじめ・いじめられ経験調査」に子どもが告白したいじめ、そして、第四層は「いやみを言われた」といった軽いレベルのいじめの四層である（松本良夫「『いじめ』の社会学的考察」深谷和子編『いじめ』現代のエスプリ二二八号、至文堂）。このうちどの層を対象にするかによって実態が異なることは言うまでもない。

まず、昭和六一年中に警察で認知し、事件として処理したいじめは、二八一件で、前年度と比較すると三五七件も減少している。また、いじめ関連事件で補導された少年は、八四五人で、このうち九割にあたる七七五人が中学生である。この警察が扱う事件は、いじめの域をこえた犯罪であり、非行事件である。

次に文部省の調査からいじめの実態をとらえてみよう。昭和六一年度中に全国の公立中学校の四三・一％にあたる四五三二校でいじめが発生し、また一校あたり二・三件の事例が認知されている。これを前年度と比較すると、大きく減少しているのが分かる。この数字は過少申告だという批判も

あるが、それでも学校が公的に認知したいじめになると、かなり日常化している。

いじめの日米比較

だが、こうした公的な統計だけでは、本当の実態をつかめない。いじめに関するいくつかの調査を通して、子どもの側から、その実態に迫ってみよう。

「日米中学生・母親調査」では、日本とアメリカの中学生のいじめの実態を調べている。いじめの日常化を端的に示すのが、いじめの被害・加害経験である。日本では、いじめられたことがあるという被害経験は三九・一%、加害経験は四七・六%。一方、アメリカではそれぞれ五八・一%と五一・八%で、日米とも中学生の間にいじめが日常のこととして広く浸透していることがうかがえる。

しかし、その質となると、日本とアメリカとでは大きく異なる。アメリカでは「生徒間暴力」という意味あいが強く、アメリカ国立教育研究所の調査では、調査対象となった一か月間のうちに一一%の生徒が、一ドル以上のお金をおどしとられており、また一・三%の中学生が他の生徒から暴力的被害を受けている。しかし、アメリカでは、日本のようにいじめが表面化していないし、陰湿化もしていない。アメリカの場合、いじめられることによって、学校生活に不適応をきたすことはほとんどないが、日本の場合、いじめが原因で学校ぎらいになっている生徒がアメリカの生徒の六倍にも達し、きわめて多くなっている。このことからも、日本の生徒のいじめが広く日常のこととして、浸透し、しかも陰湿化していることが理解できよう。

日本とアメリカのいじめを比較すると、日本のいじめの特徴がより鮮やかになる。日本ではいじめに対する歯止めが喪失しているようだ。「友だちをいじめることが中学生として絶対いけないことだと思うか」という質問をしたところ、「絶対にしてはいけない」と回答したのは、日本では六四・二%にとどまるが、アメリカではその数は実に九四・四%にも達した。

罪悪感欠如の日本のいじめ

このように、日本の中学生の場合、いじめが悪いことで、絶対してはいけないという意識に欠けている。こうした罪悪感の欠如が、いじめで多くの生徒を傍観させることになっている。「いじめを見たらどうするか」という質問をしたところ、III—7図に示すように、日本の中学生では、「止めに入る」というものが男女ともアメリカよりもきわめて少なくなっている。日本の中学生の対応としては、「見て見ぬふりをする」や「自分もいじめに加わる」が多くなっている。日本では、教室から正義が喪失してしまっているのである。アメリカでは、小さいうちからフェア、つまり公正さをしっかり教え込まれるため、弱いものいじめに対し、こうした反応を示すのだろう。また、アメリカの子どもは、いじめにあえば積極的に反抗する。小さいうちから「自分の大切さ」を教え込まれ、自己主張ができるように教育を受けているためである。この教育と、アメリカでのいじめが深刻になっていかないことと関係があるのは言うまでもない。

また、先に紹介した小林泰宏氏は、アメリカでのいじめが深刻にならないのは、もしいじめが起き、けがでもさせようものなら、親はすぐに訴訟を起こされ、多額の賠償金を要求されるために、歯止めがかかっているのではないかと指摘している。

		止めに入る	そっとなぐさめる	先生に言う	見て見ぬふりをする	自分もいじめに加わる
〔日本〕	男	24.9	28.0	5.9	30.5	10.7
	女	14.8	42.9	9.5	28.9	3.8
〔アメリカ〕	男	43.6	21.1	10.1	20.0	5.2
	女	35.2	27.0	13.5	21.6	2.6

（注）NA, DKは除く。

III－7図　いじめの対応（日・米：性別）

（日米中学生・母親調査）

日米比較を通してみると、日本のいじめの深刻さ、陰湿さ、さらに公然化などの特徴が浮かび上がってくる。日本のいじめの実態をもう少し詳しくみてみよう。

埼玉大学の教育社会学研究室が実施した調査（全国七地点、小学校七校、中学校七校の計二七八五名を対象）によると、個人のいじめの被害経験は小学校三年生三〇・七％、四年生二五・二％、五年生一二・九％、六年生一〇・四％、中学校一年生一六・五％、二年生七・九％と漸減している。学年の上昇とともに、いじめの被害が少数に集中していることが分かる。

また、クラスにいじめられている子どもがいるという回答は、平均で三一・四％となっており、全体の三割のクラスでいじめが発生していることになる。

いじめの場＝クラス

いじめの期間は、学年の上昇とともに長期化している。また、その方法も学年の上昇とともに、「おどし」や「金や物をとりあげる」といった暴力をバックにした金品強奪が増えている。

いじめの加害者は、小学校中学年では「特定の個人」が多いが、学年の上昇とともにそれは減少し、「グループから」が優勢になる。いじめの場所はどの学年をとっても「教室」が半数以上に達しており、学級がいじめの発生の主要な場になっている。このように、中学校でのいじめは、深刻化・長期化・集団化の色合いを濃くしている。学級がいじめ発生の主要な場であるとすれば、当然、いじめを学級内関係としてとらえる必要がある。

この点に関して言えば、大阪市立大学の森田洋司氏が中心になって実施した「いじめ集団の構造に関する社会学的研究」によって、いじめの四層構造（被害者、加害者、みてみぬふりをする傍観者、そしておもしろがってみている観衆）が明らかにされているが、埼玉大学の調査でもこれを参考にし、クラス内でのいじめの位置、つまり最近起きたクラス内でのいじめでどうしたかをIII―4

Ⅱ-4表　クラス内での「いじめ」の位置と学校生活

（%）

	全体	小3・4	小5・6	中1・2	学校生活		勉強が全く得意でない	スポーツが全く得意でない
					とても楽しい	楽しくない		
いじめられた	10.3	17.4	9.4	5.6	21.1	40.6	12.4	8.3
いじめられたが、いじめもした	14.5	22.3	14.2	9.0	28.2	22.4	6.4	6.4
中心になっていじめた	1.5	1.1	2.1	1.4	61.1	16.7	23.5	16.7
いじめに加わった	9.3	5.4	13.3	9.4	36.4	21.0	10.8	4.5
おもしろがって見ていた	5.3	3.8	5.1	6.4	23.8	20.6	12.9	9.5
止めようとした	16.3	25.3	17.5	8.8	47.9	10.9	5.2	2.6
なにもしなかった	42.8	24.5	38.4	59.2	31.9	16.5	9.2	5.3

（「現代学校における『いじめ』風土の解明」『埼玉大学紀要』第35巻増刊より）

表に示すように七つに分けてとらえてみた。「なにもしなかった」が四割と最も多く、他は一〜一六%までバラついている。これを学年別でみると、「中心になっていじめた」(加害者)は変化はみられないが、「いじめられた」(被害者)、「いじめられたが、いじめもした」(両義者)、「止めようとした」(制止者)、「なにもしなかった」(傍観者)は学年間で大きな変化がみられる。

過半数を占める傍観者の存在

先に指摘した少数の被害者への集中傾向と、正義派の後退は明らかである。逆に傍観者は、学年の上昇とともに増加し、中学生ではその数は過半数にも達する。また、「おもしろがってみている」という傍観に〝快感〟すら表明する快観派も学年の上昇とともにわずかながら上昇している。また、このクラス内でのいじめの位置と学校生活との関連をみると、被害者は「学校が楽しくない」というものが当然ながらきわめて多いが、一方、加害者では「学校がとても楽しい」が圧倒的に多い。しかし、加害

者では「勉強が不得意」「スポーツが不得意」というものが多い。学校での不成功にかかわらず、学校が楽しいという特性を持つのがこの加害群の生徒である。また、快観派も加害群も同様の傾向がみられる。快観派と加害群に象徴される今日のいじめの攻撃性が学校での不成功に根をおき、その欲求不満の発散となっていることがうかがえる（詳細は、久冨善之・佐藤郡衛「現代学校における『いじめ』風土の解明」埼玉大学紀要・第三五巻増刊参照）。

このように、今日のいじめは、子どもたちの価値観や規範意識になんらかの影を落とし、またそれに支えられているものと思われる。この点については、後に詳しく触れる。

(5) 登校拒否

急増する登校拒否

ごく最近になり、登校拒否が急増してきた。一口に、登校拒否といっても、その意味するところは多様である。長年、登校拒否の相談と研究に携わってきた小泉英二氏によると、登校拒否は次の五つに分類されるという。

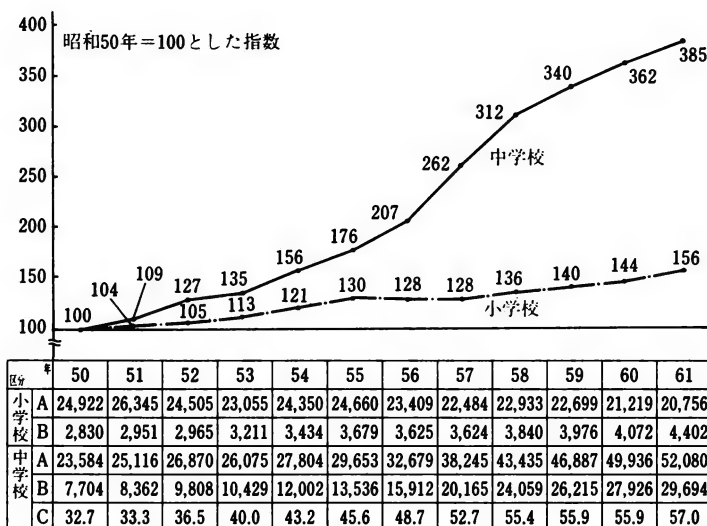
第一は神経症的登校拒否で、これはさらにAタイプ（優等生の息切れ型で、親からの心理的挫折、自己内の葛藤に起因するもの）とBタイプ（甘やかされタイプで、社会情緒的に未熟で、困難や失敗を避け、安全な家庭内に逃避するもの）の二つに分けられている。第二は精神障害（精神分裂病、うつ病、神経症など）によるもの、第三は怠学傾向、第四は積極的、意図的な登校拒否、そして第五は一過性の登校拒否の五つである。このうち、特に多いのが、怠学と神経症的な登校拒否であるという（小泉英二編『登校拒否』学事出版）。怠学は昔からみられたが、神経症的登校拒否は、専門家の間で昭和三〇年頃から注目されはじめ、四〇年代の後半から社会問題化してきた。

こうした怠学や神経症的な登校拒否の実態はなかなか把握できない。ただ、一つ手がかりになるのが、文部省の「学校基本調査」にある「長欠児童生徒数の推移」である。これは年間五〇日以上、欠席した生徒数を調べたものだが、その理由に「学校ぎらい」の項目が設けてある。文部省が「学校ぎらい」の項目を設定し、その実態把握にのり出したのは昭和四一年のことだが、当時、「学校ぎらい」を理由に長期にわたり欠席していた中学生は、一万二二八六人で、長欠者中二八・九%を占めていたにすぎない。その後、「学校ぎらい」は減少傾向をたどっていたが、昭和五一年頃から増加傾向をみせはじめ、五七年には「学校ぎらい」を理由に欠席している中学生は二万人をこえた。そして、昭和六一年現在、長欠者の五七・〇%にあたる約三万人の中学生が「学校ぎらい」となっている。その出現率は、生徒一〇〇〇人に対し、約五人となっており、過去一〇年間で実に四倍近くにも急増している。これは生徒数一〇〇〇人規模の中学校一校に五人ほど、学校ぎらいで長期にわたり欠席している生徒がいることになり、無視できない数字になっている(Ⅲ—8図)。

「学校基本調査」にみる登校拒否

実際に相談にあたっている東京都立教育研究所の統計では、昭和四〇年頃から「登校拒否」が相談のトップになったが、それでもまだ、登校拒否は相談件数の二割ほどにとどまっていた。それが五三年には全相談件数の半数をこえ、現在では六割近くが登校拒否で占められる。「学校ぎらい」というあいまいな統計だが、現在の登校拒否の実態の一端が把握できる。

最近では、登校拒否の概念を厳密にしようという動きがみられ、怠学と神経症的な登校拒否をはっきり分けるべきだという主張もある。実際、文部省でも神経症的登校拒否と怠学を分け、その実態を昭和五七年に調査したが、その結果、神経症的登校拒否が全体の六割を占め、これがきわめて

区分		50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
小学校	A	24,922	26,345	24,505	23,055	24,350	24,660	23,409	22,484	22,933	22,699	21,219	20,756
	B	2,830	2,951	2,965	3,211	3,434	3,679	3,625	3,624	3,840	3,976	4,072	4,402
中学校	A	23,584	25,116	26,870	26,075	27,804	29,653	32,679	38,245	43,435	46,887	49,936	52,080
	B	7,704	8,362	9,808	10,429	12,002	13,536	15,912	20,165	24,059	26,215	27,926	29,694
	C	32.7	33.3	36.5	40.0	43.2	45.6	48.7	52.7	55.4	55.9	55.9	57.0

A＝長期欠席者総数，B＝「学校ぎらい」を理由とする長期欠席者数，C＝B/A(％)

Ⅲ-8図　「学校ぎらい」を理由とする長期欠席者数の経年推移(小・中学校)
(文部省『児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策について』1987年より)

多いことが判明した。こうしたことからみて、現在では登校拒否を「登校しなければならない、登校したいと思いながらも、登校できない心理的機制から不登校状態に陥り、様々な身体的症状をくり返すこと」と定義している。

登校拒否の症状

では、登校拒否はどのような症状がでて、そしてどのような経過をたどるのだろうか。一般的に、臨床家の観察では、①初期症状、②暴力、③怠惰という状態が複合的に表れるという。朝、起きてこない。起きても、腹痛、頭痛、吐き気などの身体症状を訴える。親は病気かと思い、病院に連れていくが、「大したことはない」と言われ、本人も午後になるとケロッとしているが、翌朝になるとまた同じことをくり返す。このことから「午前八時の頭痛」とも言われる。親が強く登校をす

すめると、暴力をふるうようになる。いわゆる家庭内暴力である。登校拒否と家庭内暴力とが表裏一体であると言われるゆえんだが、家庭内暴力は時として想像できないほどひどい。母親をなぐり、けり、髪の毛をつかみ、家中ひきずり回したり、時には刃物で追いかけまわすこともある。渡辺位氏が編集した『登校拒否・学校に行かないで生きる』（太郎次郎社）には、登校拒否のなまなましい体験が書かれている。

母が、なにがなんでも学校へ行かそうとしましたが、そういう態度がすごく気にいらなくて、暴力こそふるわなかったけど、紙をちぎって部屋中ばらまいてみたり、食事を部屋までもってきてくれても、少しだけ食べて、あとは母が憎いというか、わかってくれないから、机ごとひっくり返してしまうとか、いろいろ抵抗しました。……

「学校に行かないと離婚する」などと母親がウソをついておどかすから、「ウソつけ！」って、刃物をもって台所をメチャクチャにしたり、なぐったりしたこともあった。はらがたって、はらがたって……

このように、主に母親への暴力をくり返す。こうした状態と並行し、怠惰な生活も前面に出てくる。自分の部屋に閉じこもり、絶対に人を部屋に入れない。生活時間は逆転し、昼間中寝ていて、夕方起き出しては、朝までゴソゴソなにかやっている。顔も洗わず、風呂にも入らない。こうした怠惰な生活がしばらく続く。それは人によって異なるが、何か月か、あるいは何年間か続く。その後、やがて回復期が訪れるのである。

登校拒否の要因を探る

登校拒否の要因は複雑であり、はっきりしたことは分かっていない。竹内常一氏の近著『子どもの自分くずしと自分つくり』は、われわれの登校拒否の理解を深めてくれる。登校拒否の子どもたちは「親や教師、家庭や学校を支配的な他者として自己の中にとりこんでいる。そして、かれらの自我はこの支配的な他者に呑みこまれ、すすんで自己を抑圧し、他者の要請に合わせたニセの社会的自己をつくる。これこそが彼らを強迫的にする大きな原因である」という。つまり、親や教師の期待に満ちた「まなざし」(「内なる他者」)とたたかいながら、それまでの自分をつきくずし、「新しい自分」をつくりあげていく表れであるという。氏はこのことを「思春期統合」と呼んでいる(竹内常一『子どもの自分くずしと自分つくり』東京大学出版会)。竹内氏の指摘は、中学生の登校拒否を理解する上で非常に示唆にとんでいる。

また、精神科医の河合洋氏も、臨床的な事例から、登校拒否を単に疾患としてではなく、「一過性のいわゆる思春期反抗の一つの表現型」という指摘をしているが、これも先の竹内氏の指摘と軌を一にするものだろう(河合洋『学校に背をむける子ども』NHKブックス)。

「学校的なまなざし」にとらわれ、そこから抜け出そうとして、脱学校的な態度をとっているのは、ごく一部の生徒にとどまらず、広く普通の中学生の中にも広がっている。

広がる脱学校的態度

たとえば、山村健氏が埼玉県の中学生に対し行なった調査では、「朝、学校へ行く時間になると元気がなくなり、おなかや頭が痛くなることがある」というものが一二・〇%、「学校に行くことが不安になったり、こわくなったりすることがある」というものが二五・三%、「学校に行かなければならないとわかっていても、どうしても行く気にならないことがある」というものは実に三一・八%にも達することが報告されている(山村健『現代青

少年の発達阻害病理』教育開発研究所）。脱学校的な態度も、今日の中学生の間にかなり、広がっているとみなければならない。それは、「学校的なまなざし」からの離脱の表れでもある。

3　問題行動の背景

(1) 生活への抑圧

中学生に集中する問題行動　非行、校内暴力、いじめ、登校拒否のどれ一つとっても、中学生に最も多く発生している。これはなぜなのだろうか。しかも、ごく一部の生徒にとどまらず、広く一般の生徒にも反学校的な傾向や脱学校的な傾向が広がってきている。学校は問題行動の発生の場として、単なる被害者という立場にとどまらず、問題行動の発生になんらかのかかわりをもつことはもはや疑いのないところだ。つまり、現代の中学生の問題行動の共通の土壌として、学校の肥大化、硬直化、形式化を指摘できる。その最も大きなシワヨセが中学生にきている。校内暴力やいじめは、学校から疎外された子どもの反発であるし、登校拒否や自殺は学校への適応過剰がもたらした破綻である。

中学校の問題行動は、今日の学校化された社会の当然の帰結であると考えられる。現代の子どもたちは、時間的にも空間的にも、そして心理的にも学校にしばられ、学校への適応を強いられている。いわば、学校中心の生活を強いられているのである。特に、高校入試をひかえた中学生でこの

Ⅲ－5表　中学生の平日の放課後の生活（日・米比較）

（%）

	全然しない		30分以内		1時間以内		2時間以内		2時間以上		NA	
	日	米	日	米	日	米	日	米	日	米	日	米
部活動をした時間	52.8	71.0	5.5	8.9	13.7	6.9	15.2	4.9	8.6	5.2	4.3	3.0
家で勉強した時間	13.1	18.4	12.6	26.1	19.4	25.0	25.0	16.9	26.9	10.3	3.0	3.4
塾で勉強した時間	74.4	73.5	0.5	12.2	4.0	7.0	10.7	2.5	2.6	2.1	7.7	2.7
友だちと遊んだ時間	72.8	15.8	8.5	14.5	6.4	13.6	3.5	17.3	3.6	36.7	4.7	2.2
テレビをみた時間	5.9	9.9	12.2	12.3	26.1	15.0	29.1	17.0	23.7	42.8	3.0	2.9
マンガを読んだ時間	58.1	84.9	23.3	6.4	10.6	2.4	2.9	0.8	0.9	1.5	4.2	3.8
家の手伝いをした時間	40.5	14.1	42.8	33.8	9.8	23.0	2.1	15.1	0.9	11.5	3.8	2.5
本を読んだ時間	63.4	39.3	19.7	22.2	9.1	15.6	2.5	11.0	1.3	9.7	4.0	2.3
お母さんと話をした時間	10.5	9.9	52.9	42.0	22.6	20.9	6.7	11.9	4.0	13.1	3.3	2.1
お父さんと話をした時間	31.9	27.6	47.5	39.0	12.2	15.8	2.9	7.5	1.7	7.3	3.9	2.7

（日米中学生・母親調査）

傾向が著しい。この点について、中学生の生活実態から検討してみよう。

浮かび上がる学校化社会のひずみ

「日米中学生・母親調査」では、日本とアメリカの中学生の平日の生活時間をたずねている。詳細は他章でも触れられているが、Ⅲ―5表に示すように、日本の中学生の生活の特徴がみごとに浮かび上がっている。

「友だちと遊んだ時間」をみると、日本の中学生では全然遊ばなかったというものが七二・八%と、実に四人に三人までが平日の放課後、友だちと全く遊んでいないことになる。そのぶん、勉強に費やされている。「平日の勉強時間」をみると、日本の中学生では一時間以上勉強するという者は半数をこすが、アメリカでは三割にも満たない。この他、日本の中学生では、マンガに接する者が多い反面、読書や家の手伝いをする時間はきわめて少なくなっている。このように、学校外の生活時間をみると、学校中心の生活をおくり、家庭では役

割すら与えられず、勉強を強要される中学生の姿が把握できよう。

また、親との会話の内容をみても、日本では学校や勉強のことが中心である。実際、母親との会話の内容をたずねると、「勉強や成績」「学校でのできごと」が日本で非常に多いことがわかる。このように日本の親も、知らず知らずのうちに、学校にとらわれ、子どもの学校への適応を強要し、「学校的なまなざし」で子どもをみている。

追いつめられた子どもたち

逆に子どもは、小さいうちから、学校的価値への適応を強要され、またそうした期待に応えようとしている。それがますます彼らを学校にしばりつけ、駆り立てている。中学生になると、高校入試をひかえ、選別、選抜が強化され、学力格差が決定的となる。しかも、学校化された社会の中で、評価尺度が一元化され、学力の評価が人格全体の評価にまでつながってしまう。中学生になると、自分の学力の相対的な位置をいやがおうでも認識するが、それでもなお親や教師は、学校への適応を強要する。そして、いやおうなく競争のための競争、いわば「敵対的な競争」へ参加させられる。

追いつめられた子どもの中には、当然、学校や教師、そして時には学校への適応を強要する親への反抗を強めたり、あるいは、学校への適応をしたくてもできない自分を責め、内にこもり、自己の中で激しい価値葛藤をくり返す者もでてくる。そうした葛藤に耐えきれず、自殺にまで追いこまれる子どもも当然でてくる。事実、昭和六一年に中学生の自殺者は一三三人と、前年度と比較し、四割以上も増加した。

望まれる学校の持つ抑圧の軽減

このようにみてくると、学校のもつ抑圧の強さが、様々な問題行動の背景となっていることが分かる。その抑圧が強まれば強まるほど、問題行動は深刻化し、陰湿化していく。社会心理学に「欲求不満—攻撃説」、つまり欲求充足の阻止の状況が、人間の攻撃性につながるという考え方があるが、現代の日本の中学生にかけられている抑圧の強さが、彼らの欲求を阻止し、それが攻撃性につながっていると言えよう。その攻撃は、親、教師、友人、そして時として自分にさえ向けられる。日本の中学生にかけられる抑圧は、ますます強まっているように思えてしかたがない。

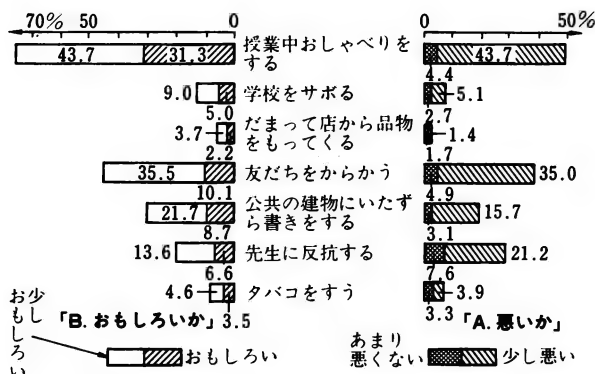
今、なによりも必要なことは、中学生にかけられている学校の抑圧を弱めることである。中学生の反学校的な態度や脱学校的な態度は、視点を変えれば、現代の学校化された社会の相対化の表れでもある。学校的価値の相対化が、学校のもつ抑圧を弱めることにつながる。

今後、学校の内外にわたり、のびのびした自由な活動の空間をつくっていくことが望まれる。なにをおいても、学校生活中心の生活から脱して、家庭、地域社会との連携のもと、子どもの全生活領域にわたり一貫した指導体制を確立していくことこそ急がれる。

(2) 価値観・規範意識の変化

失われた歯止め

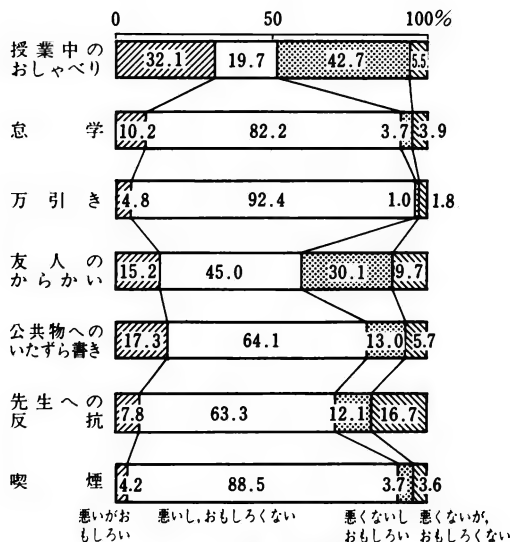
中学生の問題行動の普遍化傾向は、彼らの価値観や規範意識になんらかの影を落とし、またそれに支えられているものと思われる。中学生の価値観は、他章で詳しく触れているので、ここでは問題行動とのかかわりで考えてみたい。

万引き、校内暴力、特に教師への暴力や弱いもののいじめに対し、歯止めが喪失していることは、

Ⅲ-9図　規範意識

(「現代学校における『いじめ』風土の解明」『埼玉大学紀要』第35巻増刊)

すでに述べたが、ではなぜ歯止めが喪失してしまったのだろうか。これを解く鍵は中学生の規範意識の変化にある。

現在の子どもたちの規範意識を把握するため、「授業中におしゃべりをする」「学校をサボる」「だまって店から品物をもってくる」「友だちをからかう」「公共の建物にいたずら書きをする」「先生に反抗する」「タバコをすう」の七項目について、「A・悪いと思うか」「B・おもしろいか」の二点についてたずねてみた。

Ⅲ—9図は肯定的な回答の結果を示したものだが、「授業中のおしゃべり」がAとBともに肯定率が非常に高くなっている。これに次いで、「友だちをからかう」もA、B両面の肯定率が高い。その他の項目は肯定する生徒がそう多くないが、その中で「公共の建物にいたずら書きをする」と「先生に反抗する」の肯定率が二割前後から三割となっており、目立っている。また、AとBとを比べてみると、「先生に反抗する」以外、すべての項目で、「B・おもしろい」が上回っており、いわゆる「ふざけ文化」、ないし「おもしろ志向」が子どもたちの世界に浸透していることを表している。この「悪い—悪くない」「おもしろい—おもしろくない」という反応を組み合わせると、注目す

べき点が明らかになる。

規範意識を弱める「おもしろさ」

III—10図はその結果を示したものだが、全体として、子どもたちの中には「悪い」と判断していても、もう一方の目でこれを「おもしろい」とみている子どもが少なくないことが読みとれる。つまり、規範意識の上では健全に見える子どもたちでも「悪いことだがおもしろい」という別の意識の広がりがある。特に、「授業中おしゃべりをする」は三分の一が「悪いがおもしろい」と回答している。さすがに「万引き」と「喫煙」の二項目は「悪いがおもしろい」という回答は四%ほどにとどまるが、他の四項目は一割前後に達している。また、「悪くないし、おもしろい」という、いわば〝逸脱型〟の意識は、「授業中のおしゃべり」が四割強、「友人のからかい」で三割、「公共物へのいたずら書き」と「先生への反抗」は一割強に達する（詳細は、久冨善之・佐藤郡衛「現代学校における『いじめ』風土の解明」埼玉大学紀要、第三五巻参照）。

このように、今日の子どもたちの間に

	悪いがおもしろい	悪いし、おもしろくない	悪くないし おもしろい	悪くないが、おもしろくない
授業中のおしゃべり	32.1	19.7	42.7	5.5
怠学	10.2	82.2	3.7	3.9
万引き	4.8	92.4	1.0	1.8
友人のからかい	15.2	45.0	30.1	9.7
公共物へのいたずら書き	17.3	64.1	13.0	5.7
先生への反抗	7.8	63.3	12.1	16.7
喫煙	4.2	88.5	3.7	3.6

III-10図　規範意識

（「現代学校における『いじめ』風土の解明」『埼玉大学紀要』第35巻増刊）

	日本	アメリカ
友だちをいじめる	64.2	94.4
タバコをすう	80.8	93.2
無断外泊をする	74.7	90.9
シンナーをすう	84.1	95.5
万引きをする	84.5	97.1
先生に暴力をふるう	80.1	95.1
学校の建物や公共の物を壊す	80.7	95.6
遊びまわって夜遅くまで家に帰らない	76.4	86.7
授業をサボる	77.5	91.4
遅刻をする	52.6	87.4
先生に反抗する	60.9	83.1

Ⅲ-11図　中学生が絶対してはいけないこと
（日・米：全体）
（日米中学生・母親調査）

広がる「おもしろさ」という反応が規範意識を弱めている。しかも、この傾向は、小学生よりも中学生ほど顕著である。アメリカの中学生と比較すると、日本の中学生での規範意識の弱体化が目につく。「日米中学生・母親調査」では一一項目について、「中学生が絶対にしてはいけないことかどうか」を問うているが、すべてにわたり、アメリカの中学生よりも「してはいけない」という回答が少なくなっている（Ⅲ―11図）。

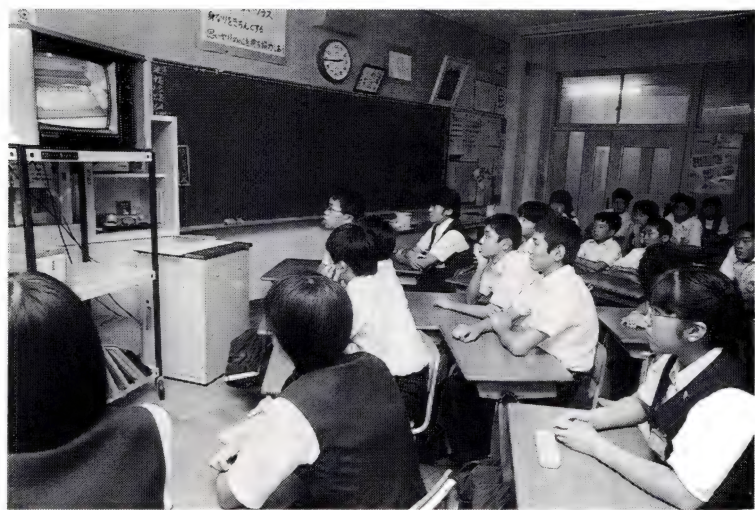
感覚にゆだねられる規範意識

中学生になれば、学校や教師の規範的価値を離脱し、中学生独自のインフォーマルな価値形成を志向するようになる。そこでは、「ふざけ」や「おもしろさ」が支配的になる。つまり、「善―悪」という道徳的基準から離れ、「おもしろい―おもしろくない」という感覚的基準にコミットするようになる。現代の問題行動がこうした規範意識の変化に支えられていることは言うまでもない。校内暴力をくり返すツッパリ生徒が、クラスで必ずしも排除されず、受け入れられていること、クラスでのいじめを傍観する生徒が多いといった例は、そのことを端的に示している。

しかし、今の中学生は、個人レベルの価値観をみると、意外に伝統的な〝正義〟に傾いている。それが集団のレベルになると大きく変わってしまう。現在の学級の雰囲気の中には、攻撃性、同調志向、感覚性などが強くみられる。人の失敗をみんなでからかい、それに同調しない生徒がいると、同調を強いるというように、あるいは、勉強ばかりしている子やマジメな生徒をみんなでからかったり、いじめたりというように。中学生は自己のタテマエとする価値に反し、そうした学級集団の雰囲気にひきずられ、とらわれている。学級の支配的な雰囲気と生徒一人ひとりの価値意識とは大きく乖離し、このことが様々な問題行動の背景をなしている。

求められる集団的自律

これまで、中学生の学校や教師のもつ規範的価値からの離脱を、管理主義的に押さえ込む傾向が強かったように思える。このため、学校のインフォーマルな生活の場での規範意識が育っていない。管理が強められれば、強められるほど、今度は生徒は管理によってしか行動しなくなってしまう。中学生が集団過程を通して、自分たち自身で主体的に規範意識を形成していけるような集団的な自律の方向を最大限保障していくことが必要だろう。

Ⅳ　学校と教師

1　授業・成績

(1) 授業への取り組み

学校での楽しみ　「受験競争」「校内暴力」「いじめ」など、中学生の学校生活には、とかく暗いイメージがつきまとう。だが、当の中学生は、楽しい学校生活をおくっているものが多い。「日米中学生・母親調査」では、「学校に行くことが楽しいかどうか」をたずねているが、日本もアメリカの中学生も八割以上が楽しいと答えている。しかし、その理由となると両国間に大きな違いがみられる。次ページIV―1表にみるように、日本の中学生の八割以上が友だちとのつきあいをあげており、授業や勉強に楽しみを見出す生徒はごく少ない。アメリカでも友だちづきあいをあげるものが多いが、それでも日本の半数ほどにとどまり、授業に楽しみを見出す生徒が多くなっている。

日本の中学校では、友人関係がそれだけ重い意味を持っている。逆に言えば、友人関係によって生徒をようやく学校につなぎとめているとも言える。

授業への不満　日本の中学生は、学校生活の中核である授業に対しては、楽しみどころか強い不満さえ抱いている。NHK世論調査部の「中学生・高校生の生活と意識調査」によれば、中学生は、「授業で教えられる中味が多すぎる」(四一・二%)、「生徒が分かっているかど

うかおかまいなしの先生が多い」（三九・〇％）、「授業の進み方がはやすぎる」（三七・七％）といった不満を抱いている。このため、日本の中学生には授業内容の軽減を求める声が強い。IV―1図に示すように、日本の中学生の半数強が「授業内容をもっとやさしくしてほしい」、そして四割強が「全体の授業時間数を減らしてほしい」と訴えている。一方、アメリカの中学生では、そうした要求よりも「部活」（クラブ活動）や「学校行事」の充実を求めるものが多い。

日本の中学生に授業の量的な軽減を求める者が多いのは当然かもしれない。というのも年間の授業時間数をみると、日本の二四〇日に対し、アメリカ一八〇日、イギリス二〇〇日、西ドイツ二〇〇～二二〇日、フランス一八〇日などとなっており、日本は外国と比べて授業時間数が多いからだ。このため、授業時間数の軽減を求める声が出てくるのはうなずけるが、授業内容をやさしくしてほしいという中学生が半数以上にも達するという事実は、深刻に受け止めなければならない。

IV-1表　学校が楽しい理由（％）

	日　本	アメリカ
授業が面白いから	3.8	16.5
友だちと会えるから	85.3	44.2
先生が好きだから	1.6	4.9
成績がよいから	0.6	16.5
自分の力が発揮できるから	2.1	8.5
勉強が楽しいから	1.8	1.7
そ　の　他	4.7	7.6

（注）NA、DKは除く。

（日米中学生・母親調査）

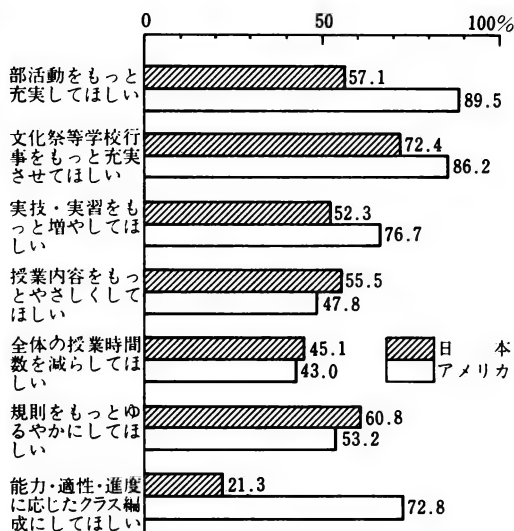
これまでいくたびか、教育課程の改革が行なわれ、内容の精選が叫ばれてきた。しかしながら、当の子どもたちの立場からみると、あいかわらず重い負担に苦しんでいることがよく分かる。

授業の負担の重さを感じているのは、生徒だけではない。教師もまた授業の負担の重さを訴えている。「日米中学校教師調査」によると、IV―2図に示すように、「教える内容が多すぎる」という教師は、日本では四割弱に達するが、アメリカではわずか一％にとどまる。「どちらかといえばそう思う」ま

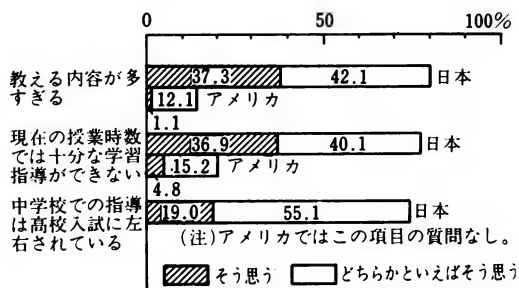
で含めると、日本の教師の実に八割までが教える内容が多いと答えている。また、「現在の授業時数では十分な学習指導ができない」という教師が、当然、日本に多く、四割近くにも達する。一方、アメリカではわずか五%ほどにとどまっている。

のしかかる入試の重み

このように、日本では教師も授業内容の負担を強く感じている。この負担過重の背景の一つとして、高校入試があることは言うまでもない。「中学校での指導は高校入試に左右されている」と感じている教師は、四分の三にも達し、中学校教育の前に、

	日本	アメリカ
部活動をもっと充実してほしい	57.1	89.5
文化祭等学校行事をもっと充実させてほしい	72.4	86.2
実技・実習をもっと増やしてほしい	52.3	76.7
授業内容をもっとやさしくしてほしい	55.5	47.8
全体の授業時間数を減らしてほしい	45.1	43.0
規則をもっとゆるやかにしてほしい	60.8	53.2
能力・適性・進度に応じたクラス編成にしてほしい	21.3	72.8

(注)「とくにそう思う」と「ややそう思う」との合計の比率。NA, DKを除いた比率。

Ⅳ-1図　学校への要求
(日米中学生・母親調査)

		そう思う	どちらかといえばそう思う
教える内容が多すぎる	日本	37.3	42.1
	アメリカ	12.1	1.1
現在の授業時数では十分な学習指導ができない	日本	36.9	40.1
	アメリカ	15.2	4.8
中学校での指導は高校入試に左右されている	日本	19.0	55.1

(注)アメリカではこの項目の質問なし。

Ⅳ-2図　学習指導についての意識
(日米中学校教師調査)

高校入試という大きな壁が立ちはだかっていることが明らかになる（Ⅳ―2図）。

授業が高校入試という受験によって支配されているということは、教育内容の形骸化、形式化を促進させる。学校で学習する知識が、子どもの生活から遊離したり、科学の体系から切れ、断片化するということは、つとに指摘されてきた。今や、それだけにとどまらず、教育内容は生徒たちの前に絶対的な修得を強いる固定したものとして立ちはだかっている。中学生は、高校入試に備え、テストの点数をとる対象としてしか教育内容に関心が持てなくなっている。教育内容に知的関心が持てないために、当然、授業にも、そして勉強にも関心が持てないでいる。生徒を授業につなぎとめるために、管理の強化や競争への刺激が不断になされている。

(2)授業の実際

授業実践の日米比較　生徒も教師も重い負担を感じながら、毎日の授業が行なわれている。日々の授業実践は、言うまでもなく個々の教師によって大きく異なっており、その実態をとらえることは容易ではない。「日米中学校教師調査」では、教師に授業のすすめ方を質問した。その結果を参考にして、授業の実際に迫ってみよう。

まず、「授業中、生徒を指名することが多いか、それとも講義形式の授業が多いか」を質問したが、Ⅳ―3図にみるように、日本、アメリカの教師とも、生徒を指名することが多いと答えており、生徒中心の授業をしていることが分かる。ただ、日本で二割ほどの教師は講義形式が多いとしており、その数はアメリカの倍に達する。日本では、授業は教師主導で行なわれるため、いきおい講義形式の授業が多くなるのだろう。

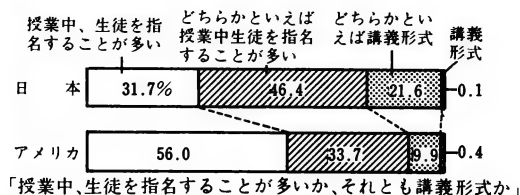
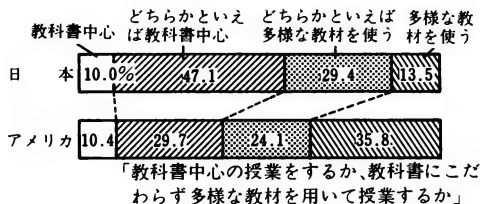
	授業中、生徒を指名することが多い	どちらかといえば授業中生徒を指名することが多い	どちらかといえば講義形式	講義形式
日本	31.7%	46.4	21.6	0.1
アメリカ	56.0	33.7	9.9	0.4

「授業中、生徒を指名することが多いか、それとも講義形式か」

Ⅳ－3図　授業のすすめ方

（日米中学校教師調査）

	教科書中心	どちらかといえば教科書中心	どちらかといえば多様な教材を使う	多様な教材を使う
日本	10.0%	47.1	29.4	13.5
アメリカ	10.4	29.7	24.1	35.8

「教科書中心の授業をするか、教科書にこだわらず多様な教材を用いて授業するか」

Ⅳ－4図　授業のすすめ方

（日米中学校教師調査）

一方、アメリカでは教科による違いはあるものの、ディスカッション中心の授業であり、生徒も積極的に質問をする。身近な問題から、米ソの核軍縮問題など、広く現実社会に目を向けさせるため、なんでも議論させるのがアメリカ流の授業である。授業中に、質問がとびかう。逆に、生徒は質問をしないと授業を真面目に受けていないと思われる。そこには、考える力、批判力を養おうとする授業観がある。アメリカでは、教師と生徒とがともに授業をつくっていくといった姿勢が強い。個性重視の現れである。

教材選択の違い

次に「教科書中心の授業をするか、教科書にこだわらず多様な教材を用いて授業をするか」である（Ⅳ－4図）。日本では教科書中心という教師が六割近くに達する。学習指導要領によって規定されている日本の状況からすれば当然の結果だろう。一方、アメリカでは逆に多様な教材を使うという教師が六割に達する。アメリカでは、各教科書会社がつくったワークブックやプリントが氾濫している。教科書は各学区ごとに決められるが、ワークブックやプリントなどの使用は、原則的に教師の自由裁量にまかされている。新学期の「バック・ツー・スクール・ナイト」といわれる父母会の席で、教

師は自分のクラスの一年間の教育方針を説明し、どの教科書を使用するか、そしてどんな教材を使うかを父母に話し、承認を求める。アメリカの教育の特徴はこうした多様性にある。

しかし、最近のアメリカの教育は画一化の方向に向かってきている。教師の力量不足や基礎学力の低下のため、アメリカでは「パッケージ教材」が急速に普及している。これは、単元ごとに教師用の説明書、練習問題、単元ごとの事前テストや事後テスト、達成度評価テスト、成績記録表など授業をすすめる上で必要なものすべてが含まれ、だれでもが指導できるほど懇切丁寧にできている。

Ⅳ-5図　授業のすすめ方
（日米中学校教師調査）

Ⅳ-6図　授業のすすめ方
（日米中学校教師調査）

こうしたパッケージ教材は、標準的な授業ができるため、授業の一定の水準は保証されるが、教師の創意や工夫を押さえ込み、やる気や情熱を喪失させる危険がある。最近、管理職からパッケージ教材を使うように強く勧められ、その結果、やる気を喪失する教師が多いと言われる。日本でも、近年、教師への規制が強化されつつあるが、これが教師の情熱を喪失させないとも限らない。教育実践における教師の自立性の保証こそ必要のように思われる。

授業の対象

では、授業はどの程度の成績の生徒を対象に行なって

いるのだろうか。前ページⅣ―5図に示すように、アメリカでは「中以上の生徒」を中心に、一方、日本では「下位の生徒」を中心に授業をすすめるという教師が非常に多い。また、どのような生徒を指名することが多いかをみると、日本では、「勉強が遅れている生徒を指名する」という教師が七割にも達し、一方、アメリカの教師の六割は「成績が中以上の生徒を指名する」と答えている（Ⅳ―6図）。

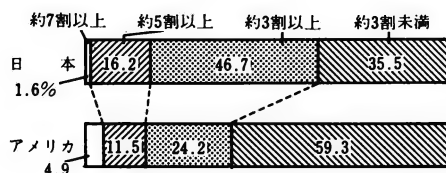
日本の教師は、成績が下位の生徒を中心に授業をすすめたり、勉強が遅れている生徒を指名するというように、「落ちこぼれ」を出さないように努力をしている。一方、アメリカの教師は、成績が中以上の生徒を指名し、中以上の生徒中心の授業を展開している。この違いは日本の平等主義、アメリカの業績主義の反映であろう。アメリカの近年の教育改革がおしなべて「優秀さの追求」にある中で、実際の授業も成績がよい生徒を中心にすすめられている。だが、優秀さを追求すればするほど、そこから落ちこぼれる生徒が出てくるのは当然である。アメリカの低学力生徒は、こうした背景を持って生み出されている。日本もアメリカもともに低学力の生徒の存在は大きな問題になっているが、次にこの点についてみていこう。

(3) 落ちこぼれとその対策

深刻さを増す落ちこぼれ問題

日本もアメリカもともに低学力の生徒の扱いが大きな教育課題になっている。日本では、かつて〃七五三教育〃（小学生で授業内容を理解しているのは七割、中学生では五割、そして高校生では三割しかいないという意味）と言われ、いわゆる「落ちこぼれ」が大きく取り上げられたが、現在でもその実態は深刻である。Ⅳ―7図は教

師に授業の内容を十分理解できない生徒が学校にどれぐらいいるかを質問した結果を示したものである。

日本では、学校に授業内容を理解できない生徒が半数以上いると回答した教師が約二割、そして、三割以上理解できない生徒がいると回答した教師が三分の二近くにも達する。これに対し、アメリカでは、日本より相対的に少なく、授業内容を十分理解できない生徒が全体の三割以上いると回答した教師は四割にとどまる。いわゆる「落ちこぼれ」の実態は、教師の目からみる限り、日本の中学生の方がより深刻だと言える。むろん、日本とアメリカでは、教材も学習内容もまた評価基準も

IV-7図　授業内容を十分理解できない生徒

（日米中学校教師調査）

異なるため、単純な比較はできないが、日本の教師の方が、「落ちこぼれ」を深刻に受け止めている。深刻に受け止めているため、一人ひとりの教師が授業の中で、授業についていけない生徒を出さないように工夫したり、勉強の遅れている生徒を授業に関与させたりしているのだろう。

落ちこぼれは両国とも大きな問題だが、その対応の仕方には大きな差がみられる。

落ちこぼれ対策の方向性

アメリカと比較し、日本では積極的な対策がとられていない。補習など、個々の教師や学校の個人的な熱意によって対応しているにすぎない。積極的な対策がとられていないため、日々の授業で落ちこぼれを出さないように努力する教師が多いとも言える。

では、アメリカではどのような対策がとられているのだろうか。教育の責

任性（アカウンタビリティ）が問われる中で、能力別学級編成をはじめとして、「バイリンガル・プログラム」や「チャプターIプログラム」として補償教育が制度化されている。

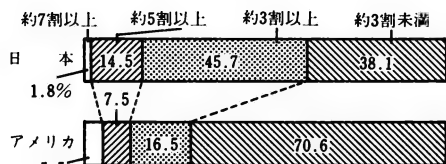
「バイリンガル・プログラム」は、英語とその子どもの母国語との二か国語併用教育のことであり、一九七四年にサンフランシスコ在住のラオという中国系市民が中国語でも教育を受ける権利があるという訴訟を起こし、最高裁で勝訴したことが、この教育を義務づけることになった。英語ができない多様な移民の子どもたちの低学力を救済するための教育である。

また、小学校を中心に行なわれている「チャプターIプログラム」は、落ちこぼれになりそうな生徒を救うための補習プログラムで、英語の読み方と算数の学力向上を主目的としている。このプログラム担当の専任教師（リソース教師と呼ばれる）が、生徒の人数に応じて各校に配属され、それに助手がついて、生徒のレベルにあった教材を用い、個別に授業がすすめられている。中学・高校でもほぼ同じような学力低下の生徒を救済する教育を行なうオルターナティブ・スクールがある。

このように、アメリカでは、救済のための教育が制度的に確立している。しかし、アメリカの施策は、あらかじめ落ちこぼれが出ることを前提につくられている感をまぬがれない。この点、日々の授業の中で落ちこぼれを出さないように努力している日本の教師の指導技術は、一応は評価されよう。

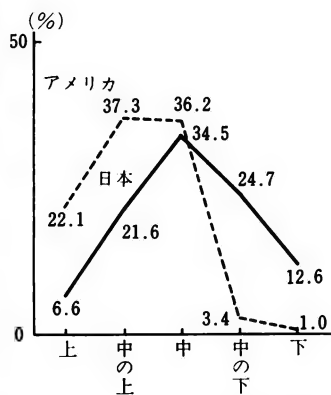
にもかかわらず、授業についていけない生徒を出しているのは、やはり受験の圧力や教育内容の過重にあると言えよう。日本で、落ちこぼれが深刻化しているためか、「授業についていけない生徒に対し、補習など積極的な対策をとるべきだ」という意見への賛成者が日本の教師で八割をこしており、また、日本では反対の多い「習熟度別学級編成」に対し、教科によっては取り入れるべきだ

という教師が日本で半数をこしている（「日米中学校教師調査」）。一人ひとりの教師の努力では限界のあることをこの結果は示している。

日本では、後にふれるように相対評価が一般化している。相対評価の場合、落ちこぼれは、本当の意味での教育的な教育目標からの落ちこぼれを意味する。基礎学力がつかないまま卒業してしまう者も出てくる。事実、「日米中学校教師調査」で、「十分な学力がつかないまま卒業する生徒」がどれぐらいいるかを質問すると、実に六割以上の教師は、三割以上の生徒は十分に学力がつかないまま卒業すると答えている（Ⅳ—8図）。基礎学力を保証するためのなんらかの対応を早急に講じる必要がある。

Ⅳ-8図　十分な学力がつかないまま卒業する生徒
（日米中学校教師調査）

(4) 成績信仰

絶対評価と相対評価と

日本とアメリカの中学生に、自分の成績がどの辺に位置するか、つまり成績の自己評価をたずねると、両国で大きな違いがみられる。Ⅳ—9図に示すように、アメリカでは九割以上が自分の成績を中以上と評価している。これに対し、日本ではほぼ正規分布に近くなっている。むろん、これは評価の基準や方法の違いによる。アメリカでの評価は、あくまでも絶対評価であるのに対し、日本では相対評価が一般化している。日本ではテストによって、学習内容の修得度が測られ、点数で順位づけられるという相対評価に慣らされているため、自分の成績の相対的な位置をはっきりと認識しているのだろう（ただ、アメリカでも最近、全

（注）NA, DKは除く。

Ⅳ－9図　成績の自己評価

（日米中学生・母親調査）

国共通の基礎学力テストが実施され、テストの点数の向上への圧力が強くなり、相対評価が行なわれるところも多くなっている）。

日本の中学生で問題なのは、こうした成績の自己評価が、学校生活への適応や授業、教師への意識や態度だけにとどまらず、自己概念や将来展望をも大きく規定するということだ。

このことを明らかにしている調査は数多くある。たとえば、子ども調査の第一人者である深谷昌志氏は、『孤立化する子どもたち』（ＮＨＫブックス）の中で、成績と自己評価とのクロス集計結果をもとに成績上位群は、勉強ができるのは当然として、真面目、努力、リーダーシップ、心のやさしさなど、ほとんどすべての項目にわたり、肯定的な自己イメージを抱いていることを明らかにし、中学生の中で、「成績のよしあしが、自尊感情を測るバロメーター的な役割をはたしている」と指摘している。つまり、学校の成績がよい生徒ほど、自分への誇りや自信を持っているわけで、成績が自己概念の形成と密接にかかわっているのである。

つくられる自己イメージ

また、成績の自己評価が将来への見通しをも規定している。「日米中学生・母親調査」では、将来どの学校段階まで進学したいかをたずねている。日本の中学生の結果をみると、成績が「上」の生徒は七割が大学への進学を希望しているのに対し、「下」の生徒の六割近くは高校までと答えている。アメリカではこうした差はみられない。中学

生という早い段階から、成績によって将来への希望が規定されている。成績が下位の生徒は、将来への希望すら中学校の段階で閉ざされてしまう。そして否定的な自己イメージをつくりあげ、「どうせやってもダメだから」というように、自らをレッテル化し、自分に一定の枠をはめて、そこから脱け出そうとしなくなる。自らがつくりあげた否定的な自己像に、しばられ、とらわれてしまうのである。落ちこぼれがこれほどまでに問題になるのは、このためである。

文化になった評価尺度の功罪

日本におけるこうした現象の背景には、言うまでもなく、評価尺度の一元化がある。つまり、学校での成績評価が人格全体の評価にまでつながってしまうのだ。中学生は、言わば「能力主義的な評価」を内面化し、その尺度によって自分をも、また他人をも評価してしまう。そこでは、人間の個性や多様な能力は背後に退き、一元尺度の上での序列のみを強く意識するようになる。序列へのこだわりは、不安と緊張を伴う。その不安と緊張を柔らげるため、友人関係に固執し、情緒的、感覚的な結びつきを強めている。また、一元尺度の序列の上昇の望みを断たれた多くの生徒は、否定的な自己概念をつくりあげ、それを内面化し、そのことが将来への可能性をも閉じたものにしてしまっている。かくて無気力な生徒をつくりあげているのである。

このように「能力主義的な人間評価」は、中学生のシラケや無気力、さらには否定的な自己概念をつくりあげている。現在の成績信仰は、単によい点数をとるための競争にとどまらず、成績信仰による能力主義的な評価に、親も教師も、そして生徒もとらわれていることを意味している。

2　生活指導

(1) アメリカ――自由と責任

生徒自身に責任を問うアメリカ

日本とアメリカでは、生活指導に対する考え方が基本的に異なる。アメリカでは、生徒の自主性、自発性を非常に尊重する。アメリカの生活指導に対する考え方を示す例を紹介しておこう。

生徒会主催の「ブレイク・ダンス」コンテストの日、体育館で、予定では午後の六、七限目を使って、このコンテストが実施されることになっている。予定の時間になっても子どもたちは三々五々集まってくるだけで、なかなか全員そろわない。生徒がダラダラしていても、先生は個々の子どもに注意を与えるだけで、それ以上のことは何もしない。一〇分過ぎても子どものまわりに立ったまま、腕を組んだり、先生同士でしゃべったり、ときには子どもとしゃべったりで、一向に子どもを引っ張って何かをさせようとしない。結局、二〇分もすぎてから、生徒会長の司会でやっとコンテストが始まった。先生は、生徒の行事だからと言って、すべて生徒にまかせっきりだ。

（安彦忠彦「フロリダ体験記」『学習指導研修』教育開発研究所）

これは、フロリダ州のあるミドル・スクールでの光景だ。こうしたことは、この学校に特有にみられることではなく、アメリカの中学校なら、かなり一般的にみられる光景だ。もし、これが日本の学校であれば、ダラダラしている生徒に、教師が大声でどなり、一刻も早くならばせるようにするだろう。この例を紹介している安彦氏は、「一見自由のようだが、責任を負うことの厳しさを教えている」と指摘している。結果はどうあれ、生徒の自主性にまかせ、最終的に生徒自身に責任を負わせているのである。

アメリカでは、頭髪、服装、化粧、生活のきまりなど、すべてが原則的に本人の自覚にまかされている。他人に迷惑をかけたり、授業中に他の生徒のじゃまをしたりしない限り、教師が口を出すことはほとんどない。自由だが、自分の行動に対しては厳しく責任を問われる。

明確に定められた罰則

いったん、他人に迷惑をかける行為をした場合、罰則がはっきりと決められている。それは各学校によって異なるが、ここではカリフォルニア州のある公立中学校の例を紹介してみよう。

授業妨害や他人に迷惑をかける行為をした場合、一回目は教師による説諭、二回目は校長による説諭、三回目の違反で親と校長の面談、四回目で一日の停学、五回目で三日間の停学、六回目で五日間の停学となる。州の教育法で、一度に五日以上の停学、かつ合計停学日数三〇日をこえてはならないことになっており、もしこれ以上違法行為がくり返されれば、「オポチューニティ・スクール」と呼ばれる特別学級に送られる。これは、隔離施設で、普通の学級と完全に切り離され、そこで授業を受け、学校行事への参加など様々な特権を剝奪される。本人が立ち直り、正常のクラスへの復

帰が可能と認められた場合に限り本校に戻れる。この他、違反行為が対教師暴力、喫煙、窃盗、麻薬所持などになると、退学などさらに厳しい罰則が定められている（瀬光悟・惇子『アメリカの中学生は、いま』毎日新聞社）。

責任遂行の厳しさを教える

いずれにしても、アメリカの生活指導は、個人の責任を前提にして行なわれる。責任を負う厳しさを身をもって教えているとも言える。また、生活指導は、あくまで学校内に限定される。放課後、生徒が一歩学校を出れば、学校外でなにをしようが学校は一切関知しない。後にみるように、日本の校外生活に対する厳しい規定と比べると、きわめて対照的である。

アメリカの生活指導の目標は、生徒の管理にあるのではなく、自主性の伸長、個性の尊重にある。できる限り学校行事は生徒の自主性にまかせ、規則も最小限度にとどめる。賞罰の規定だけははっきりと決めておくが、それに該当しない限り、個人の自由にまかされている。自由の中に、責任を遂行する厳しさを生徒に学ばせようとするのがアメリカの生活指導の考え方と言えよう。

(2)日本——管理主義

全生活にわたる生活指導

日本の生活指導は、管理主義によって特徴づけられる。日本の中学生は、全生活領域にわたり、こと細かに規則でしばられている。現在、中学生の頭髪、服装、持ち物などの規則をイラスト化すると、Ⅳ—10図のようになるという。

学校での勉強や生活で必要かどうか疑わしいものもあり、校則が一人で歩いているといった感すら受ける。この他、校外生活での厳守事項などもきめ細かくつくられている。ある中学校の校外生

活にかかわる校則を紹介してみよう。

(ア)路上での禁止事項

○自転車の二人乗り、並列乗り

○ローラー・スケート

○バイクの運転

(イ)生徒同士の遠出の禁止事項

○アイス・スケート、ローラー・スケート場への出入り

Ⅳ-10図　日本の中学生の校則の一例

(「サンデー毎日」昭和60年９月29日号より，
イラスト：米原巨朗)

○ボウリング場への出入り
○学校以外のプールへの出入り
○飲食店への出入り
○書店への出入り
○生徒同士の日没後の外出の禁止
(ウ)生徒同士の外泊の禁止

(埼玉県A中学校生徒手帳より)

このように、日本の生活指導は、生活のあらゆる領域にわたる。ここにあげた他に、頭髪、服装、持ち物、遅刻や忘れ物への罰則、登下校時の禁止事項等々、生徒の全生活にわたるほど、禁止事項や注意事項が決められている。アメリカとは対照的に、生徒の自由を押さえつけているとしか言いようのない規則がならんでいるのである。

管理主義が生まれる背景

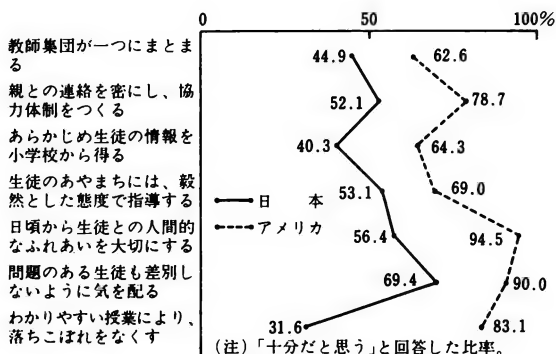
では、なぜ規則がこれほどまでに仔細に決められるのだろうか。坂本秀夫氏は、規則の微細化を次のように説明している。

学校が荒れれば荒れるほど、教師個人の手に負えなくなるから、教師集団の団結や歩調を合わせることが要求される。たとえば、服装や頭髪の違反をなくそう、そのためには全校で服装検査をやろう、指導もバラバラだと困るから統一しようというように。ところが現実には、生徒は多様で、その行動もバラバラなため、それらをすべて規則の中におさめようとすると、当然規則は細かくならざるをえないというのである(坂本秀夫『「校則」の研究』三一書房)。

このような規則の微細化は「管理主義」と言われる。管理主義は、規則の遵守を迫る。それが生徒の個性や自主性の芽をつみとることになり、画一化、均質化をおしすすめる。管理主義は、画一化、均質化を進行させ、そこから少しでもズレている生徒に対しては厳しい統制が加えられる。管理主義がいじめを生み出す温床と言われるゆえんである。校則は「学校的な価値の正当化」を生徒に教え込む機能を果たしている。フーコーの言葉を借りれば、学校の規則は、「従順な身体」をつくり出すためにあると言えよう（M・フーコー『監獄の誕生』）。

生徒の側に立ってみると、こうした管理主義への反発は強い。「日米中学生・母親調査」によると、日本の中学生では、規則をもっとゆるやかにしてほしいという要求が六割にも達している。とは言っても、規則をすべて否定することはできないわけで、そこにむずかしい問題がある。

自律への道づくり　学校には、一定の集団規律が必要であり、集団生活には、守らなければならない一定のルールが必要不可欠である。しかし、今の日本の中学生は、外側から規則が強要されている。規則の過度の強要は、規則への敵意を強めたり、規則への反抗者に対する共感をよんだり、あるいは規則を守ろうとする者を「ブリッ子」としてさげすんだりする雰囲気を生み出している。

日本の中学生にとって必要なことは、集団生活に必要な規則を自分たちの手でつくり変え、そしてそれを自分たちで守っていけるようにすることである。生徒自身が主体的に規範意識を形成していくようにすることが、青年前期の中学生に対する本来の生活指導のあり方ではないだろうか。たとえば、これまでの規則の廃止・改正や、学校行事の運営などに生徒の要望を生かしたり、彼らの自治にゆだねたりして、自分たちでそうした課題を達成していける力を養うこと、またそうなるよ

Ⅳ-11図　生活指導への取り組み

(日米中学生教師調査)

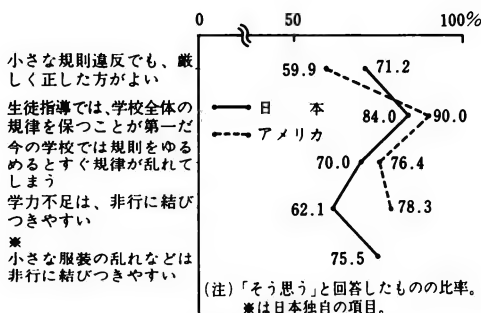
うに指導していくことが生活指導の本来の姿のように思われる。

(3) 教師の取り組み

生活指導の現場から

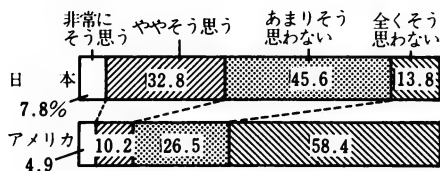
教師は、生活指導にどのように取り組んでいるのだろうか。「日米中学校教師調査」では、教師の生活指導への取り組みを、Ⅳ―11図に示すように、七項目にわたり質問してみた。すべてにわたり、アメリカの教師の方が「十分だと思う」という回答比率が高くなっている。特に、アメリカでは「日頃から生徒との人間的なふれあいを大切にする」と「問題のある生徒も差別しないように気を配る」の二つは、九割の教師が十分だと思うと回答している。日頃から生徒とのコミュニケーションをはかっている教師が多いのだろう。この他、「わかりやすい授業により、落ちこぼれをなくす」と「親との連絡を密にし、協力体制をつくる」の二つは、八割の教師が十分と答えている。アメリカの教師は、専門分化が進んでいて、学習指導と生活指導は別々の教師が担当し、それぞれ責任を負っている。生活指導については、カウンセラーや生活指導主事が担当している。一般の教師は、担当教科の学習指導に責任を負えばよい。こうした専門分化がそれぞれ責任を果たしているという自

覚につながり、肯定的評価を下すものが多くなるのだろう。

日本では、「問題のある生徒も差別しないように気を配る」という教師が最も多く、七割に達する。この他、半数以上の教師が十分だと思うと回答したのは、「日頃から生徒との人間的ふれあいを大切にする」「生徒のあやまちには、毅然とした態度で指導する」「親との連絡を密にし、協力体制をつくる」の三項目である。しかし、「わかりやすい授業により、落ちこぼれをなくす」ことが十分行なわれているとする教師は三割ほどにとどまり、また、「教師集団が一つにまとまる」ことが十分だと回答した教師は四五％と半数にも満たない。日本の教師は、自分たちの生活指導への取り組みを、かなり否定的に評価している。

Ⅳ-12図　生活指導に対する考え方
(日米中学校教師調査)

取り組みにみる日米の差異

こうした取り組みに対する評価の違いは、生活指導に対する考え方の差からきているものと思われる。「日米中学校教師調査」では、Ⅳ―12図に示すように、教師の生活指導に関する考え方をたずねている。アメリカの教師は、「生徒指導では、学校全体の規律を保つことが第一だ」「学力不足は、非行に結びつきやすい」と考えるものが多い。このために、生徒とのコミュニケーションをはかったり、わかりやすい授業を展開したりしているのだろう。

一方、日本の教師は、「小さな規則違反でも、厳しく正した方がよい」「小さな服装の乱れなどは非行に結びつきやすい」とい

IV-13図　生徒の学校への拘束についての賛否
（日米中学校教師調査）

う意見に賛成する者が多く、管理主義的な傾向がみられる。ささいな規則違反や小さな服装の乱れなど、細部にわたり統制を加えようとするために、やってもやってもきりがない。次から次へと規則違反者が続出する。これがますます管理や統制を強める結果になる。いくらやってもきりがないため、日本の教師では生活指導への取り組みに対し否定的評価を下すものが多くなるのだろう。

また、教師集団のまとまりが不十分なため、一人ひとりの教師が個人的に努力していかざるをえない。アメリカのように専門分化が進んでいないため、教師の負担はどんどん増えていく。あまりにも役割が過重になり、身動きがとれず、結局のところ、すべてがうまくいかなくなってしまう。このことも、教師が生活指導に対し否定的評価を下す一因となっている。

日本流の生活指導

日本の生活指導への取り組みの問題点は、この役割過重にある。学校の内外のすべてにわたり、学校、教師が責任を問われる。アメリカの教師は、放課後の学校外でのできごとに、ほとんど関与していない。これは、学校外での生活は親の責任と権利だとの意識が強いためでもあるが、日本の教師は、学校外生活の責任まで背負わされているし、教師自身も、自ら学校外生活の責任を背負いこもうとしている。たとえば、「非行予防のために、長期休暇中の登校日を増やしたり、下校時間いっぱい部活などで生徒を在校させておく方がよい」かどうかの意見の賛否を教師にたずねてみると、日本では実に四割もの教師が賛成している（IV―13

図）。非行予防という積極的な面はあるにしても、日本の教師は生活指導について、あまりにも多くの責任を背負いこんでいると言えるだろう。

逆に言えば、校外での指導体制が確立していないため、教師が全責任を負わされている。しかし、生徒の生活のすべてを把握することはできない。そこで、様々な禁止事項や注意事項をつくり、生徒を規制することになる。このことも今日の管理主義化の一因となっている。家庭、学校、地域の連携が叫ばれて久しいが、それが単なるスローガンに終わることのないように、真の連携のあり方を模索すべきである。

(4) 体罰

体罰の実際　日本では生活指導とかかわって、教師の体罰が大きな問題として取り上げられている。各地の「体罰一一〇番」などへも、「ほっぺたをなぐられて、鼓膜に傷がついた」とか「足払いをかけられ、鼻血を出し、耳鳴りがして学校を休んだ」といった訴えがたくさん寄せられているという。

いったい、教師の体罰はどれぐらい行なわれているのだろうか。学校で子どもたちがどんな体罰をどれぐらい受けているかを子どもへの調査を通してみてみよう。

中学生に、この一年間に先生から体罰を受けたことがあるかどうかを質問したところ、Ⅳ―2表にみるように、三割の生徒がなんらかの体罰を受けたことがあると答えている。学年別では、一年生と二年生が四割と、三年生よりも体罰経験が多くなっている。また、体罰の内容は、「ぶたれたり、けられたりする」と「長い時間、正座や苦しい格好をさせられる」がほとんどである。

Ⅳ－2表　体罰の内容

（％）

		左記のようなことをされたことはない	その他の体罰をされる	髪の毛をむりやり切られる	長い時間、正座や苦しい格好をさせられる	ぶたれたり、けられたりする
全体		69.1	6.3	1.6	14.4	16.4
男子	1年	59.9	11.0	1.9	19.2	22.5
	2年	59.0	7.1	1.7	23.0	23.2
	3年	70.9	7.3	3.1	9.9	18.9
女子	1年	71.9	3.2	1.4	13.2	11.4
	2年	70.3	4.0	0.2	14.5	13.7
	3年	83.5	4.4	1.0	5.8	7.5

（「児童・生徒のいじめ問題に関する調査」より）

体罰を受けた中学生のうち、親にそのことを話すものは三割にとどまる。また、母親も子どもが教師から受ける体罰を正確に知っているわけではない。母親への調査で特徴的なのは、母親が教師の体罰を、消極的ながらも肯定的にとらえているという点だ。さすがに体罰は「必要である」という母親は五・四％と少ないが、「時と場合によっては必要なこともある」という母親は実に六八・三％、「望ましいことではないが、やむをえない」が九・七％と、八割近い母親が消極的ながらも体罰を肯定しており、「絶対にいけない」と体罰を否定する母親はわずか七・八％にとどまる。教師の体罰は、親の一定の支持によって行なわれていることがわかる（文部省科学研究費研究成果報告書『児童・生徒のいじめ問題に関する調査報告書』一九八六年）。体罰がこれほどまでに日常化してきた背景には、こうした親の支持があったと言えるだろう。

悪循環する体罰

にもかかわらず、今、なぜ教師の体罰がこれほどまでに問題視されるようになってきたのだろうか。第一は、教師の体罰のいきすぎにある。修学旅行中の高校生が校則違反を犯したため、教師に体罰を加えられ死亡した事件やリンチ・体罰が日常化し、死

IV－3表　担任の先生の評価（体罰経験別）

（％）

		生徒をよくおこる	えこひいきをしない	規則にうるさい	グズグズした子がきらいである	生徒一人ひとりのことをよくわかっている	生徒から好かれている	生徒からバカにされている	親から信頼されている
全　体		26.4	32.3	28.1	16.1	40.4	22.9	15.9	26.7
体罰の経験	あり	40.6	25.1	42.5	25.1	31.1	14.6	25.0	21.9
	なし	26.7	35.2	22.2	12.5	42.2	26.2	12.2	28.7

（「児童・生徒のいじめ問題に関する調査」より）

亡した生徒もいる学校が出るなど、体罰がエスカレートしている。管理化が強まれば強まるほど、生徒の反発も強くなり、それを押さえ込むために体罰が日常化し、過激になってくる。たしかに体罰によって即時的な効果は得られる。しかし、その場は押さえられても、長続きはしない。また、新たな体罰を加えることになり、しかも前と同じでは効果が得られない。そこで、体罰はますます過激になる。まさに、悪循環だ。

第二は、体罰を加えることによるマイナスの教育効果の大きさである。先の「児童・生徒のいじめ問題に関する調査」で、体罰を受けたことのある生徒とない生徒との、担任の先生の評価を比較してみた。明らかに体罰を受けたことのある生徒は、担任教師に否定的な評価を下していることが分かる（IV－3表）。体罰が教師と生徒との心理的距離を大きくし、両者の信頼関係を大きく損ねていることは疑いのない事実である。

体罰は必要悪か

体罰なくして、今の荒れた学校に立ち向かっていけるかという議論もあるが、しかし、逆に体罰を用いることがはたして教育なのかということを改めて問い直してみる必要がある。体罰に関してアメリカの状況をみると、多くの学校で原則的に体罰を容認している。しかし、

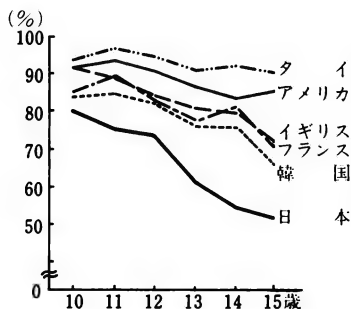
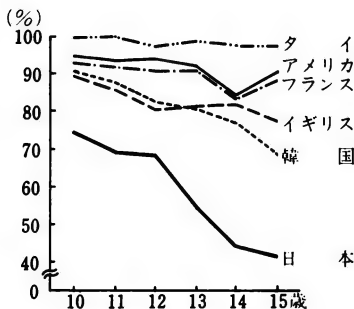
の内容も異なる。アメリカでは、前節でふれたように教育的懲戒がきわめてはっきりと規定されて教師の体罰は親の許可があってはじめて行なわれる。しかも、違法行為によって、課せられる体罰いる。わが国でも、こうした罰則をつくっていくことも必要だろう。秦政春氏は、処罰が教師個人の判断で行なわれるため、教師によってその内容や方法が異なり、しかも子どもによってもバラバラになりやすく、このことが体罰を生み出す危険につながるとした上で、「子どもたちの違法行為に対する教育的懲戒を成文化していく必要がある」と指摘している（秦政春「体罰と教師―子ども関係」深谷昌志編『体罰』現代のエスプリ二三一号・至文堂）。検討すべき課題だ。

体罰の問題は、教師と生徒との信頼関係が崩れていることをわれわれに教えてくれる。教育とは、教師と生徒との信頼関係があってはじめて成立する。それが崩れてきていることは、教育の危機の現れである。両者の信頼関係の回復こそなによりも大きな教育課題である。

3 教師

(1) 生徒からみた教師

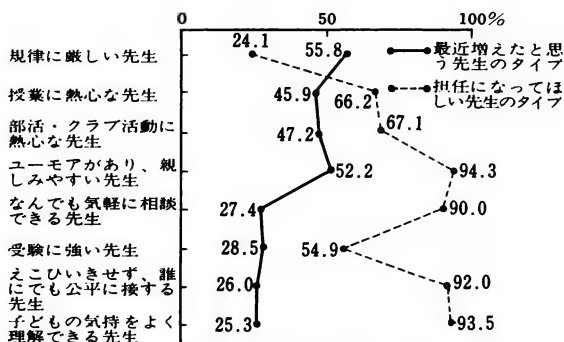
揺らぐ教師への信頼

日本の中学校の教師と生徒との関係は、きわめて葛藤に満ちている。教師の権威の低下とも相まって、生徒からの信頼感もますます薄らいできている。国際的にみても、日本の中学生の教師への信頼感は非常に希薄である。

IV-14図 「担任の先生が好きである」 「先生を尊敬している」

(総理府青少年対策本部「日本の子供と母親」より)

総理府(現総務庁)が、昭和五四年に、アメリカ、イギリス、韓国、タイ、フランス、それに日本の一〇~一五歳の子どもを対象に実施した「児童の実態等に関する国際比較調査」では、①先生が好きか、②困ったとき相談するか、③先生は自分を理解しているか、④先生は個人的に心配してくれるか、⑤先生を尊敬しているか、の五項目から、子どもの教師観をとらえている。

日本では、「先生は個人的に心配してくれる」という子どもがやや多いものの、好き、尊敬している、理解してくれる、相談するの四項目は、他の五か国と比較すると肯定するものが少ない。「担任の先生が好き」と「先生を尊敬している」の二項目を年齢別にみると、どの年齢層をとっても、好き、尊敬しているというものが日本で最も少なくなっており、しかも年齢の上昇とともに、その数は急激に落ち込んでいる。一五歳では、「先生が好き」という生徒は半数に、「先生を尊敬している」という生徒はわずか四割ほどにとどまる(IV―14図)。

中学生ともなれば、学校や教師の持つ規範的価値から離脱し、自分たち独自のインフォーマルな価値形成を志向するようになる。このため、年齢の上昇とともに、教師への評価が厳しくな

Ⅳ-15図　最近増えたと思う先生のタイプと担任になってほしい先生のタイプのズレ

（日米中学生・母親調査）

るのは当然かもしれない。各国とも、年齢の上昇とともに、先生が好きという生徒がほぼ系統的に減少しているのはそのためだろう。しかし、日本の中学生は、その減少が極端で、好き、尊敬しているというものが、きわめて少なく、教師をマイナスに評価するものが多い。

期待と現実のズレ

なぜ、日本の中学生で、これほどまでに教師を否定的に評価するのだろうか。様々な要因が考えられるが、その一つとして、中学生の求める教師像と、現実の教師の教師像との大きなズレが指摘できる。生徒の、本当はこうあってほしい、あるいはこうしてほしいという教師への役割期待と現実の役割遂行とのズレが、教師への否定的評価に結びついているものと思われる。

「日米中学生・母親調査」では、最近増えた教師のタイプと担任になってほしい教師のタイプとをたずねている（Ⅳ—15図）。

まず、どのような教師が増えたかをみると、日本では、管理主義を反映してか「規律に厳しい先生」、そして感覚性を反映してか「ユーモアがあり、親しみやすい先生」が増えたと答える生徒が多い。逆に、「子どもの気持をよく理解できる先生」「えこひいきせず、誰にでも公平に接する先生」

「なんでも気軽に相談できる先生」はあまり増えていないとみている。この傾向は、学年の上昇とともに強くなっている。

一方、アメリカでは、最近、基礎学力の向上に力を入れるためか、「授業に熱心な先生」が増えたという生徒が非常に多く、他を圧倒している。アメリカでは、教師の質的低下が大きな問題になっており、教師の資質向上に力を入れていることも、こうした結果になって表れているのだろう。

生徒の望む教師像

では、中学生はどのようなタイプの教師を望んでいるのだろうか。日本、アメリカの中学生とも「ユーモアがあり、親しみやすい先生」「えこひいきせず、誰にでも公平に接する先生」「子どもの気持をよく理解できる先生」をあげるものが最も多い。日本では、この他、「なんでも気軽に相談できる先生」に担任になってほしいという生徒が九割をこす。日本の中学生は、部活・クラブ活動、授業、受験指導、生活指導など直接的な指導に熱心な先生よりも、むしろ、親身になって相談にのり、自分たちを本当に理解してくれる教師を強く望んでいる。もっとも、こうした先生を求めるのは、どこの国でも同じで、アメリカでも教師とのコミュニケーションを強く望んでいる。

ただアメリカと比較すると、日本の中学生には、現実の教師像と期待する教師像とに大きなズレがみられる。生徒に期待されていないにもかかわらず、増えたというのが「規律に厳しい先生」である。比較的ズレが小さく、現実と期待が一致しているのは、「ユーモアがあり、親しみやすい先生」だ。

中学生が期待しているにもかかわらず、現実に多くないのは、「なんでも気軽に相談できる先生」「えこひいきせず誰にでも公平に接する先生」「子どもの気持をよく理解できる先生」の三タイプ

だ。この三タイプは、現実と期待とのギャップがあまりにも大きい。日本の中学生は、単に、もの分かりのよい教師よりも、自分たちの問題や悩みを真剣に受け止め、親身になって指導してくれる教師を強く期待している。

しかし、生徒の目からみると、実際にはそういう教師が少ない。少ないだけに、期待も強くなるのだろう。この傾向は、学校生活に適応していない生徒ほど強くみられる。学校生活が楽しくないという中学生ほど、「えこひいきせず、誰にでも公平に接する先生」と「子どもの気持をよく理解できる先生」に担任になってほしいというものが多く、切実な願いが現れていると言えよう。

こうしたズレの大きさが、教師への否定的な評価に結びついているようだ。中学生は、教師との意思の疎通を強く求めている。

意思疎通を欠いた相互関係

では、教師は、生徒との交流についてどのようにみているのだろうか。教師に「生徒から相談をもちかけられるか」どうかを質問してみると、日本では「よくある」というのは、わずか一二・九%にとどまる。一方、アメリカでは、その数は四一・九%にも達しており、日本の三倍強である(日米中学校教師調査)。日本では、教師の側からみても、生徒との意思の疎通は必ずしもうまくいっているとは言いがたい。生徒は、教師との交流を求めているにもかかわらず、教師がそれに十分応えきれていないことをこの結果は示している。

教師と生徒との意思の疎通が求められているにもかかわらず、現実にそれがうまくいっていない。その最も大きな要因は、教師のゆとりのなさだろう。教える内容が多く、授業時間数がたりない、しかも日々の実践に受験の圧力を感じている教師が日本で非常に多いことは、すでにみたとおりである。こうしたゆとりのなさが、生徒とのコミュニケーションを阻害する要因になっている。また、

学習指導に限らず、生活指導、校外指導など、教師の役割が過重になり、このことも教師からゆとりを奪っている。

さらに、生徒が荒れ、中学校が社会的に問題になればなるほど、教師には、秩序を維持するという責任が要請される。生徒のよき理解者である前に、管理者、統制者としての役割が教師には課せられている。生徒の管理者、統制者としての役割ではなく、理解者、指導者としての役割が求められている一方で、管理者、統制者としての役割ではなく、理解者、指導者としての役割が求められている。生徒とのコミュニケーションをはかり、一人ひとりの生徒を理解し、指導していくためには、まず教師が物理的、心理的なゆとりを回復せねばならない。このための条件の整備や改革を進めていくことが必要である。

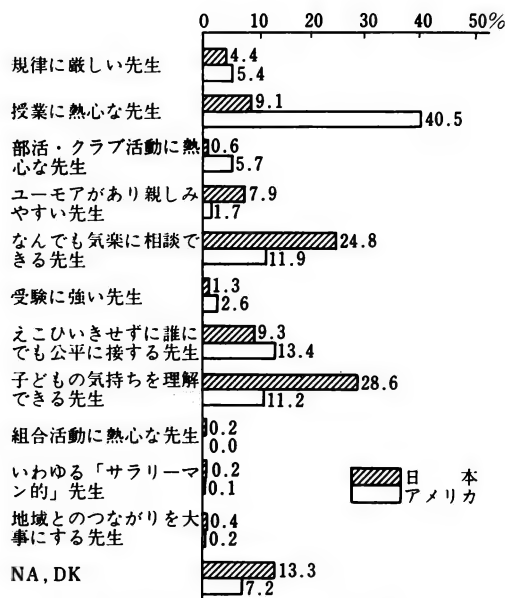
(2) 親からみた教師

分化する評価と期待

ここでは、視点を変え、親と教師との関係をみていこう。まず、親の教師観である。

「日米中学生・母親調査」では、中学生同様に、母親に対して、どのような教師が増えたと思うか、またどのような教師に子どもの担任になってほしいかの二点を質問した。

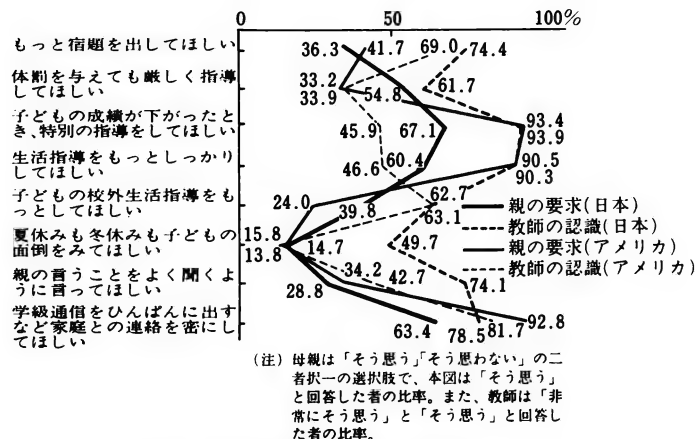
母親が最近増えたとみている教師は、日本では「いわゆるサラリーマン的先生」が六割と最も多い。ついで、「部活動やクラブ活動に熱心な先生」（五二・四％）、「授業に熱心な先生」（四九・三％）などをあげる母親が多い。つまり日本の母親の間では、現実の教師への評価は二分されているようだ。

一方、アメリカでは、「組合活動に熱心な先生」が増えたという母親が六割をこし、ついで「ユー

Ⅳ-16図　最も担任になってほしい教師のタイプ
（日米中学生・母親調査）

モアがあり親しみやすい先生」（五五・八%）「なんでも気軽に相談できる先生」（五四・〇%）などをあげる母親が多い。

次に、最も子どもの担任になってほしいのはどのようなタイプの教師かを質問した。Ⅳ—16図に示すように、日本では、「子どもの気持を理解できる先生」と「なんでも気軽に相談できる先生」をあげる母親が多い。日本の母親も、子どもと教師との意思の疎通を強く望んでいる。ただ、日本では学歴によって、期待する教師像が違っている。高学歴の母親ほど、「授業に熱心な先生」と「子どもの気持をよく理解できる先生」をあげ、逆に学歴が高くない母親ほど、「気軽に相談できる先生」「誰にでも公平な先生」「親しみやすい先生」をあげている。

学歴が高くない母親は、教師との間に心理的距離を感じており、それがこうしたコミュニケーション志向型の教師を期待していると言えるかもしれない。逆に、高学歴の母親は、授業に力を入れてほしいと願っており、やや学力へのこだわりがみられる。

(注)母親は「そう思う」「そう思わない」の二者択一の選択肢で、本図は「そう思う」と回答した者の比率。また、教師は「非常にそう思う」と「そう思う」と回答した者の比率。

IV-17図　親の教育要求と教師のその認識
（日米中学校教師調査）

一方、アメリカでは「授業に熱心な先生」をあげる母親が四割と圧倒的に多い。基礎学力の低下のため、学力保障が叫ばれており、それが母親の強い期待となって現れている。アメリカでは親と教師、生徒と教師とのコミュニケーションは比較的うまくいっているため、コミュニケーション志向型の教師より、授業に熱心な教師を期待しているとも言える。

親の要求と教師

では、母親は、教師に対し、具体的になにを望んでいるのだろうか。「日米中学生・母親調査」では、八項目にわたり、その要求を把握してみた。

全体的には、アメリカの母親の要求が強い。特に、「子どもの成績が下がったとき、特別の指導をしてほしい」「学級通信をひんぱんに出すなど家庭との連絡を密にしてほしい」「生徒指導をもっとしてほしい」の三項目は九割をこす母親が要望している。

日本でも、同様にこの三項目に要望が集中しているが、その数はそれぞれ六割ほどにとどまる。ただ、アメリカとの大きな違いは、「体罰を与えても厳しく

指導してほしい」という要望が強い点である。すでにふれたように、日本の教師の体罰は、親の一定の支持のもとに行なわれていることを改めて確認できる。

ところで、「日米中学校教師調査」では、今までみてきた母親の要求を教師がどの程度認識しているかを質問してみた。IV－17図は、その結果を示したものだ。日本では、母親の実際の要求を教師は過大に評価している。日本の教師の〝律儀さ〟をみごとに映し出していると言えよう。この結果は、教師が親の教育要求を必ずしも的確にとらえているということではない。親が教師に対し過剰な期待を抱いているという、言わば教師の側のわずらわしさの現れとみることもできる。

親の教育要求は、わが子を中心とした個別なものになりがちだが、しかし、だからといってすべての親の要求を排除していくことは間違いである。学習指導、生活指導、家庭との連携など、教育の中核にかかわる活動に対する親の要求が強く、教師もその要求の強さを認識している。今後、いかにそれを実践し、親の要求に応えていくかが問われている。

アメリカにみる親と教師の交流

一方、アメリカでは、教師が考えている以上に、母親の要求は強い。特に、学習指導、生活指導という教師の中核的活動への要求が強いが、教師はそれを的確に把握していない。教師の現実の活動と親の要求水準とのズレがこうした結果になって現れているのだろう。ただ、日本と大きく違う点は、「学級通信をひんぱんに出すなど、家庭との連絡を密にしてほしい」が親、教師とも高い比率で一致している点である。

アメリカでは、親と教師との交流は盛んで、学校、教師は、地域住民や親の意見を尊重する。両者の交流の形態は様々だが、主にＰＴＡなどの組織と行事の二つをあげることができる。日本でも父母と教師との交流が求められているにもかかわらず、なかなかうまくいっていないのが現状であ

る。この点、アメリカから学ぶことは多い。そこで、アメリカの具体例を紹介しておこう。

ここでは、フロリダ州のミドルスクール、リンカーン校の場合をみてみよう。

リンカーン校では、PTA、SAC（学校助言委員会）、オープンハウス、父母懇談会などを通し、親と教師、学校との交流を行なっている。リンカーン校の場合、PTAは単に財政面での支持グループにすぎず、しかも任意加入である一方、教育面での相談グループ、SACと言われる組織がある。

このSACは、通常月一回、ウィークデーの夕方、会合が開かれる。メンバーは、校長、副校長、カウンセラー、それに任意加入の親から成っている。話し合いは大変活発で、率直な意見が交わされるという。対等な協力関係を自覚しており、日本のPTAのような単なる相互理解をはかるだけの場や親睦団体ではない。SACは、学校運営や教師の教育活動に実質的に機能している。

また、オープンハウスは、父母の学校参観日のことで、親は自分の子どもの受ける授業を、時間割通りに順にそれぞれの教室に行って、担当の教師から、授業の進め方について説明を受け、また自由に質問できるようになっている（リンカーン校の事例は、安彦忠彦「フロリダ教育体験記」『学習指導研修』教育開発研究所に詳しい）。

アメリカでは、教師は親との交流を積極的にはかっている。歴史的にも、制度的にも、日本とアメリカでは大きく違うが、学ぶべき点は多い。

日本では、PTAの形骸化がつとに指摘され、親と教師との相互不信が広がっている。こうした現状を改善するために、両者の相互信頼をつくっていけるような交流のあり方を模索していくべきだろう。

(3) 苦悩する教師

問われる教師の資質

ここ数年、日本では教師の資質低下が大きな問題になっている。かつて、これほどまでに、教師の力量が問われた時代はなかった。

海の向こうアメリカでも、教師の資質の低下は、日本以上に深刻だ。まず、アメリカの現状からみていこう。

アメリカの教師の資質の低下の大きな要因は、低い待遇にあると言われている。アメリカの教師の最大の供給源は、かつては低所得層と女性であった。したがって、低い給与水準でも、優秀な人材が集まってきた。しかし、社会全体の生活水準の向上や女性の社会的進出が進み、今まで集まっていた優秀な人材は、待遇が悪いため、他の職業に吸収され、教職に見向きもしなくなった。このことが、教師の質的低下を引き起こした最大の要因だと言われる。きのうまで同僚だった教師が、突然やめて、警察官になっていたという話さえある。教師と警察官では、警察官の方が給与水準が高いためだ。また、職員給与だけでは食えないため、勤務時間外に様々なアルバイトをしている教師も少なくないという。最近、様々な改善がなされているが、いまだ十分な効果をあげるまでにはいたっていない。

燃え尽きた教師

こうした状況を反映してか、アメリカでは教師の〝バーンアウト（燃え尽き）現象〟が問題になってきている。

朝日新聞社の小林泰宏氏は、アメリカの教師の間に、このバーンアウト現象が広がっていることを報告している。

これは、「怒り、不安、イライラ、倦怠、冷淡、疲労感などが度をこえた状態」をさすが、一九八二年のニューヨーク市の教師調査の結果では、全体の二〇%がすでに燃え尽き、他の二五%近くもその危険があり、実に二人に一人はまともな教師ではないことが報告されている。このバーンアウトは、低い待遇の中で、荒れる生徒を前にし、同僚との連携もなく孤立し、職場のストレスがどんどん蓄積していくことによってもたらされるという(小林泰宏『アメリカで進む教育改革』朝日新聞社)。

広がるバーンアウト現象

日本の中学校教師の間にも、このバーンアウト現象がみられるのではないだろうか。荒れる生徒、過重な負担、統制の強化など、バーンアウト現象を引き起こす条件がそろいすぎている。

松本良夫氏が中心になってまとめた『中学校教員の役割革新に関する基礎的研究』では、教職への不適応兆候をⅣ—4表に示すように、「A・勤務不適応」(どんな職種にも共通する勤労生活への不適応状況)と「B・職種不適応」(教職に特有の不適応兆候)の二面からとらえている。

まず、「勤務不適応」からみると、「疲れやすい」が七割強、「憂うつな気分」と「イライラする」がそれぞれ四割と、かなり勤務不適応兆候がみられる。これは、女性教師、そして二〇代、三〇代の若い教師の間に強くみられる傾向である。また、「職種不適応」をみると、「授業のとき気が重い」が三割、「生徒との接触がわずらわしい」が四分の一などとなっており、これまた、女性教師、若い教師ほど強くなっている。

言わば、バーンアウト症候群が日本の中学校教師、特に女性教師、若い教師に広がっている。この他、この調査では、退職の危機に直面したことのある中学校教師が三七%にも達することも報告

Ⅳ-4表　不適応兆候

	全体	性別		年齢別			
		男性	女性	20代	30代	40代	50歳以上
〈A：勤務不適応〉							
疲れやすい	73.3	67.6	82.2	72.9	78.3	72.3	69.5
安眠できない	16.2	12.6	22.0	18.8	18.5	19.0	9.6
憂うつな気分	43.0	37.8	51.5	51.2	46.2	43.8	31.9
イライラする	40.5	34.4	50.4	55.3	43.5	35.8	27.7
不　安　感	17.5	14.8	22.0	26.5	15.2	16.1	12.8
〈B：職種不適応〉							
生徒との接触がわずらわしい	23.1	18.5	29.5	33.5	31.0	16.8	10.6
同僚と顔を合わせたくない	9.9	7.0	14.4	11.2	14.1	9.5	4.8
父母との接触がわずらわしい	17.4	13.8	22.7	31.8	16.8	10.9	9.6
授業のとき気が重い	30.2	24.5	39.4	43.5	33.7	26.3	17.6
勤務が苦痛だ	11.9	8.5	17.4	17.6	14.1	8.0	7.4

（『中学校教員の役割革新に関する基礎的研究』より）

されている。その理由は、生徒の「荒れ」や問題行動にからむ指導上の問題をあげる教師が約半数を占めている。また、中学校教師という職業への自己評価も低く、「気苦労の多い」（九六％）割には、「経済的に恵まれない」（八六％）仕事であり、小学校や高校の教師よりもきつい仕事だと受け止めている（松本良夫他・文部省科学研究費研究成果報告書『中学校教員の役割革新に関する基礎的研究』一九八七年）。

教師づくりの条件

以上の結果からもわかるように、バーンアウト現象は、アメリカだけの問題ではなく、日本にも広がりつつある。教師がやる気をなくし、意気消沈していたのでは、十分な教育は望めまい。教師が燃え尽きる前に、早急に現状を改善していく必要がある。このためには、やはり教師の役割を軽減していくことが重要だろう。

日本の中学校教師は、あまりにも役割が過重である。こうした中で、学校に遅くまで残って仕事をする教師も少なくない。「日米中学校教師調査」で「下校時間がすぎても、学校に残っていることが多いかどうか」を

たずねたところ、日本では四人に三人までが、学校に残っていることが多いと答えている。
教師の資質向上は重要な課題だが、それを単に教師一人ひとりの努力や意識改革だけに求めたのでは達成できない。教師が自らの職務を自律的に、しかも意欲をもって取り組んでいけるような条件整備こそ急がれる。〝苦悩する教師〟を排除するのではなく、教師が生徒に対し情熱を持って指導していけるような体制づくりが急務である。
これからの教育は、やはり教師の力量に負うところが大きい。教師という仕事は、未来を切りひらく子どもたちの成長発達に楽しみを感じ、自らもまた人間的に成長していき、日々の仕事に充実感を味わうことができるようなものでなければならない。
一人ひとりの教師が教育実践の創造者として、その力量を高めることができるようにしていくことが求められている。

V　親子関係

全国教育美術展（一九八五年）から
香川県高松市　安西宏樹（絵）（当時・中１）

1　中学生と母親

アメリカの母親と中国の母親

「お母さん」というと私たちは、普通、自分のことは二の次にして子どもにつくす「やさしい母親」、子どものことにいちいち口を出し世話をやく「過保護ママ」、あるいは子どもの成績と進学にしか関心がない「教育ママ」などを思い浮かべる。これらはいずれも、なによりも子どもに関心を注ぎ、子どもを生きがいとする母親像である。

しかし、アメリカの母親の多くは、子どもにあまり関心を示さない。子どもの成績や進路を心配する母親は、ごくまれにしかいない。アメリカの女性は伝統的に、母としての役割、生き方よりも、妻として、あるいは女性としての役割、生き方を重視する傾向が強かった。女性の社会進出の拡大、伝統的家族規範の解体などの近年の傾向が、これをさらに増幅している。

アメリカで中学校教師を長くしている瀬光悟氏の、次のような言葉は、今日のアメリカの母親の姿をよく伝えてくれる。

アメリカ人は、もう子育ても終わったので、とよくいう。子供を学校に行かせ義務教育を卒業させれば、今度は親が自由になりたい、いや自由になる番だという。子育てとは終わるものなのだろうか。その終わりを告げると共に、親の背負う子らへの教育権すらも放棄してしまっ

たような言い方をして喜々としている母親を見ると、責任の所在も忘れた〝甘えの構造〟を、叩き壊したくなる思いにかられることがあるのは、教師としての勝手な発言だろうか。そんな母達の勝手な発言を耳にするから、逆に子供からは、それなら俺達も自由に、といわれてなめられてしまうのだ。

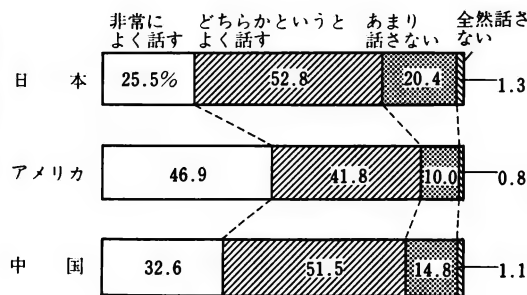
（瀬光悟・淳子、前掲書）

一方、中国の母親は、子どもへの関心は強いが、子どもにすると、大変「こわい」存在という。中国からの留学生である知り合いの女性は、「日本に来て感心したことの一つは、日本のお母さんがやさしいことね。子どもにいつもニコニコしているし、決して人前でどなったりなんかしない。中国のお母さんはこわいよ。しょっちゅうおこるし、人前でも平気でどなる。私なんて、お母さんから、やさしくされた記憶、ほとんどないよ。顔さえみれば、勉強しなさい、勉強しなさいって言われた」と、話してくれた。

国によって、母親の子どもに対する態度は、ずいぶん違うのである。以下では、中学生と母親との関係を、主に国際比較を通して、具体的に見てみよう。

お母さんとの対話

日本の子どもは、中学生になると急に家で話さなくなる。特に男の子の場合、母親に対しても、「メシ」「カネ」「ウッセイ」（ウルサイ）の三つしか言わなくなる、とよく言われる。実態はどうであろうか。

V—1図は、「日米中学生・母親調査」「中国の中学生・母親・教師調査」の結果である（以下この章では、特に断りのない場合この二つの調査による）。これによると、やはり日本の中学生は、三

V－1図　お母さんとの対話の頻度
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学生・母親調査）

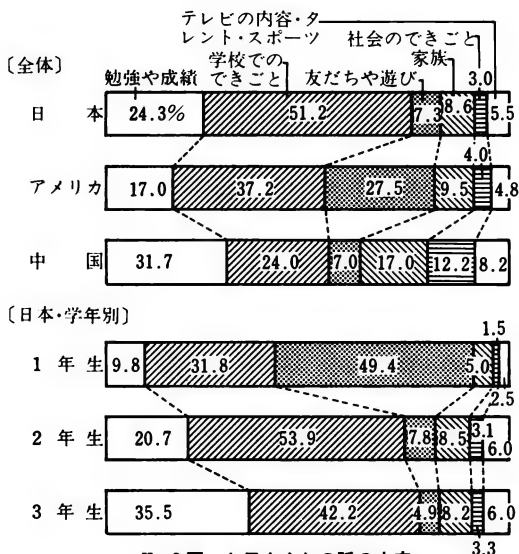
か国の中で、最も母親との対話の頻度が低い。

アメリカでは半分近く、中国でも三分の一の中学生が、お母さんと「非常によく話す」と答えているが、日本では四分の一にとどまるのである。しかし、「どちらかというとよく話す」まで入れると、日本の中学生でも、八割近くは、母親とよく話す、と答えている。これは、確かにアメリカや中国よりは少ないが、それ自体としては決して低い数字ではない。

このように、日本の中学生は、言われるほど家で無口なわけではない。しかし、男女差が大きいのは、事実のようである。

「日米中学生・母親調査」の結果を男女別にみると、母親との対話の頻度の男女差は、アメリカではあまりないが、日本では非常に大きい。お母さんと「非常によく話す」という者の比率は、男子一三・八%に対して女子三六・二%、「あまり話さない」「全然話さない」という者の比率は、男子三〇・一%に対して女子一四・一%なのである。

このように、日本の男子中学生が家で話をしない（次節でみるように、父親とはもっと話をしない）のは、なぜなのだろうか。

おそらく、その最大の理由は、文化の相違だろう。夫婦だろうと親子だろうと、はっきり口に出して言わないと意思疎通しないアメリカの文化と、親しい者同士なら、口で言わなくとも以心伝心

V-2図　お母さんとの話の内容
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学生・母親調査）

で通じてしまう（と思っている）日本の文化との違い。また、性差をできるだけ強調しなくなった今日のアメリカと、性別規範がなお根強く残っている日本（「男は黙って……」）の違いなど。しかし、同時に、子どもは男一人女一人が多く、父親はめったに家にいない現代の日本の家庭では、男の子は思春期をすぎると、どうしても孤立しがちになるのである。日本の男子中学生の、母親との対話の少なさは、そのような「孤立」を物語っているともいえよう。

お母さんとの話題

中学生とお母さんとの間で交される話題も、国によってかなり異なる。

お母さんとよく話す事柄は、日本では、学校でのできごとが圧倒的に多く勉強や成績のことがこれに次ぐ。この二つで、七五%を占めている。アメリカでは、学校でのできごとが最も多いが日本ほどではなく、友だちや遊びのことがこれに次いで多い。両者で六五%を占める。それに対して、中国では、勉強や成績のことが最も多い。第二位は学校でのできごとだが、日本やアメリカに比べるとずっと少なく、その代わり家族のことが両国よりかなり多くなってい

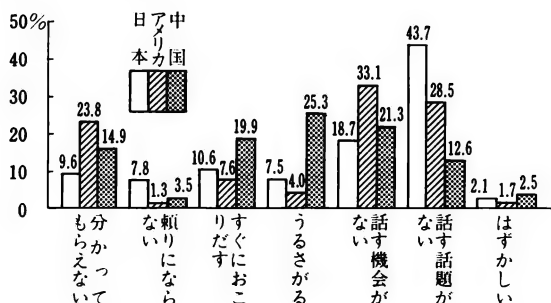
る（V―2図）。

このように、母親との話題については、日本の中学生は学校でのできごと、アメリカの中学生は友だちや遊びのこと、中国の中学生は勉強や成績のことが、それぞれ他より多いことに特徴がある。中国の母親の、子どもの勉強や成績への関心の高さは、調査対象地が上海という中国の最先端をゆく大都市で、「重点中学校」の生徒がかなり含まれていることを割り引いても、いささか異常である。

しかし、日本の場合も、図の学年別のデータが示すように、学年が進むと、勉強や成績のことが目立って増えてくる。一年生では一割に満たなかったのが、三年生では三割五分にもなるのである。その代わり、一年生では約五割もあった友だちや遊びのことは、二年生以上では激減し、三年生で過半数を占めた学校でのできごとも、三年生には減少する。

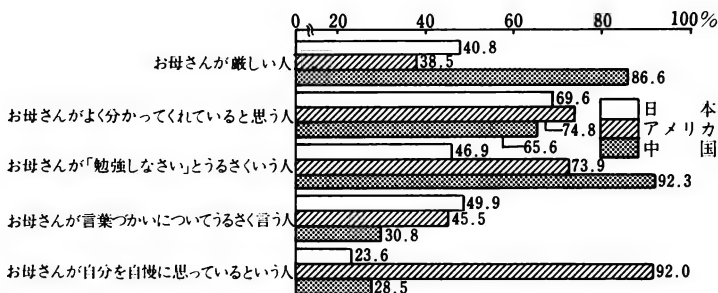
このことから見ても、日本の場合の「学校でのできごと」は、アメリカの場合と違って、学業のことが中心となっているようである。アメリカでは、「学校でのできごと」といった場合、クラブ活動や学校行事のことが中心であるが、日本の場合、おそらく、授業やテストのことが中心であろう。こう考えると、日本の中学生の母親は、子どもの学年が進むと、急激に関心が学校の勉強や成績、受験などに集中してくる、と言える。受験体制の重圧は、母と子の話題にも、はっきりと表れているのである。

お母さんとの対話を妨げるもの

先のV―1図にあるように、日本では二割以上、アメリカ、中国では一割から一割五分の中学生が、お母さんとはあまり話さないと答えているが、なにが理由なのであろうか。

V—3図に示すように、日本の中学生では、「話す話題がない」というのが四割以上を占めて最も多い。アメリカの中学生では、「話す機会がない」が三三％で最大だが、「話す話題がない」「分かってもらえない」も多い。中国の中学生の場合は、いろいろな理由に分かれているが、日米と比較して、「うるさがる」「すぐにおこりだす」が多い。日本は、学校が閉鎖的であったり、家庭にいる母親が多かったりすることが、アメリカは、働いている母親が多く、夜も子どもを置いて外出したりすることが、このような特徴を生み出しているのであろう。中国の場合は、親子関係をめぐる文化の特質もあろうが、住宅事情の悪さや家庭電化の遅れによる母親の疲労なども、原因の一つとなっているのだろう。

V-3図　お母さんと話さない理由
（中国の中学生・母親・教師調査）

日本の場合、お母さんと話す話題がないという中学生は、男子に多く、また、学年が上がるほど多くなる。母親との対話が少ない者に占めるその比率は、男子五七・三％、女子四七・六％、一年生四三・九％、二年生五三・〇％、三年生六四・七％である。しかも、男女では、母親との対話が少ない者の比率自体が異なるので、「話題がないから」という者の数は、男子は女子の二・六倍にもなるのである。

同性同士よりも異性の方が、また、年齢が上がって大人に近づくほど、親子の間に共通の話題が少なくなるというのは、当たり前といえば当たり前である。この事実を前にして、なんと

V-4図　お母さんのこと　　（中国の中学生・母親・教師調査）

なくさみしさを感じるのは、私が親だからだろうか。

親が子どもに与える影響は、親が子どもにどう接しているかという、〝事実〟もさることながら、子どもが親の態度をどう受け取っているかによっても、大きく異なってくる。

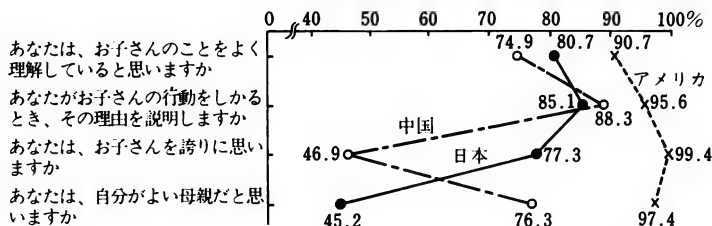
中学生の母親像

V―4図は、中学生に、「お母さんは○○ですか」と質問して、「はい」と答えた者の比率である。これによると、まず、お母さんが自分に厳しいという者は、中国がずばぬけて多い。日本はアメリカよりは多いが、それでも中国の五分の三以下にすぎない。お母さんが自分のことをよく分かってくれていると思う者は、三か国とも約七割で、かなりの高率である。中でもアメリカは、これが特に多い。

次に、お母さんが「勉強しなさい」とうるさく言うという者は、中国が極端に多く、九割をこえている。アメリカが約七割でこれに次ぎ、日本は五割にも満たない。日本の母親の方が、明らかに子どもの学業に関心が強く、勉強のことをよく口にするのに、ここでは逆の結果になっているのは、まさに受け取り方の相違による。

これとは反対に、お母さんが言葉づかいについてうるさく言うという者は、日本が五割で最も多く、アメリカもこれに近いが、中国は三割にとどまる。少なくとも、調査対象となった上海の中学生の

母親は、勉強以外のしつけには、あまり関心がないようである。
最後に、お母さんが自分を自慢に思っているという者の比率をみると、これはアメリカと日本、中国とで非常に違う。アメリカでは九割をこえているのに対して、中国では三割弱、日本では二割強にすぎないのである。この背後には、もちろんアメリカと東アジアとの文化の違い（愛情表現の方法、母子の一体化など）があるが、同時に、厳しい受験・学力競争の中で日本や中国の中学生が陥っている、深い自信喪失があるのではなかろうか。
以上の結果から、各国の中学生の母親像をまとめてみると、次のようになる。
●日本――「勉強しろ」とそれほどやかましくは言わないが、言葉づかいにうるさい。自分のことを自慢に思ってくれていない母親。
●アメリカ――自分のことをよく分かってくれており、とても自慢に思ってくれている、優しい母親。
●中国――言葉づかいについてはそうでもないが、「勉強しろ」と大変うるさく言う、とても厳しい母親。自分のことをそれほどよく分かってくれていない。
家族の解体、子どもを虐待する親の増加等という現実を考えると、アメリカの中学生が母親に示す強い信頼感は、そう思わなくてはやっていけない母子関係の危うさを物語っているとも思える。また、とにかく勉強のことに厳しすぎるという中国（上海）の中学生の母親像も、かなり問題である。
それに比して、日本の中学生の母親像は、今のところ、一点を除いてはほぼ良好である。その一点とは、お母さんは自分を誇らしく思ってはいない、という認識である。これはおそらく、自分は

（注）各項目とも「はい」と答えた者の比率

V－5図　母子関係の評価
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学生・母親調査）

学校の成績やその他の面で母親の期待に応えていない、という意識から来るものだろう。母と子という、最も属性本位の価値が貫徹するはずの関係（わが子だからかわいい、誇らしい）に、学力その他の業績主義の価値が関与してしまっている日本の現状は、やはり大きな問題だと言わざるをえない。アイデンティティの確立のためには、肯定的な自己イメージを獲得することが不可欠であるが、最も「重要な他者」である母親から肯定的な評価を得ているという意識を持てないと、これが妨げられるからである。

これらの問題の背後には、厳しい受験体制が、さらにその背後には、今日の私たちの社会の効率第一主義や画一主義、序列主義などがあることは、言うまでもない。

望ましい母子関係

日本の中学生に顕著にみられた、否定的自己イメージというのは、実は、母親の場合も同様なのである。

V―5図は、子どもへのかかわりについての、中学生の母親に対する質問の結果である。

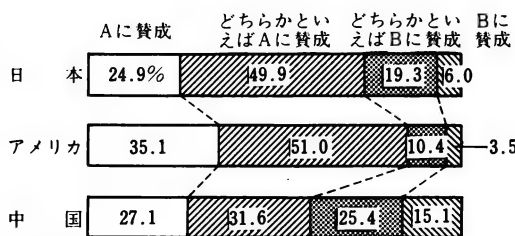
アメリカの母親は、子どもの場合と同様に、あらゆる点で母親としての自分を肯定的にとらえている。四項目の質問のすべてについて九割以上、「あなたは、お子さんを誇りに思いますか」にいたって

は九九・四％の者が「はい」と答えているのである。

それに対して日本と中国の母親は、母子関係に関するこの四項目のすべてについて、アメリカの母親ほどは、自己肯定的ではない。特に、「あなたは、お子さんを誇りに思いますか」という質問については中国の母親に、「あなたは、自分がよい母親だと思いますか」という質問については日本の母親に、「はい」と回答した者が少なく、いずれも五割に満たない。ここには、それぞれ異なった三通りの、母親の自己イメージと子どもイメージの様相が表れている。

アメリカの母親は、他人がどうみようと自分の子どもは素晴らしい人間であり、自分も子どもに理解のあるよい母親だ、と思っている。中国の母親は、自分は子どもに対して正しい接し方をしているよい母親だ、それなのに子どものできが悪いのは、自分以外の人間や本人が悪いからだ、と思っている。そして、日本の母親は、自分の子どもは本来大変よい子だ、それなのにいろいろな問題点があるのは、自分がダメな母親だからだ、と思っている。

ここには、それぞれの国の文化の違いがよく表れている。アメリカ人は、一般に、性善説の人間観を持ち、強烈な自己正当化を行ない自己主張するが、基本的な人間観は性悪説に立っている。それに対して、中国人は一般に、かなり強く自己正当化を行ない自己主張と自己正当化を行なう国民である。そして日本人は、一般に、性善説を信じており、はっきりと自己主張しない、よく言えば謙虚、悪く言えば卑屈な国民性なのである。しかし、同時に、中国と日本の母親には、子どもを誇りに思う人がアメリカよりかなり少ないことを考えると、やはり中国と日本の母親の子ども像には、受験競争、それによる序列主義の影響を感じざるをえない。

このような各国の母親は、望ましい親子関係を、どのようにとらえているのだろうか。

A．親子といえども別々の人格であると思う。したがって相手の人格を尊重するだけでなく、お互いの自由を認めるべきだ。
B．親子は一心同体であると思う。したがって他人のような遠慮はいらないだけでなく、相手の自由を束縛せぬようになどと、他人行儀になる必要はない。

V－6図　望ましい親子関係
（中国の中学生・母親・教師調査）

よく、日本の母子関係の特徴として、母子一体性が言われる。そこで、「日米中学生・母親調査」「中国の中学生・母親・教師調査」では、「親子は別々の人格で、したがって、互いの人格を尊重し、自由をみとめるべきだ」と思うか、それとも、「親子は一心同体で、したがって遠慮をしたり他人行儀になる必要はない」と思うかをたずねた。

その結果によると、日本・アメリカ・中国いずれの国においても、前者の方が多い。しかし、その比率はかなり違い、アメリカでは八六％に達するのに対して、日本では七五％、中国では五九％にとどまる（V―6図）。逆に言えば、「親子は一心同体」という意識を持っている母親は、アメリカでは一割強しかいないが、日本では二割五分、中国では四割いるのである。

母子一体性への志向は、やはりアメリカでは非常に弱いが、日本と中国とを比べると、予想に反して、中国の方が強いのである。

もちろん、意識と実態とは同じではない。これまでみてきたいくつかのデータから推測すると、中国よりも日本の方が母子の密着度は高いように思われる。しかし、少なくとも意識の面では、日本の母親は中国の母親よりも、かなり〝近代化〟されているのである。

日本の母子関係の特質と問題点

以上みてきたように、日本の中学生の母子関係は、それほど極端な密着型ではない。日本の母子関係の特質と言われてきた母子一体性は、もちろんアメリカとは比べるべくもないが、今日ではかなり弱まってきているのである。

むしろ、日本・アメリカ・中国の三か国を比較して目立つのは、中学生、母親双方の自信のなさである。日本の中学生は、自分が母親の自慢であるとは考えていないし、日本の母親は、自分はよい母親ではないと考えている人が多い。実際には、母親は子どものことをかなり誇りに思っているし、子どもは自分を理解してくれる優しい母親だと思っているのに。

これは、日本文化の特質とも言えるが、同時に、今日の受験体制の影響を感じさせる。さらに、日本の中学生の母親との対話をめぐる諸状況は、より直接受験体制に規定されている。

このように、今日の日本では、母子関係という最もプライベートな、最も属性本位の価値が貫徹するはずの世界まで、受験体制に支配されてしまっている。このことが、日本の中学生の母子関係の大きな特質であり、問題点である。

2　中学生と父親

私と子どもたち

私には現在、高校一年の息子と中学一年の娘がいる。息子は、中学生になったころから、私とほとんど話をしなくなった。もともと無口な子で、小学生のときから学校のことや友だちのことを親にあまり話さなかったが、中学生になってひどくなった。私

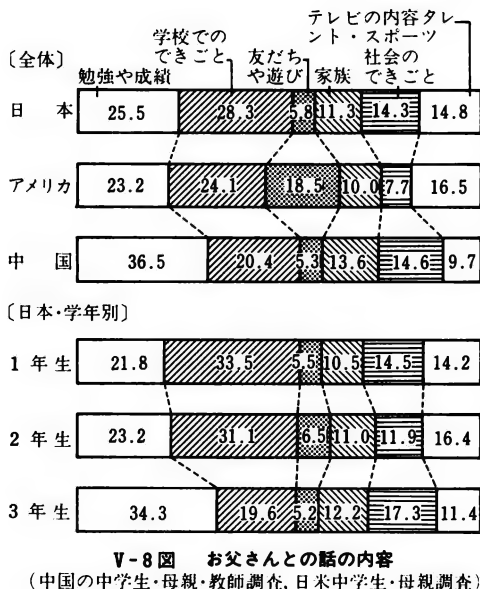
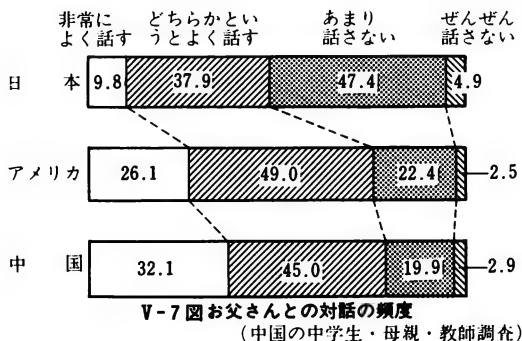
のところは共働きで私の方が時間が自由になる職業なので、息子の学校の父母会等は、小・中学校とも、私の方がよく出ていった。また、息子はもともとは大変なお父さん子で、母親とより父親と話すことの方が多かった。したがって、中学生になって父親と話をしなくなったといっても、父親だけが特別なのではなく、家ではだれとも話をしなくなったのである。

だから高校受験のときは大変だった。どこの高校に行きたいのか、どうやって受験勉強をするつもりなのか、模擬試験や塾の日程はどうなっているのかなど、聞いてもなかなかはっきり答えず、同級生の母親に確かめたり、家庭教師に聞いてもらったりする始末だった。

それに対して、娘の方は、兄とは対照的に、小さいときからおしゃべりな子だった。中学生になった今も、相変わらず、親にいろいろなことをよく話す。こちらは、小さいときはお母さん子だったが、小学校高学年ごろから父親にベタベタするようになり、今ではあまりうるさいので、私がときどき「少しは黙ってろよ」と言うほどである。それでも、最近は、彼女が塾へ行ったり私が夜遅かったりで、話をする時間はあまり多くはない。

私の子どもたちの場合は、同じ兄弟なのにどうしてこんなに違うのかと思うほど、どちらも極端である。そこで、調査の結果から、中学生の平均的な父子関係の実態を探ってみよう。

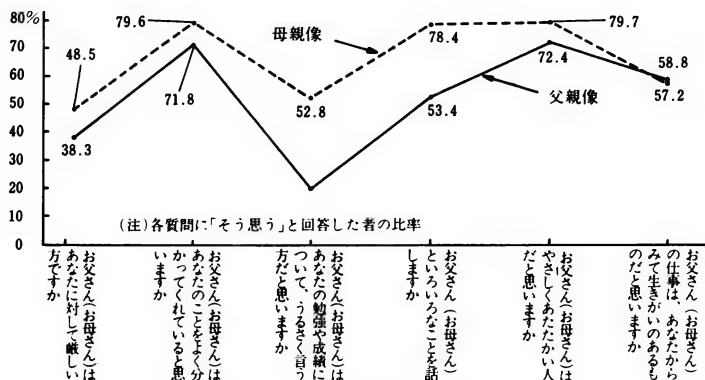
父と子の対話

まず、お父さんとの対話の頻度である。日本の中学生は、アメリカや中国の中学生と比べて、極端に父親との対話が少ない。父親と「非常によく話す」という者は、中国やアメリカでは三割前後いるのに、日本では一割しかいない。これに「どちらかというとよく話す」を加えた、父親と〝よく話す〟中学生は、中国やアメリカでは全体の四分の三もいるのに対して、日本では五割にも満た

ないのである（V—7図）。

中国の労働者は、残業などがほとんどなく、また、家事や子育てを均等に近く分担している。アメリカの父親は、子どものことなど全く考慮することなく簡単に離婚したり再婚してしまうが、子どもといるときは、対話をし、お互いに理解しあうことに大変なエネルギーを注ぐ。それに対して、日本の父親の多くは、最初から育児を妻に任せきりにしているうえ、子どもが中学生になる年代に

V－7図お父さんとの対話の頻度
（中国の中学生・母親・教師調査）

	勉強や成績	学校でのできごと	友だちや遊び	家族	社会のできごと	テレビの内容タレント・スポーツ
〔全体〕						
日　本	25.5	28.3	5.8	11.3	14.3	14.8
アメリカ	23.2	24.1	18.5	10.0	7.7	16.5
中　国	36.5	20.4	5.3	13.6	14.6	9.7
〔日本・学年別〕						
1 年 生	21.8	33.5	5.5	10.5	14.5	14.2
2 年 生	23.2	31.1	6.5	11.0	11.9	16.4
3 年 生	34.3	19.6	5.2	12.2	17.3	11.4

V－8図　お父さんとの話の内容
（中国の中学生・母親・教師調査，日米中学生・母親調査）

V－9図　父親像・母親像

(NHK 世論調査部「中学生・高校生の意識」より)

なると、仕事やつきあいで、夜も、休日もあまり家にいない。そういったことが、このような結果として表れたのであろう。

V－8図にみるように、父親と〃よく話す〃場合の主な話題は、各国とも、勉強や成績のことと学校でのできごとが多い。アメリカでは、友だちや遊びのことも少なくないが、母親との対話の場合に比べると比率は大分低い。

また、社会のできごとやテレビ・タレント・スポーツのことが母親との場合より多いのは、日本とアメリカで共通している。性別役割分業の見直しがかなり進んでいるアメリカでも、日本と同様に、父親はかつてT・パーソンズが唱えた「手段的優位者」(外部から情報や資源を導入し、家族が外の世界に適応する上でのリーダー)としての役割を、子どもとの関係では保っているのである。

なお、日本の中学生では、三年生になると、勉強や成績の話題が増える。妻に任せきりであまり関心を持たなかったこれらのことも、さすがに受験を控えた三年生ともなると父親も無関心ではいられなくなるのであろう。

しかし、日本の父親の子どもとの関係は、いかにも付け焼き刃的な感じを否めない。

このように、日本の中学生にとって、父親は母親よりはるかに遠い存在であるが、彼らは自分の父をどうみているのだろうか。日本の中学生の父親像を、母親像とも対比しながらみてみよう。

中学生の父親像

V―9図は、NHK世論調査部「中学生・高校生の意識と生活調査」(一九八二年)の結果である。これによると、日本の中学生の平均的な父親像は、自分をよく理解してくれ、あまり厳しくなく、勉強や成績についてもうるさく言わない、優しく温かい人で、自分からみてもいきがいのある仕事をしている、というものである。

母親についてこれと比較すると、母親の方が自分とよく話はするが、はるかに勉強や成績についてうるさく言い、また、自分にやや厳しい、と言うことができる。

ここには、かつてのような、「カミナリ親父」「頑固親父」＝厳しいこわい父親、といった父親像は全くない。子どもに優しく甘い、もの分かりのよい父親というのが、現代の父親像なのである。父親よりは母親の方がむしろ厳しくうるさい。厳父慈母ではなく、その逆の慈父厳母が、日本の中学生の両親像だとも言えよう。

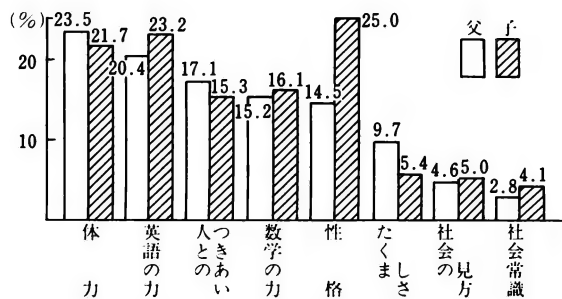
子どもは父をこえたか

小学生の終わり頃から中学生にかけては、第二成長期である。急に体が大きくなり、第二次性徴が現れ、心理的にも社会的にも、また、知識や技術の面でも、大人に近づく。身長だけで言えば、日本ではほとんどの子どもが、中学生のうちに親を追いこす。

私のところでも、私は息子が中三のときに追いこされ、妻は娘が中一なのにもうこされた（しか

も、足の長さは、二人ともずっと前にこされてしまった）。しかし、中学生というのは、人生でも最もアンバランスな時期で、体は一人前に近くなっても、その他の点ではまだ未熟である。特に、社会が複雑になり、高学歴社会になると、身体的成熟と社会的成熟との間の時間的ズレは大きくなる。

　このような状況にある今日の中学生は、かつてよりもさらに、「一人前意識」とでもいうものを持ちにくくなっているが、このことはどう父子関係に影響しているだろうか。

　東京都武蔵野市は、一九八七年に、市内の小・中学生、高校生とその両親を対象に「子どもの生活実態調査」を実施したが、その中で、中学生とその父親に、父親よりもまさっている（子どもの方がまさっている）と思うものを、八項目の中からあげさせている。

V-10図　父が子どもの力がこえたと思う割合
（武蔵野市「子どもの生活実態調査」より）

　V—10図はその結果であるが、父親も子どもも、ほぼ同じように、ほとんどすべての面で、子どもはまだ父親をこえていない、と考えている。特に、社会常識や社会の見方などの社会性については、父子ともに、子が父をこえたと思っている者は少ない。体力という、身体的面についても、こえた（こえられた）と思っているのは、父子ともに二割強にすぎない。英語の力がこえた（こえられた）と思っている者が中学生にも父親にも意外と多いことや、性格に関しては、父と子で差があり、子どもは二五％がこえ

たと思っているのに、父親は一五％しかこえられたと思っていないことなどは、興味ある事実である。いずれにしても、予想以上に、中学生は、まだまだお父さんにはかなわない、と思っているようである。

それでは、日本の中学生は、父親との関係を、全体としてはどう評価しているのだろうか。

お父さんとの間柄

武蔵野市の「子どもの生活実態調査」では、「今のところ、あなたはお父さんとの間はうまくいっていますか」との質問をしている。それに対して、「とてもうまくいっている」と答えた中学生は二六・七％、「かなりうまくいっている」は二四・九％、「ややうまくいっている」が二九・一％であった。八割が〝うまくいっている〟と答えており、そのうちの三分の一（全体の四分の一）は「たいへんうまくいっている」というのであるから、武蔵野市の中学生は、父親と大変良好な関係を保持していると言えよう。

武蔵野市は、東京二三区のすぐ西に位置し、早くから都市化が進んだ地域である。静かな住宅街が広がり、住民の学歴や所得水準が全国有数に高いことで知られている。したがって、ここの中学生をもって、全国の中学生を代表させることはできないだろう。

しかし、武蔵野市ほどではないとしても、今日の日本の中学生では、父親との間柄がうまくいっている人が大部分だろうということは、容易に想像がつく。なにしろ、今の父親は、ともかく優しくもの分かりがよく、子どもにひどく甘いのだから。

しかも、中学生たちの多くは、この父親との良好な関係は、今後もずっと続くだろうと考えている。

同じ調査の結果によると、父親との間が、「高校二年になる頃」(調査対象の中学生は二年生)〝うまくいく〟と思っている者は七七％、「大学を卒業する頃」〝うまくいく〟と思っている者は六八％に達する。

日本の多くの中学生は、受験体制の中で、様々な問題を抱えているが、こと父親との関係に関する限り、現在もそして将来の予想も、まず問題はないと考えているのである。

このように、日本の中学生は、父親との関係がかなり良好である、と考えている。

父子関係を阻むもの

しかし、先にみたように、日本の中学生の父親との対話の頻度は、アメリカや中国と比べて、際だって低い。つまり、心理的抵抗感はないが、実際の接触や交流は少ない、というのが、日本の中学生の父親との関係なのである。どうしてそうなっているのかを明らかにするために、ここで再び、父親との対話の問題に戻ってみよう。

V-11図　お父さんと話さない理由

（中国の中学生・母親・教師調査）

V―11図は、お父さんと「あまり話さない」、「全然話さない」という中学生に聞いた、父親と話さない理由である。

日本・アメリカ・中国の三か国とも、「話す機会がない」が最も多いが、日本が最高である。日本は、これと「話す話題がない」との比率がほぼ同じで、両方で全体の八割近くを占めている。それ

に対して、アメリカでは、二番目に多いのは日本同様「話す話題がない」だが、「わかってもらえない」もかなり多い。中国では、第二位は「わかってもらえない」、第三位は「すぐにおこりだす」で、ともに約二割を占めている。

つまり、アメリカや中国の場合は、父親に理解されることへのあきらめや、父親の拒絶的態度が、父親と話さない主な理由の一つとなっているが、日本ではこのような問題はない。その意味では、日本の中学生は、父親と「うまくいっている」のである。日本の中学生が父親と話さない理由は、もっぱら、機会の欠如と話題の欠如である。前者は、いうまでもなく、日本の父親があまり家にいないことから来ている。

それに対して、後者は、相互の関心領域や生活世界のズレから来ているが、日本の場合これは、必ずしも父親の無関心や対話意欲の欠如を意味しない。これまでみてきたように、子どもに対してたいへん理解があり、やさしく温かいのが、日本の父親だからである。日本の中学生が、父親と共通の話題を持てないのは、小さいときからの接触の少なさと、中学生をとりまく文化的環境の変化の激しさとから来ているのだろう。

日本のサラリーマンは、一般に、長い労働時間と通勤時間、接待やつきあいの多い独特の商習慣や職場慣行、少ない休暇などから、家族と一緒の時間が少ない。また、このことを可能にもし、このことの結果ともいえることとして、日本の夫婦には、妻は家庭、夫は仕事、あるいは、家事育児は女性の役割、という伝統的な性別役割分業が強固に残っている。この結果として、日本の父親は、最初から子どもとの接触が少ない。そのため、子どもが小さいうちはまだよいが、成長して自分の世界を持つようになると、交流ができなくなるのである。

しかも、社会の変化はますます早くなってきており、中学生の生活と文化はどんどん変わっていく。そのため、父親は、子どもとの対話を成立させるために、自分の中学生時代を手掛かりとすることもできなくなってしまったのである。

父親なき時代

ドイツの精神分析学者ミッチャーリッヒは『父親なき社会』(小見山実訳、新泉社)の中で、雇用者家族が増大し、住居と労働の場所が分離したことにより、家族から父親が不在になり、父親の影が薄くなっていると同時に、現代社会そのものが、全体として父権的な秩序や権威を喪失している、と述べた。

一億総サラリーマン化が進み、父親が家族といっしょにいる時間がとりわけ少ない日本は、その意味でまさしく「父親なき社会」であり、現代は「父親なき時代」である。

この、父親なき社会に関して、子どもたちは同一化の対象を見失い、権威や秩序の内面化の上で困難を持ちやすい、それが現代の子どもたちの非行や精神病理の背景である、とよく言われる。

しかし、これまで述べてきたように、日本の中学生と父親との関係は、接触時間が短く、対話の頻度は低いものの、概して良好である。中学生は、父親を肯定的にとらえており、父親との間は現在も将来もうまくいくと思っている。

しかも、中学生にとって父親は、まだまだこえられない「大きな存在」である。決して、権威を失墜させた「ダメおやじ」ではない。

このことからみても、森井利夫も言うように、権威にみちた厳格な父と、やさしくて慈愛に富んだ母の養育によって安定した情緒と自立の能力が獲得されるとし、そのような両親の役割分担が、父親の物理的不在や権威の失墜によって成立しなくなったことを問題とする〝父親不在説〟は、旧

来の家父長制的家族の枠組みにとらわれた見方である、ということができる（森井利夫「父親不在説批判」、岡堂哲雄編『男性のストレス』、現代のエスプリ225、至文堂）。社会状況の変化によって、両親の関係や役割も変化してきている。

かつてのような、厳父慈母といった固定的な役割関係にとらわれない、新しい父親像が生み出されねばならないし、一部ではそれが生まれつつある。

しかし、日本の中学生の父子関係には、なんの問題もないわけではない。いかに子どもの側がそれで満足していようとも、諸外国と比べて極端に少ない対話頻度、その背景としての父親の家庭滞在時間の短さと子育てへのかかわりの欠如は、やはり大きな問題である。「日常物理的に子どもと接触する時間が少なかろうとも、……父が何を考え、どのように生きているのかを子に伝える方法は、いくらでも工夫できるはずである」（森井利夫、前掲書）とはいうものの、それも程度問題である。やはり、父親がもっと家庭にいることができ、子育てにかかわれるようにするための様々な制度やしくみ、生活スタイルや意識の改革が必要であろう。

また、日本の父親の、子どもに対する極端な甘さも、もう一つの大問題である。厳父に戻る必要はないが、父親が甘やかし、しかたがないので母親が厳しくするというのは、母親がそのように社会化されていないこともあって、あまり機能しない。結局、両親ともに甘やかすことになってしまう。

特に、日本の母親は男の子に甘いので、父親がある程度厳しく接して、社会規範や性的アイデンティティの獲得を助けないと、男子の社会化はうまくいかない。

3　家庭生活としつけ

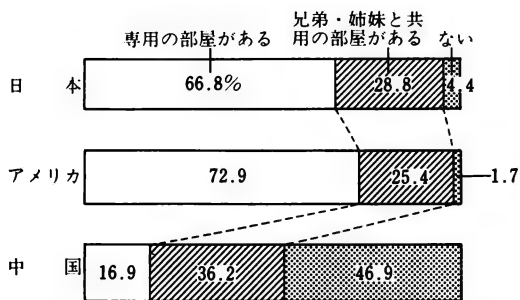
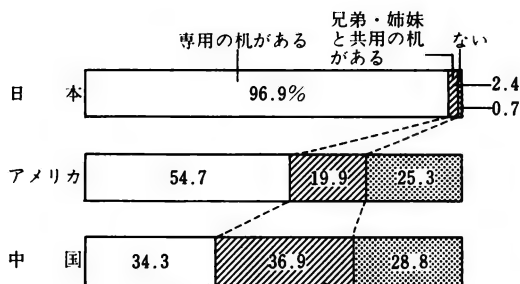
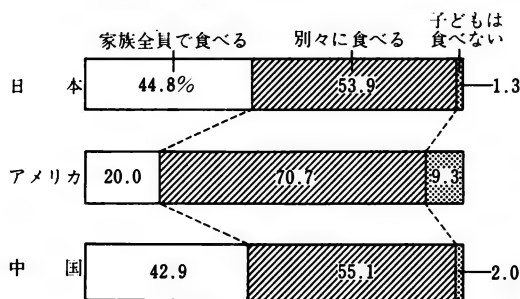
中学生と家庭

子どもは、家族の中に生まれ、特別な例外を除いて、家庭で育てられる。子どもの生活世界は、最初家庭の中だけに限られ、やがて成長とともに、家庭の外へ拡がってゆく。

中学生の時期というのは、この生活世界の拡大過程の、ちょうど転換期に当たる。小学生の時期までは、家庭の外の比重が徐々に大きくなってはいくが、生活の中心はまだ家庭にある。高校生以上になると、生活世界の中心は友人関係や学校などに完全に移り、家庭は副次的意味しか持たなくなる。中学生期は、この両者の中間にあって、家庭からの離脱を志向しながらまだ離脱できない、いささか不安定な過渡期なのである。

したがって、中学生にとって家庭がどのような位置を占め、どのような機能をはたしているかを知るためには、彼の家庭生活の個人化がどの程度進んでいるかをみる必要がある。一種の過渡期であるので、家庭内に彼の物理的・心理的な占有空間がたっぷりあれば、家庭は食事付下宿に近いものになっていき、それがほとんどなければ、家庭は相変わらず最重要な人間関係と生活の場でありつづけるからである。その意味で、「日米中学生・母親調査」および「中国の中学生・母親・教師調査」では、子ども部屋と勉強机の有無、食事のとり方をたずねた。V—12図、V—13図、V—14図は、その結果である。

これによると、日本とアメリカの中学生のほとんどは、子ども部屋を持っている。特に、アメリカでは七割以上が専用の部屋を持っている。それに対して、中国では、子ども部屋のある中学生は五割そこそこしかおらず、しかもその多くは兄弟等と共用である。専用の部屋を持っているのは、一七%しかいない。

このように、子ども部屋の有無に関しては、日本はアメリカに近づいているが、アメリカの方が

V-12図　子ども部屋の有無
（中国の中学生・母親・教師調査）

V-13図　子どもの勉強机の有無
（中国の中学生・母親・教師調査）

V-14図　食事のとり方（朝食）
（中国の中学生・母親・教師調査）

やや占有率が高い。しかし、勉強机の所有率になると、日本が断然一番である。自分専用の勉強机がある人は、中国では全体の三分の一強、アメリカでは二分の一強であるが、日本では九七%もある。兄弟等と共用の机を入れても、アメリカと中国では、四分の三弱の人しか勉強机を持っていない。

しかし、朝食のとり方に関しては、日本と中国がほぼ同じで、アメリカだけは違っている。日本と中国では、家族全員で食べるのが四割強、別々に食べるのが五割強となっているが、アメリカでは、家族全員で食べるのは二割しかおらず、七割は別々に食べ、食べないというのも一割近くいるのである。

このようにみてくると、家庭において、中学生の生活の個人化が最も進んでいるのはアメリカであり、最も進んでいないのは中国であると言える。日本はその中間で、子ども部屋に関してはアメリカに近く、朝食のとり方に関しては中国に近い。これらの相違は、それぞれの国の文化の違いや住宅事情から来ているのであるが、個室を持ち、家族といっしょに食事をする者が多い日本の中学生は、いちばん恵まれているとも言える。

しかし、日本の中学生には、もう一つ違いがある。それは、勉強机の所有率が際だって高いことである。日本の中学生は、専用の部屋がない人の場合でも、ほとんど専用の勉強机を持っている。これは、日本では勉強がすべてに優先していることを示している。つまり、同じように個室を持っている中学生が多いといっても、日本とアメリカとでは、根本的に意味が違うのである。アメリカでは、子どもを自立させるために、また、親子といえども尊重すべき互いのプライバシーを守るために、子ども部屋を与える。ところが、日本では、落ち着いて勉強させるために子ども部屋を与え

V-1表 家での手伝い

(%)

	毎日のようにしている	週に2～3回ぐらいしている	週に1回ぐらいしている	月に1回ぐらいしている	いままでに何回かだけ	1度もしたことがない
食器を並べる	28.0	18.3	12.7	12.6	21.3	7.1
洗たく物をとりこむ	7.0	20.1	21.0	20.9	24.6	6.4
洗たく物をたたむ	5.7	12.4	17.1	20.1	30.9	13.8
食器を流しに運ぶ	57.1	13.0	9.1	5.6	11.2	4.0
食器をふく	10.9	13.5	14.9	14.7	31.1	14.9
ゴミを捨てに行く	6.0	14.8	18.5	17.9	34.4	8.4
料理を手伝う	7.4	15.6	16.8	15.7	28.9	15.6

（武蔵野市「子どもの生活実態調査」より）

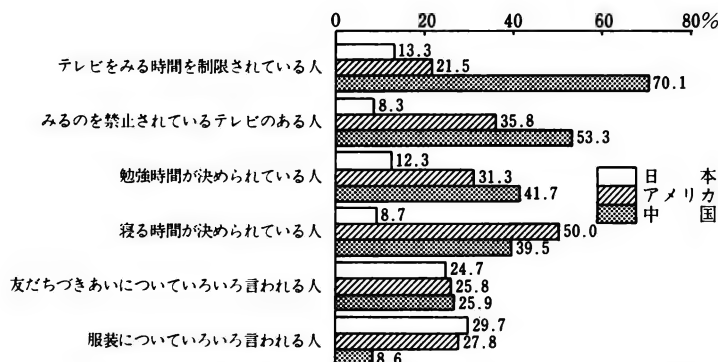
るのであり、子どもの自立やプライバシーの尊重は、ほとんど考えられていない。その証拠に、日本の母親は、子どもが高校生になっても平気で子どもの部屋に無断で入り、持ち物を点検したり掃除や片づけをしてやったりするのである。

日本の中学生の生活が、いかに勉強や受験中心に編成されているかは、ここにも表れている。そして、このような勉強中心主義は、中学生のみならず、日本の子どもたちすべてに貫徹しているのである。

手伝いをしない中学生たち

勉強中心の生活をしている日本の中学生は、あまり家の手伝いをしない。この点はアメリカの中学生とは非常に違う。

「日米中学生調査」では、放課後の生活時間を聞いているが、それによると、家の手伝いをした時間がゼロ、つまり全く手伝いをしない人は、アメリカでは一四・六%だが、日本では四二・一%もいる。手伝いをしたといっても、日本では大部分（全体の四四・七%）が三〇分以下だが、アメリカでは一時間以上が二七・一%もいるのである。

特に男子の場合にひどい。アメリカでも女子の方がよく

V-15図 家でのきまり・規則　（中国の中学生・母親・教師調査）

手伝いをする傾向はあるが、日本の場合は、全然手伝いをしなかった者が、女子は二九・七％なのに男子は五五・七％もいる。日本の家庭では、家事は女の仕事という性別役割規範が、子どもの手伝いに関しても貫徹されているのである。

なお、中国の中学生も、日本と同じように手伝いをしない。日本のような男女差はないが、全然手伝いをしなかった者は四四％にも達する。受験競争が激しい上海の中学生という特殊事情もあろうが、中国の子どもは、一人っ子政策の結果、かなり過保護に育てられている。

ところで、日本の中学生も、四割程度は家の手伝いをしているが、彼らはどんな手伝いをしているのだろうか。

V—1表は、武蔵野市の「子どもの生活実態調査」の結果である。「週二〜三回ぐらいしている」までを普段している手伝いと考えると、半数近くかそれ以上の者がしているのは、「食器を流しに運ぶ」七〇％、「食器を並べる」四六％の二つだけしかない。日本の中学生は、家の手伝いをする人が少ないうえ、する場合でも、ほんの数分ですんでしまう、幼稚園の子どもでもできる「お手伝い」しかしないのである。

では、中学生に対するしつけは、どうなっているだろうか。

V—15図は、「あなたの家では次のようなことはありますか」と、六項目の事柄に関するきまりや制限の有無を聞いた結果（「はい」という人の比率）である。

これによると、アメリカや中国の家庭より日本の家庭の方が、厳しいか同じ程度なのは、服装についてと友だちづきあいについてだけである。それ以外についてはいずれも、日本の家庭はアメリカや中国の家庭よりもずっと規制がゆるい。これだけで判断することはできないかもしれないが、日本の家庭では中学生に対して、ほとんどしつけらしいしつけをしていないようである。特に、寝る時間やテレビ番組については、放任と言ってよい。

学校やクラブ活動、塾、受験勉強などで自由な時間をほとんど奪ってしまう、その代わり手伝いもさせず、家では全く自由にさせておくというのが、日本の家庭や社会の中学生の育て方なのである。

V-16図　子どもをめぐる夫との会話
（中国の中学生・母親・教師調査）

このようなことは、子どもをめぐる父親と母親の対話の状況にも表れている。

V—16図は、中学生の母親に、①子どものしつけ、②子どもの勉強、③子どもの将来の三つについて、夫とどの程度話しているかをたずねた結果である。中学生の子どもを持つ日本の夫婦は、中国やアメリカに比べると、子どもについてあまり話し合わない傾向があるが、これは、子どものしつけに関して、特にはっきりしている。

中学生をめぐる父親と母親

日本では、夫の帰りが遅いことや、夫が家事育児に参加しないこと、あるいは日本的コミュニケーション（以心伝心）などから、他の国に比べると一般に夫婦の対話が乏しい。このような状況が、近年問題とされる、家庭の教育力の弱体化の一つの原因となっているが、子どものしつけについての、他国に比しての対話の少なさは、それをいっそう弱める結果となろう。

V-17図　子をめぐる夫との意見の対立
（中国の中学生・母親・教師調査）

中学生の母親に、子どものしつけや将来のことについて夫と意見の対立があるかどうかたずねた結果（V—17図）をみると、日本の家庭の問題がさらによく分かる。アメリカや中国では、子どもをめぐって夫と意見の対立があるというのは一割もいないが、これが日本では三割に達しているのである。意見の対立が全然ないという回答は、日本では七％であるが、アメリカは一七％、中国にいたっては四七％もある。

子どものことについて、夫婦の話し合いが少ないうえ、意見が対立していては、満足なしつけや家庭教育ができるわけがない。ここに、日本の中学生の家庭の、大きな問題が存在するのである。

問題の所在

以上みてきたように、日本の中学生の家庭生活は、あくまで勉強中心になっており、手伝いもほとんどさせられることがない。家庭ではかなりの勝手が許されており、夫婦の対話の乏しさや意見対立もあって、しっかりしたしつけがなされていない。そうした背景がある割に日本の中学生のマナーがよく、非行や問題行動も欧米諸国に比べて少ないのは、学校が生活指導に力を入れているためと、受験体制によって自由な時間を持てないためであろう。

中学生時代は、子どもから大人への移行期である。そこでは、社会が大人の成員に要求する様々な事柄――働くこと、精神的に自立すること、共同生活で役割を分担すること、社会規範を守ることなど――の基礎を身につけることが、重要な発達課題となる。

しかし、日本の家庭は、中学生がそのような発達課題を達成するための手助け、つまり家庭教育やしつけを、あまりしっかりやっていない。親の関心はもっぱら成績や受験に向かい、それ以外のことは一切無視される。

そのため、日本では、学校が家庭に代わって中学生の「しつけ」を主に行なうことになるが、それは教師や学校の仕事を増やし、本来の機能の遂行を妨げる。また、多数の生徒を対象にする以上、学校の「しつけ」(生活指導)はどうしても画一主義、管理主義になりがちである。

日本の中学生の家庭が、本来の教育力を取り戻すこと、そのために、親が子どもの成績よりも生活に関心を持ち、夫婦で協力して家庭教育を行なっていく体制をつくり出すこと、それがなによりも求められているのである。

Ⅵ　中学生の生活と価値観

1　生活時間

文化を反映する放課後の行動

中学生の生活は、なんといっても、学校生活が中心である。とりわけ、わが国の中学生の生活は、勉強をめぐって、教科、教師、友人、クラブ活動などが形成されている。

なによりも、日本の中学生は学校にいる時間が長い。授業が終わっても、クラブ活動をして帰宅する生徒が多いからである。

この点、アメリカでは事情が異なる。

まず、学校でのクラブ活動は日本ほど盛んではなく、コミュニティでのクラブ活動が断然盛んである。コミュニティのスイミングクラブ、テニスクラブなどといった施設は、アメリカの中学生の生活の中心になっている観すらある。

そして、わが子の運動選手としての成功を夢みる〝運動ママゴン〟とも言える多くの母親たちの存在がある。

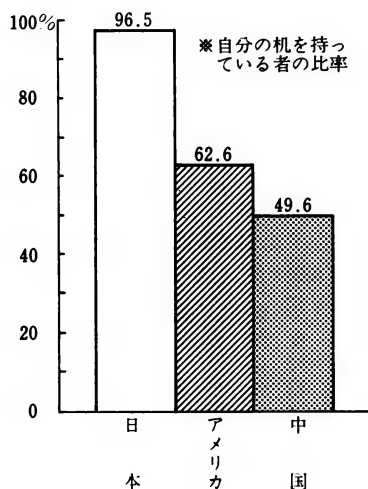
韓国では正式の学校クラブは盛んではないが、非公式に教師が遅くまで生徒と、日本でいうクラブ活動でいっしょに過ごし、平均して家へ帰る時間が午後七時という町さえある。

中国では一般的に言って、学校でもコミュニティでも、クラブ活動が少ない。北京の中学校では、ときおり、折たたみマットで宙返り運動をしている程度のクラブ活動を見受けるが、これも、雨が

降ると玄関の広場でという具合に、ほんの形式程度の活動と言ってよかろう。中国では、家へ帰って勉強すること、家事の手伝いをすることで一日の生活が終わる。ちょうど、一昔前の日本の姿と似ていると言えるかも知れない。

放課後の生徒の行動は、その国の持っている文化や社会構造を反映する。と同時に生徒たちの価値観を具体的に示す。

たとえば日本では、なんといっても、帰宅後の勉強、塾通いが、日本の姿を如実に表すし、アメリカでは、テニスや水泳が断然多いほか、昔の日本の中学生がしたと同じように、街の空き地をたまり場として、みんなが遊んでいる。

ここでは、主として、放課後の生徒の活動、友人関係などをとおして、生徒たちの持っている価値観に焦点を当てる。

Ⅵ-1図　自分の机の所有率
（中国の中学生・母親・教師調査）

机の所有とお国ぶり

アメリカの中学生で、まず、自分の机を持っていない者がかなりいる。これは日本人からみて驚くべき事実である。多くの中学生は、家で勉強はしない。宿題のある中学はかなり多いが、忘れたか怠けたかで、宿題の義務を果たさない。こういう子どもは、tardy（怠け者）と評価されるが、彼らはいっこうにこたえないし、翌日も翌々日も同じように忘れる

か怠ける。こうしてみると、家での勉強机は、アメリカではそもそも不要なのかもしれない。それでも、彼らは勉強をするのに家の食卓や応接セットではほとんどしないで、ベットでうつ伏せになりながら鉛筆をなめている。面白いことに、自分の机を持っている子どもでも、ベットで勉強することが多いようだ。

中国の中学生は、農村を除いて家で勉強する子どもが多い。VI―1図で示すように、都会の子どもでも、自分の机を持っている子どもは、半数にも満たない。中国では都市の子どもの勉強熱が高く、両親もまた、子どもの勉強に強い関心を持っており、教育ママが多い。にもかかわらず勉強机を持っている者が約半数と少ないのは、家が狭いことに原因がありそうだ。

それにしても、日本の中学生で、自分専用の机を持っていない者がわずか二~三%。もうほとんど全員が勉強机を持っており、いかに教育熱が高いかを象徴している。アメリカの親たちは、子ども専用の勉強机を持つ習慣がないか、買い与えていないという。そういう習慣がないということは、つまりは勉強に対する価値が低いからといえるだろう。これはアメリカの教育関係者からみると嘆かわしい習慣であり気風であるが、わが国の現状から言えば、子どもをのびのび育てられてよい、とも解釈できるし、なかなか複雑な思いをさせる。

勉強時間と親子関係

勉強時間をみてみよう(VI―2図)。

日本と中国の勉強時間が長い。これに対してアメリカは大変短い。アメリカの中学生の約二割は、家での勉強を全くしていない。した者でも一時間以内という者が圧倒的に多い。約七割強の子どもたちは、勉強をしても一時間以内で終わってしまう。もちろん、この国でも勉強すること、勉強ができることが高い価値観を持っているのにである。

しかし、親が子どもに対し、勉強しろ、勉強しろという者がほとんどいない。子どもの教育に関心があまりないからで、この根底には、親と子の人間関係が隠れている。しょせん、親は親、子は子なのである。それに、アメリカの教育ママゴンは、勉強よりもスポーツ選手に育てることに関心を持つ者が多い。それだけ、相対的に勉強の価値が低くなる。

中国では、特に、都市の親たちの教育熱が高く、日本の教育ママゴンに近い者もいる。もともと、儒教の国、文の国、科挙の国である。それだけ、学習に対する高い価値観を持っており、つい一〇年ほど前までは、金儲けは卑しいものとして軽蔑され、貧乏でも学歴の高いこと、政府の高官になることが、親子ともども夢であった。労働や労働者は、どちらかといえば、軽視された。今日現在でも、肉体労働者の賃金が、政府の研究機関にいる高学歴の知識層よりかなり高い。金銭に対する価値観が刻々、変わりつつあるが、それでも、高学歴を志向した競争が激しい。

Ⅵ－2図　家で勉強した時間
（中国の中学生・母親・教師調査）

中国でも韓国でも、子どもたちが一番怖いのは「母親」だと言われている。意味するところは日本と同じで、勉強しろ、勉強しろ、と言われるからであり、勉強しないと口うるさく叱られるからである。

ひと頃、日本の小学生に母親の絵を描かせると、頭に角が生えた母親を描いた。それと同じで、中国や韓国でも角の生えたお母さん

を描くようになるかもしれない。それでも、家で勉強する日本の中学生で、三時間以上の者の比率が、中国の約二倍もいる。それだけ、日本の子どもは、よく勉強させられていると言える。

中国の中学生が日本の中学生くらいによく勉強する、とは言うものの、この調査データは、上海市およびその近郊に住む中学生のデータであり、親の学歴がきわめて高い。ちなみに、一九八三年の統計によると、小学校の入学率は九四・〇%、中学校は六七・三%、高校が三五・五%、大学が一六・六%だが、この数値はいずれも進学者を母数としている。したがって、大学進学率が同世代の五%前後となる。また、農村の小・中学校の中退率が高く、三〇%前後が学校を辞める。親の学歴が高いこの調査データは、かなり特殊であることに注意したい。

アメリカと中国には、いわゆる学習塾がない。家庭教師をつける家庭も皆無ではないものの、学習塾や家庭教師は日本の特殊事情と言えるだろう。

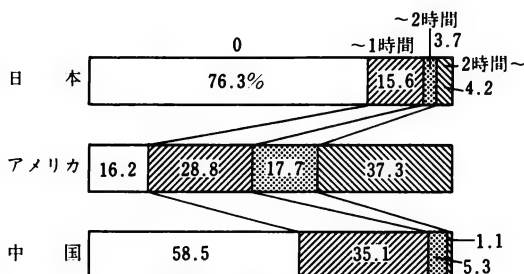
塾で勉強した者は、日本では約二割で、一時間が四・八%、二時間が一一・七%、二時間以上が二・八%(中国の中学生・母親・教師調査)であった。アメリカには塾はないが、学校で補習授業を行なったりする。その補習授業を受けた者が、約二割あまりで、いずれも一時間くらいの勉強をしている。

アメリカの運動ママゴン

学習塾ではないが、アメリカの運動塾とでも言うべきものについて述べておこう。アメリカではアスレチック・アビリティが重視されている。運動能力というか、日本式にいえば運動偏差値のことで、端的に言えば、テニス、水泳、陸上競技、バスケットボール、アメリカンフットボールなどの選手で、全米ランキングに入ることを目指している。

なかでも、テニス、水泳、アメリカンフットボールの全米ランキングに入ると、だいたい、お好みの大学に入れるし、将来の展望がきわめて明るくなる。代表的なテニスでの母親の熱い思いが、このアスレチック・アビリティについてのアメリカの価値観をよく説明してくれる。

「キング夫人でも、ナブラチロワでも、副大統領のコーチだとか有名な人のコーチということで、テレビに出たりするでしょう。たくさんのプロが有名な財界人のコーチになって、とても裕福で、アメリカのあちこちに大邸宅を構えています。子どもにはぜひ、全米ランキングに入ってもらいたいのです。ですから私は、自分の犠牲をいとわず、子どもをクラブへ連れて行き、彼が練習するのをずっと見守ります。家へ帰っても、付きっきりで、また練習させるんです。コーチ代はどんなに高くても、私が一生懸命働いてなんとかするんです。ええ、一時間三〇ドルのコーチ代は、私にとってとても高いのです。でも、息子が上達するために、毎日、二時間でも三時間でも余計に働いて私は頑張ります」

これは一種の運動ママゴンである。アメリカの中学生は、有名なプロになることを夢みて、なんらかの運動をしていることが多い。学校でのクラブ活動が日本と比べて非常に少なく、コミュニティでのクラブ活動が多いのは、このような事情がある。また、進学するにも、なにかの運動能力が優れていると、学力偏差値だけで判定するのではないアメリカの選抜方法では有利になる。ちなみに、コミュニティでの活動が多いのは、なんらかのボランティア活動をするからで、高校から大学へ進学する際には、このボランティア活動の有無がとても重視される。

VI-3図　友だちと遊んだ時間
（中国の中学生・母親・教師調査）

友だちと遊ぶ、テレビを見る、本を読むのも中学生の生活の重要な部分を占める。次にこの生活ぶりをみる。

変わりゆく遊びの人間関係

テレビのなかった時代には、友だちと遊ぶ時間が最も長かったし、歴史もの、偉人ものなどの読書も、子どもたちの価値観をしっかりしたものにしてきた。読書はなくてはならない重要な学習だった。また、どこかの路地裏、空き地、神社・寺などは、子どもたちの格好の遊び場で、いたるところで遊ぶ姿を見受けたものだった。

驚くべきことに、ウィークデーのある一日、日本では友だちと遊ばなかったという者が、約八割近くもいる。おそらく家の中に閉じこもり、テレビか勉強か、そうでなければ、塾へ姿を消したに違いない。アメリカでは、まだ、街のあちこちに、小さなギャングたちのたむろする姿がみられるが、日本では、子どもたちが勉強に忙しすぎるのだろうか。友だちと遊んだ時間を調べてみると、アメリカが断然多く、しかも、二時間以上遊んだという者が三七・三％もあり、日本の四・二％とはあまりにもかけ離れている（VI―3図）。

中国でも友だちと遊ぶ時間が少ないし、また、全然遊ばなかったという者が、六割近くもある。これも受験に追いまくられている姿を浮かび上がらせているのかもしれない。

問われる遊びの内容と場所

もっとも、アメリカでは、中学生の遊びが非行とからんで社会問題化しつつある。というのは、遊び場所やその内容が問題になっているのだが、最近では両親とも働きに出て家を空けるので、遊び場所が家の中へ移動しつつある。一人も監督者がいない家で、子どもたちは、ビール・パーティをする。こうして急性アルコール中毒のために、両親留守の家から、中学生が救急車で運び出される事件も起きている。

アメリカでは、両親が二人とも家を空けることが、いろんな現象を引き起こしている。中学生たちのビール・パーティはその一つの例にすぎない。危険区域で家にだれもいない少女は、学校から帰って家へ入るとき、中に強盗に変身する泥棒がいないか、とても怖がっている。彼女は家に入るとき、まず玄関で「だれかいない！」と大声で叫ぶ。それからドアを開けて、玄関にある野球のバットを持って各部屋を回る。もちろん、部屋へ入る前に、「だれかいない！」と大声で叫ぶ。やっと自分の部屋に落ち着いても、怖くてしかたがない。とうとう我慢しきれずに会社の母親に電話する。母親は決まってこう言う。「自分一人でなんでもできることが一番大切なのです。でないと、このアメリカ社会で生きていけないのですよ」。

アメリカのテレビが、以上の内容を報道したとき、全国から大変な反響が湧き上がった。心理学者も討論に入り、この母親のやり方が賛否両論に分かれた。もちろん、全国の働く母親たちは、自分自身の自立の必要性を強調して、一歩も引き下がらなかったのだった。

高校生にもなると、もっと違った問題を引き起こす。アメリカの例は、やがて日本にも生じるであろう問題だから、無関心ではおられまい。アメリカの高校は、断然選択科目が多い。たとえばこうだ。アメリカの研究者は、日本の女子高校生の数学の受講者がほとんど全員であることに驚く。

それが必修科目だと分かって、なるほどと合点する。つまり、アメリカでは女子で数学を選択する者が非常に少ないから、日本の現状に驚いたというわけである。

さて、選択科目が多い結果、高校生の彼と彼女は、しめし合せて、同じ科目を選択する。その結果、二人とも午前中の二時間に全く授業がないという離れ技を演じる。こうして、彼と彼女は両親のいない家へ行って遊ぶ。アメリカの高校生の遊びは、かくて大人の知恵をしのいでいる。

日本でも多くの両親が職場へ出て、家が留守になっている。だから、中学生や高校生の非行化した遊びが多くなるだろう。中学生の万引き集団も、たびたび、両親とも留守の家がたまり場になっている。空き家は子どもたちの非行の温床になっているのだ。

核家族化による両親空き家現象は、徐々に日本でも問題となってきつつある。

Ⅵ－4図　テレビを見た時間
（中国の中学生・母親・教師調査）

テレビ、マンガと中学生の日常生活

中学生のマス・メディアとの接触をみてみよう。テレビを見るという子どもは、日本とアメリカで極端に多い。最近の調査では、テレビを見る時間が頭打ちになり、だんだんとテレビを見なくなってきたようだ。他にテレビ・ゲームなど面白いことが多くなったことも理由だろうし、勉強に忙しくなったのかもしれない。

Ⅵ－4図は、日本・アメリカ・中国の三か国の中学生テレビ視聴時間である。

三時間以上見たという者が、日本で九・三％、アメリカでは二八・八％もある。中国では全然見ないという者が五六・〇％もあり、一種の驚きを禁じ得ない。中国でもテレビは多くの家庭で、特に都市での普及率は高い。したがって、中国の中学生がテレビがないから見ないのではなく、他になんらかの理由があると考えるべきだろう。面白い番組がないことも事実だろうが、チャンネルが少ないこと、放映時間が短いことも理由だろう。

日本の中学生の世界的特徴をあげるなら、マンガだろう。アメリカにも中国にも、いわゆる日本のようなマンガが少ないし、マンガ・ブームという現象はない。アメリカや中国のマンガは、日本のマンガと違って、正義や善意といったメッセージを背後に持っている。弱い者を助けるとか、社会やコミュニティに尽す、といったメッセージが隠れているし、しょせん、幻想的なほのぼのとした一家だんらんや友情を描く。

独特な日本のマンガ文化

日本のマンガは、一種独特で、決して正義や友情、ほのぼのとした温かさをメッセージとして送らない。一時期、全国のほとんどの中学生が読んだ「キン肉マン」は、ドジで弱いプロレスラーが主人公で、強敵を前にして逃げまくるというものだし、性をカモフラージュしながら、男性と女性をことさらに強調し、見方によっては、かなりの低俗性をメッセージとするセックスものなどが大流行である。かつては、日本でも根性もの、特にスポーツ根性もの（略してスポコンもの）が盛んだったが、今では、中学生にも不人気である。スポコンものが、スポーツ恋愛ものに変質したといってよいだろう。

なぜ、ドジで弱いプロレスラーが、マンガの主人公になるのかが、中学生たちの価値観と大きいかかわりを持っている。真面目であることを「マジ」といって軽蔑することとも関係がある。つま

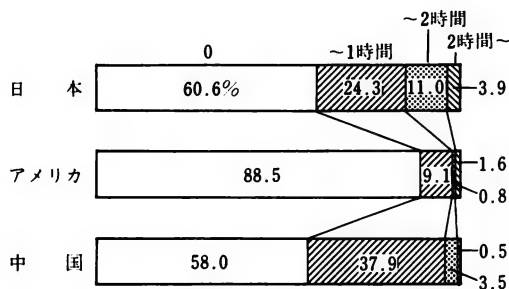
り、真面目であること、努力することが価値を持っていないのだが、このことは、子どもたちだけの世界で起きたことではない。「そんなに働いてどうする」という大人たちの自嘲と裏腹の関係にあるというべきだろう。オイルショック後、頑張って働いても、たいして偉くなれるわけではない。ポストが限られている。それでいて、生活にはそう困らない。職場で偉くなるために頑張って、宮仕えの悲哀を味わったり、会社のために犠牲になるのは、考えてみればばかげている。それよりは、なにか自分らしい楽しみ、自分が自由にできるなにかがあった方がよい。自分を大切に、自分に忠実にが合言葉になってきた。社会のいたるところで、自分を大切にしようと言われるし、学校も例外ではない。むしろ、公教育で個性の伸張や自分に忠実に生きることを奨めている。

中学生たちは真面目を「マジ」と呼んで軽蔑する。それは大人の社会にも通じるものがあるのだが、学校生活にも、このことが言える。真面目になにかをしても、決していい学校へ行けるわけではない。むしろ、ズル賢こく、道徳などの授業はそっちのけで、受験科目だけを〝内職〟している者が勝利者になる。真面目であることが、ちっとも価値を生じないのである。真面目であることは、愚かなことでしかない。

大流行した「キン肉マン」が、正義とか友情のために戦うと大言壮語する。けれども、弱いレスラーだから勝てない。結局、逃げまくったり、助っ人に助けられたりして、窮地を逃がれる。つまり、真面目であることを嘲笑しているマンガであり、真面目をこけにするのが、このキン肉マンのメッセージである。中学生の価値観をみごとに描いたといってよい。

マンガの筋道は、かなり複雑である。こんなマンガがアメリカや中国で理解されることはないし、したがってまた、こんな筋のマンガが描かれることもなければ、売られることもないだろう。アメ

リカと中国のマンガは、ホンネもタテマエも一致した正義もの、努力ものが主流である。マンガとは、そもそも、面白いことが主題である。アメリカには悪者をやっつける正義ものが、子どもたちの心に痛快さを味わわせてくれるし、宇宙の幻想を夢みさせる。日本には、それがない。その類いのマンガは、もう過去のものとなってしまった。

日本で「マンガをきのう読んだ」という中学生は、約四割。そのうち、二時間まで、二時間以上という者が約一五％、一時間以内の者が二四・三％もあった。アメリカではわずか一割程度の者しか読んでいないし、しかも、ほとんどが一時間以内である。中国ではマンガがほとんどないこともあって、時事的問題や流行などを扱った「画報」を読んだかと質問が変えられた。画報を一時間以内読んだという者が、約四割弱だった（VI－5図）。

VI－5図　マンガを読んだ時間
（中国の中学生・母親・教師調査）

マンガが流行するかどうかで、そもそも、日本とアメリカ、および中国とで違いがある。マンガが広く読まれていること自体が日本の特徴だが、その内容も日本の特殊状況を遺憾なく示唆する。真面目はマジであり、不真面目やセックスがメッセージとして送られている。日本の現状がそれだけ、昔の真面目に寄りすぎた反動かもしれないし、そんなに頑張らなくても、楽しくやれるという、増長高慢なのかもしれない。やはり、ここは考えどころのようだ。

活字から遠ざかる日本の中学生

マンガを除く読書ではどうか。残念ながら日本では、アメリカ、中国に比べて読まれていない。マンガ・雑誌以外の本は、どれほどの種類があるか定かではないが、どこの国でも歴史的著作があるはずで、この種の本を読んだという者が一番多い中国では、『三国志』『紅楼夢』孔子、孟子などの歴史上の人物伝、それに唐詩などが広く中学生に読まれているようだ。文学の国の伝統をひくとはいえ、日本の読書の貧困さが嘆かれる。もっとも、中国では論語はやや復活したとはいえ、それが人民を統治するための手段として使われたこと、労働を蔑視することから、文化大革命当時には孔子攻撃が激しかった。

儒教的倫理は中国でよりも、日本で盛んになった観すらあるが、その儒教的礼儀、清貧であることなどは、日本でも影が薄くなりつつある。こうした歴史的名著が中学生で読まれなくなっていることは、確実に文化を変質させていくだろう。日本の中学生の読書時間は、アメリカ、中国に比べて少なく、かつ、読書したという者の比率も、三割強にすぎない。アメリカの六割弱、中国の七割弱と比べて、いかにも貧困である。

2 友人関係

人気者とリーダー

友人関係が希薄になったと言われる。なぜ希薄になったのか。希薄になった内容とはどんなものか——。

友人関係で問題なのは、どんな人物がリーダーなのかである。昔は、文武両道に秀でた者が、リ

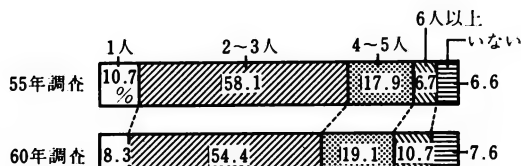
ーダーであり、かつ、人気を博していたが、今では様相が一変した。それは勉強のできる子どもでもなければ、スポーツの強い子でもない。面白い子、冗談の上手な子がクラスの人気者である。もう一つ注意したいことは、リーダーらしき者がいないことである。

日本ではクラスのリーダーがなくなり、代わって人気者が現れた。このこと自体もなかなか考えさせる問題である。リーダーはなにか集団目標がある場合に、自然発生的に生まれるものだが、日本には集団の目標がないこととも関係があるようだ。ここでは、友人関係とリーダーに焦点を当ててみる。

(1) 友人関係と人気者

現代の親友像

親友を何人持っているか、と中学生や高校生にたずねると、一人、二人というのは少数派で、多くの子どもは六人とか一〇人とか答える。親友というからには、自分の心をうちあけることのできる友人、というのが伝統的な考えだった。今の子どもたちの親友定義は昔の定義と違っているようだ。自分の抱いている悩みや、他人にうちあけるのが恥ずかしいようなことを話すのを、自己開示というが、中学生や高校生はそれをしなくなった。

総理府青少年対策本部の「連帯観調査」（一九八六年）によると（VI―6図）、心をうちあけて話せる友人の数は、二～三人が一番多いものの、四～五、六人以上で三割もいる。たくさん友人を持っていることが当然であり、それが自慢でもある。そして、この傾向がだんだんと増える様子がみえる。しかし、この友人は昔の定義にいう親友ではなく、つまりは、ちょっとした冗談の言い合える間柄にすぎないようだ。

Ⅵ－6図　心をうちあけて話せる友人の数
（総理府青少年対策本部「連帯観調査」）

人気者の条件

クラスの人気者をみよう。

ＮＨＫ世論調査部の「中学生・高校生の意識と生活調査」によれば、クラスの人気者は断然、面白い子である。勉強ができる子は、小学生時代には、やや人気があり、八・一％のクラスの子どもの支持があったが、中学生になると、勉強の価値がガクンと減少して、二・三％に下落する。同じように、スポーツの地位も落ちて、勉強、スポーツの分が、面白い子に移動する。

昔の人気者は、ほぼ、クラスのリーダーとオーバーラップしていた。スポーツも勉強もできる文武両道に秀でた者がリーダーであり人気者だった。それが、小学生から中学生、高校生へと成長するにつれて、勉強もスポーツもその価値が下落する。

夏の甲子園は今でも熱狂的ファンに包まれるが、意外にスポーツとしての人気はない。面白いことに、甲子園現象と反対に、野球の人気があまりないのである。せいぜい子どもたちに人気があるスポーツといえば、サッカーとテニスぐらいだが、なぜ、そうなのかは、子どもたちの価値観を知るうえできわめて重要である。

子どもたちのイメージでは、野球はイガグリ頭のスパルタ式で、その本質とするところは、頑張り、根性、服従である。いかにも古くてダサイという。前にも述べたように、大人の社会でも、そんなに働いてどうすると自嘲の念が一般的であるように、子どもたちの社会でも野球などスポーツの持っている〝頑張る〟〝根性〟が下落した。だから、スポーツの強い子は、クラスの人気者にはな

れないし、尊敬もされない。アメリカの子どものスポーツ観とは、雲泥の差である。
勉強の地位も頑張ることと密接な関係にある。つまり、ダサイとイメージされる。そんな勉強ばかりしてどうすると批判される。それに、もう一つ日本の特殊事情がある。日本の学歴社会では、学力偏差値が選抜のものさしだ。だから、スポーツも道徳も学歴社会を生きていくうえでは、無用のものである。とすると、試験勉強だけすればよいわけで、そこに子どもたちは、少なからぬ後ろめたさを感じる。つまり、エゴイストに位置づけられてしまう。これでは、クラスの人気者になり得ようはずがなく、また、リーダーには不適格である。むしろ、リーダーどころか嘲笑の対象と考えてよい。
スポーツも勉強も高い評価を持つのではなく、むしろ、うさぎ小屋の働き蜂を笑い者にするのと同じように、根性だの、頑張るだのという真面目さを笑いものにするようになった。真面目さを笑いものにするとき、子どもたちは「マジ」という。スポーツも勉強も、つまりは「マジ」なのである。
マジをあざ笑うのが今日現在の子どもたちの価値観を最もよく表現する。だから、クラスの人気者は、面白い子、マジをあざ笑うことが人気の秘密になったのである。

目標喪失社会の中学生

日本の中学生には、リーダーがいなくて、人気者がいると言った。それもこれも、真面目の価値が下落したことと大いにかかわりがある。真面目であるというには、なにかに対してという対象が必要だ。その対象は勉強すること、働くことだった。
それが、目下のところ、大手を振って国民すべての目標でなくなっている。働くこと、勉強することが、国民すべての目標として納得されていない。それが子どもの世界にも色濃く影を落としている

のだ。
この目標の有無が、日本の子どもたちの価値観に強い影響を与えている。
アメリカでは、日本という経済と教育における強敵を前にして、はっきり、日本叩き(ジャパン・バッシング)を行ない、日本を目標に据えている。この国の子どもたちの人気者は「強いこと」「親切であること」だと述べた。つまるところ、自制という根性、頑張りが、指導理念となっている。目標に向かって正しい人物が、人気者となり、かつ、リーダーとなって不思議ではない。
中国も韓国も明瞭な国の目標を持っている。中国では働くこと、学ぶことが疑う余地もなく正しい価値を持っている。国の経済力を高め、国民の生活を豊かにすることが目標である。だからこそ、勉強ができることが、子どもたちの間でも高い価値を持つし、スポーツのできることも同じ価値を持つ。
韓国では驚くべきことに、昔の忠孝の道をだれ一人として疑う者がいない。国に忠、親に孝が国民の合言葉となっており、花郎(ファラン)精神(国に忠の儒教、不言実行の道教、善行の仏教の三教からきている哲学)が、脈々と生きている。経済的に日本に追いつき追いこすこと、「北の脅威」に対抗することが、この国の目標である。
目標を設定された場合には、目標達成に必要な人物がリーダーである。残念というべきか、ありがたいというべきか、日本には、このような明確な目標がない。だからクラスの子どもたちの中にもリーダーがいない。日本人は、かつてはプロ野球にも努力する人に最高の敬意を払った。歌手や俳優にしても、努力のイメージをオーバーラップさせて、そこからヒーロー(英雄)を見出そうとした。かつてはたしかにヒーローがいたが、今では、野球の世界にも、芸能の世界にもヒーローが

いない。そこには、アイドルと称される「かわいい子」だけがいる。中学生の間に人気のある歌手たちは、ヒーローでなく、アイドルにすぎない。その典型例がオニャン子クラブだったといってもよいだろう。

(2) 希薄な友人関係

二律背反の友人関係

子どもたちは、相手を傷つけることを極度に嫌っている。それだけ心やさしいことを示すのだが、また同時に友人関係での深入りを拒否する。たくさん友人を持っているが、一定の距離をおいてつきあっているわけで、このことは、東京都の行なった「大都市高校生の心理的特徴と生活環境調査」（一九七九年）でもよく知ることができる（VI―7図）。

項目	%
お互いに相手に甘えすぎない	33.1%
相手の考えていることに気をつかう	46.9
お互いの領分にふみこまない	31.6
お互いの心をうちあけあう	55.4
お互いの約束は決して破らない	46.0
自分を犠牲にしても、相手につくす	14.0

VI-7図　友人とのつきあい方

（東京都生活文化局「大都市高校生の心理的特徴と生活環境」）

調査結果は友人の定義を書き改めている、と言えそうだ。お互いの関係は甘えすぎないように一線を画して、いわば他人行儀に徹している。「お互いの領分に踏み込まない」と考える者が、約三割で友人関係の限界を示しているようだ。

子どもたちが、このような友人と一線を画しているのは、互いに傷つくこと、わずらわしい関係になることを恐れているからである。

だから、割勘が絶対にいいわけで、だれかが相手の分まで払ってしまうと、その相手が精神的負担を負う。それでは、かえ

って友人関係がぎくしゃくしたものになってしまうし、また、相手に精神的負担を負わせてまで、自分が犠牲になる必要もない。それでは、犠牲になる意味がなくなってしまう。他人のために犠牲になるのは、深い愛情があって、そうせずにおれない衝動があるからだが、そもそも、そんな深い次元の人間関係の基盤がないのである。それは大人社会の人間関係に明らかである。

日本では少なくなってきた現象だが、韓国でははしご酒が今なお健在だ。今度は俺が、今度は俺が……で仲間の数だけはしご酒をする。日本人からみて、それなら最初から、一軒だけで割勘にすればむだづかいも少なくていいではないかと感ずる。しかし、韓国人は一昔前の日本人と同じで、それではお互いに水くさいと感ずる。多少支払いの高い安いはあっても、相互に甘え合いつつ、相互に犠牲になりつつ、助け合って生きようとする。

熱を失った子どもたち

日本ではここしばらくの間に、明らかに人間関係が変わりつつある。互いの犠牲を止めて、割勘でいこうという価値観で、その具体的な形が一線を画すことに表れる。

これはアメリカの個人主義に近い方向へ歩んでいることを示すといえよう。

子どもたちも、相手を打ち負かすまで議論しなくなった。ほどほどのところで、互いに顔をたてて妥協し、「もっとも、もっとも」「わかる、わかる」で終わってしまう。かつての友人関係は、夜を徹して議論して、「ばか野郎」「ばかとはなんだ」までいかないと終止符が打たれなかった。それが親友の親友たる証拠ですらあった。

相手とほどほどに調子を合わせ、人間関係をスムーズにする心理状態をペルソナと呼んでいる。ペルソナとは仮面という意味で、人間関係の潤滑油を意味している。いまの中学生・高校生は、必要以上に社交辞令巧みな紳士淑女となっているといえよう。

議論をしなくなったほかに、ゲームでも徹底して争わない。あっさりと負けを認めるし、この認め方もすばやい。男の子が女の子に「愛しています」とか「好きです」と愛の告白をする場合でも、新しい人間関係がよく現れる。もし、相手の女の子が愛を受け入れてくれそうにないと判断すると、すかさず「ナーンチャッテ」と笑いにごまかしてしまう。「冗談なんだよ」というわけである。

かつて、英国の詩人テニスンは、恋愛について、こう詠んだ。

恋して人を失うは
恋せざるにまさりけり

人を愛して失恋しても、恋しないよりいいではないか、ということであるが、新しい友人関係、新しい子どもたちの恋愛関係は、テニスンを愚かと位置づけてしまう（千石保『現代若者論』弘文堂）。

親子関係は親の子に対する犠牲から成り立っているが、先のⅣ－7図の示すように、「自分を犠牲にしても、相手につくす」という者がわずか一四％、そのくせ、「相手の考えていることに気をつかう」という者が四六・九％もある。

ここに、現代の若者の友人関係の本質があるといえるだろう。どうしてこのようになったかは、分析に価する。

集団主義から個人主義へ

まず、毛利家の三本の矢の必要性の欠如があげられよう。国の経済状態にしても、国民の生活にしても、耐乏と結束をかつてのように必要としなくなった。互いの傷をなめ合う条件がなくなってきたのである。豊かな時代は、人間関係を深め、あるいは宗教心を育てる土壌を欠いている。

もう一つ、日本社会は集団主義から個人主義へ急速に変わりつつある。豊饒の時代と平和な時代には、集団主義の必要がなくなったこと、個人主義がよい理念として強調されるようになったこと、アルビン・トフラーも説くように、生産や消費の仕方がコンピューターの端末に一人で向かうように、共同の必要性に欠けること、などなどのために集団主義から個人主義へ変化していると考えられる。

子どもたちの生活様式も、一人でテレビに向かい、一人でテレビ・ゲームをし、一人でマンガを読む……。たくさんの子どもたちが群れていても、それぞれが別のマンガを読んでいる光景は、個人主義を象徴する。

アメリカのニューヨーク郊外にある中学を訪ねたとき、意外な事実に出合った。子どもたちが最も嫌な言葉のナンバー・ワンは「裏切り」だったことだ。中学生の発達段階では、家族から自立し、家族に反抗し、友人との世界に向かう。そこで求めるのは、家族関係と同じ信頼である。しかし、そこで体験される重大事件は、信頼に背かれることである。子どもたちにとって初体験である「信頼に背かれる」ことが、自立に拍車をかけるわけだが、このとき初めて「裏切り」という言葉を発見する。

インタビューに答えた中学生たちは、人間に対する信頼、つまりは友情と裏切りに大きなジレン

マを感じている。

「はい、友情は最も大切なことです。ですから、友情を裏切るのは、最も不道徳だと思います」

「裏切られることがあっても、友情を得ることはよいことですから、深い友情を持ち続けたいと思います」

アメリカの中学生は、このようにして自立の道を歩んでゆく。とはいうものの、友情に期待するものは、日本の中学生と異質のもののように考えられる。「深い友情」を得るために、「深いつきあい」「深入りする」ことは、禁物である。

総理府青少年対策本部で行なった「世界青年意識調査」（一九七二年）で、「友人関係は深入りしないほうがよい」かどうかたずねたことがある。その結果はVI－8図のように、日本青年の意識にはやや深入り賛成が強かった。もっとも、この世界青年意識調査は今から約一五年前のものである。当時は明らかに、日本で考えられる友人関係は、世界の中で異色の存在だった、「深入り型」と言えただろう。

国	%
日本	30.4%
アメリカ	54.5
イギリス	63.0
西ドイツ	66.7
フランス	82.1

(注)「友人関係は深入りしないほうがよい」という設問に賛成の比率

VI－8図　友人関係の深さ
（総理府青少年対策本部「世界青年意識調査」）

それから一五年、時移り人変わって、友人関係は一線を画した個人主義型に変化している。面白いことに、子どもたちは、どうやらこの希薄型にすっかり満足しているわけではないらしい。他方で伝統的な日本文化での深い次元の人間関係を求めているとも考えられる。群れている間はいいが、一人になるとさみしくてしようがない中学生が、いっぱいいるのである。

Ⅶ　中学教育の改革へ向けて

1　評価と高校入試

教育改革＝二つの視点

中学校教育の改革については、臨教審はじめ多方面から、様々な提案がなされている。視点は二つあるだろう。二一世紀の遠い先まで睨んだ理想的な教育はどうあるべきかという視点が一つ。もう一つは、今日、教育の荒廃といわれる現状をどう正すかという視点である。

二つの視点は、やっかいなことに、相反する問題を提供する。遠い将来を見込んだ中学校教育の目標は、より個性的で独創的な能力の伸長であろう。具体的な形としては、英才教育、飛び級制度、能力別編成などが強く求められる。ひるがえって現状をみると、英才教育や飛び級制度は、ますます受験競争を激化させることになるだろう。

現状での最大の問題は、いうまでもなく、受験のためのいたずらな競争であり、偏差値だけの選別にある。英才教育、飛び級制度、能力別編成などは、競争をさらに激化させるに違いない。この視点で考える場合には、むしろ、自由競争よりは、統制や制限でなければならなくなる。

もっとも、生徒と生徒を選り分けること、選抜することは避けられない。そこで、個性や能力の伸長と、いたずらな競争を終わらせる二つの視点の解決の共通項として、偏差値だけの選別を止めることが考えられる。しかもアメリカのマッチョイズムにみられる、強いこと、親切であること、などの特性をカウントすることが相反する二つの目的の解決策と言えまいか。

中学教育改革の理念は、偏差値偏重を改めることにある。それには、なにより、生徒を評価する基準をなににするか、が最大の問題として浮かんでくる。その具体的場が高校入試であり、これに取り組む教師のあるべき姿も問われてくる。

このような視点から、終章では、評価のあり方と高校入試、教師のあり方の二つに焦点を合わせて考えることとしたい。

学校教育と評価

およそ一人の人間を評価するには、頭がいい、健康だ、情操が豊かだ、人格が優れているなど、さまざまな側面があり得る。実社会を頭に描いてみると、このことがよりよく理解できるだろう。たくさん知識があることも大事だが、人柄がよくないと、同僚や部下からの援助が望めない。仕事をするにも遊ぶにも、家庭生活を営むにしても、他人の協力がなく、自分一人でできることは少ないはずだ。多くの人の信頼や愛情がなくては、なにもできないだろう。

不思議なことに、日本の学校では、知識があるかどうかの側面でしか人間を評価しない。人はそれぞれよい点がある、と学校の教師も親も会社の幹部たちも口をそろえて言う。にもかかわらず、学校では知識の側面しか評価しない。この点が最も重大な欠陥だろう。

評価対象としては、認知的領域、情意的領域、運動技能的領域の三つの事柄があげられる。認知的領域とは、まさに知識の側面だが、ここで言われる情意的側面は、いわば道徳心とでも言うべきことを指し、運動・技能は、運動能力や芸術的な才能などを指す。

評価の多元化とは

臨教審でも、評価のあり方について、大いに議論が戦わされた。人柄というか情意の側面について強い反対論のあったことも事実である。とはいうもの

の、「評価の多元化」として、次のように答申が行なわれた。

人々の能力のさまざまな側面に着目し、特定の側面における秀でた能力を積極的に評価する。また、異なる価値観や文化を受け入れる姿勢が大切である。さらに、編入学、転学、転職、中途採用などヨコへの移動を円滑にし、学校・職場・地域の間の交流を促進する。

なお、評価の多元化に当たっては、これまでの学歴に偏重した評価の反省のうえに、特定の評価指標を過度に重視することによって生じる弊害も十分留意する。

要は知識の側面のみの評価を改めて、人格特性や特技を評価しなければならない、との趣旨である。この人格特性を評価することは、審議経過の概要に盛られたが、ここで盛られるについては、強い反対論が展開された。

反対論は次の四点に要約できるだろう。

①人格特性を評価の対象とすると、人格が悪いと評価されたとき、もう浮かぶ瀬がない。学力偏差値だけの評価だから、まだ、測定されていないいろいろな能力があるわけで、だからこそ、まだ救いがあるというのが第一の主張である。

②人格特性は、他人に対するやさしさに代表されるとすると、典型的な行為としては、たとえば、ボランティア活動をあげることができる。もし仮にボランティア行為を評価するとなると、エセボランティア、ただ、よい評価を受けるためのボランティアが出現するだろう。これはそもそも、評価すべき人格特性ではない。本当の他人に対するやさしさは、評価をこえ

た美しい神のような行為であるべきで、人が人を評価するためのものさしであってはならない、というのが第二の主張である。

③人格特性を評価するには、たとえば学校では、生徒個人個人のすべてを把握しなければ不可能だ。現実の問題として、教師が生徒一人ひとりのすべてを把握できない。それともう一つ、もし、どうしても評価するとなると、教師のえこひいきが生まれるだろう。そうでなくても、現在、多くのえこひいきが起きている。これでは、ますます、教育をゆがめてしまうだろう、というのが第三の主張である。

④最後の主張は、父母の反対である。仮に人格特性を評価するとしても、教師の主観から入らざるを得ない。えこひいきと言わないまでも、よい生徒、悪い生徒の判断には、教師個人が持っている、よい悪いのものさしがあり、また、感情もある。つまり、客観的で公平な評価を期待できない。このような評価は、父母を納得させることはできないだろう、というのが第四の主張である。

人格特性の評価と高校入試改善

これらの主張は、それぞれに理由がある。たしかに人格特性を評価することは、むずかしい。むずかしいから、結局は学力偏差値という客観的で、えこひいきなど入り込む余地のない現状でしかたがないというのである。しかし、無難な方法をとっているために、今日の教育荒廃を生んだ。やはり改革を考える必要がある。

こうした状況を踏まえて、臨教審では、答申の中に人格特性を評価すべきだとしたのだった。審議経過の概要は次のように述べている。

高等学校入学者選抜方法については次のような考え方に基づき行われるべきであると考える。
①個性・能力の分布が多様になる生徒に対して多様な教育の機会を提供するため、高等学校の個性化、特色化を推進し、その教育を受けるに足る者を選抜する。このため、選抜基準の多様化・個性化を図ること。
②中学校教育の正常な運営に資すること。
③進学希望者の過重な負担を招かないようにし、健やかな人間性の発展に資すること。
④入学者選抜の方法が信頼性・客観性のあること。
なお、これまでの審議において出された入学者選抜方法の改善について主な意見を例示すると、次のとおりである。
①いわゆる偏差値偏重を打破するとともに、特色ある各高等学校の教育を受けるに足る者を選抜する観点から、高等学校の多様化・個別化を推進し、学力検査の実施教科を多様にするとともに、傾斜配点を導入するなど、選抜基準の多様化を図る。なお、この際、特定の教科等については常識問題に関するテストを行うことを検討する。
②知・徳・体の調和ある発達を目指す中学校教育の正常な運営を図る観点から、調査書においては特別活動・徳育などについても記載することとするが、この際には、ある一定割合の者について、主として客観的事実に基づく特記事項とするなど調査書の記述の仕方を工夫する。
③教科以外の活動・徳育に関しては、中学校からの調査書だけでなく、その他の機関、団体からの報告・資料をも活用できるようにする。
また、受験者の過去の行動などを題材とする作文を課すことの導入を奨励すべきである（傍

点筆者）。

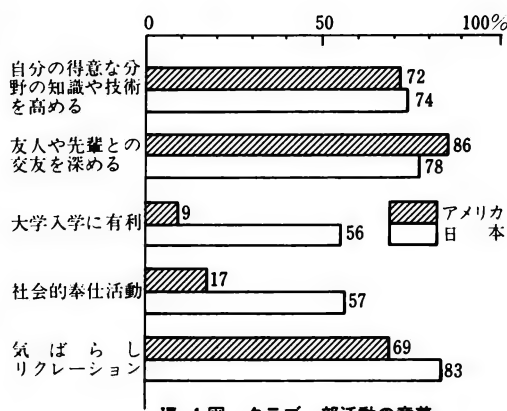
④学力検査や調査書の活用、推薦入学等入学者選抜方法の改善に資するため、それらと高等学校入学後の学習・活動などとの相関についての調査研究を行いながら選抜方法の改善を図る。

日本での中学から高校への進学に際して、内申書に記入される特別活動とは、たとえば、クラブ活動として、「放送クラブの一員として活躍した」と記載される。ところが高校側では、この記載は、いったいなにを意味するのか理解に苦しむという。たしかに、「放送クラブの一員として活躍した」では、人格特性が優れていると記載するよりも抽象的で、つまるところ、なにも書かれていないのと同じことであろう。

そこでアメリカの大学入試では、人格特性の評価はどのように行なわれているかが、臨教審でも関心が持たれた。このため、アメリカの大学入試での実情が調査され、報告書が提出された。まず、アメリカの大学入試では、一、二の例外を除いて、いずれの大学でもいわゆる人格特性が重要な要素となっている。高校生活でのボランティア活動を重要と考えるかどうかは、VII―1図のように、アメリカの高校生がこれを重視し、日本の高校生が重視していないことに明らかである。特に社会的奉仕活動での日・米の大差、大学入試に有利かどうかの大差には注目したい。

人格特性を把握する手段

人格特性をなにによって把握するかには、いくつかのことが考えられる。面接、作文、いわゆる出身校からの内申書、出願者本人をよく知る人物、たとえば、公的機関にある人の推せん書などであろう。

面接は日本の企業でも最も多く利用されている評価方法である。現実に行なわれている面接では、

VII-1図　クラブ・部活動の意義

たとえば会社では、若手の面接に始まって、課長、部長、重役というように、いくつかの段階を経て行なわれる。しかし、面接をする人が同一人物でも、時間や日によって、評価が異なることが証明されているし、数名の面接者で意見を異にする場合も少なからずある。このため、アメリカの大学では、面接による人物評価は影を薄くしつつある。

作文による評価は、優れた評価方法の一つだが、「作文を書く能力」の評価はできても、必ずしも人格特性の評価に適切ではないし、内申書での人物評価も、主観的要素が入り込みすぎて万全とはいえない。

いまアメリカで最も広く行なわれている方法は、過去の本人の行動を柱とした作文であろう。ここでは、作文能力もさることながら、自分が過去にどのような行動をしたか、学校内のクラブではどうか、社会（コミュニティ）ではどうかを記載する。この作文に基づいて、アドミッション・オフィス（入学試験委員会）が、たとえば、老人ホームで作文に書かれているようなボランティア活動の事実があったかどうかを確かめる。したがって、虚偽の事実を書くことができないしくみになっている。

過去の行動を軸とした作文は、かくて、人物評価の有力な方法として浮かび上がってきた。この方法が確立されると、いよいよ、どのようなボランティア活動が評価されるかの各論にいたる。

アメリカの大学での試行錯誤は、結論として次のような評価基準を作りつつあると言えるだろう。一つの活動をいかに長く続けたか、というものさしである。これまでの試行錯誤では、あっちへ顔を出し、こっちもつつくといった、ただ数の多いボランティア活動は、多分に点数稼ぎでもあり、また、信念のなさを示す。ただ一つのことを、長く続けている、その実績が彼の行動の善意、やさしさを示す。自己に関する作文、なかでも、過去になにを行なったかその中味が生徒の行動での善意や誠意を示すものと言えるだろう。こうした評価と学力偏差値による評定は併せて行なわれるべきものであろう。

VII-1表　高校入試の評価基準の多様化の是非

（%）

	父兄※1	中学教師※2
賛成	63.8	90.1
反対	15.3	9.5

※1:「高校入試で人物や行動も評価の対象にすること」についての賛否
※2:「高校入試において学力テスト以外の要素を評価対象にすべきか」という問いに対する賛否

（注）DK、NAは除く
（比較社会学研究所「学生生徒の評価基準の多様化に関する研究調査」より）

このような評価方法は、企業での人物評価をも大いに助けるであろう。多くの企業は面接での質問に格段の苦労をしているのが実情である。しかし、苦労した質問はリクルート企業で編集され、面接問題集として出版されている。受験生は予め想定される質問にどう答えるか、解答例を参考にしながら〝面接準備〟をする。これでは、面接による人物評価の効果は、さっぱり上がらない。

学力偏差値依存の体質改善へ

評価にあたっては、過去の実績がものを言うようにしたいものである。この過去の実績が学力だけをみるのではなく、もっといろいろな実績をみるのである。道徳の時間に受験科目の数学をこっそりやっていてはだめだし、夏休みも正月休みもなく塾へ

行っていては、人格特性を評価してもらえないことになる。こうしてはじめて、ガリ勉が結局、トクになるというやり方が改められる。

高校や大学入試に、学力偏差値だけでなく、その人物を評価することの賛否や理由を、一般の世論にたずねた調査がある（比較社会学研究所「学生生徒の評価基準の多様化に関する研究調査」一九八六年）。実に父母の約六割、教師の九割が、この評価方法に賛成だった（Ⅶ－1表）。

結局、こういうことになるのではないか。人格特性の評価は、長所と欠点がある。しかし、過去の実績をカウントすることで、かなりの欠点がカバーされるに違いない。残った欠点と現在の学力偏差値だけでの評価と、どちらがより大きい欠点なのか。逆に言って、それぞれ欠点はもつものの、よりよい評価方法はなにか。どちらがよりよいかという判断をなすべきではないか。少なくとも絶対のものはない。こうして総合的にみて、人格特性をも評価することは、よりよいシステムだと主張したい。

2 教師のあり方

教育荒廃の根本的原因

今日の教育荒廃は、教師の責任だと主張されることが多い。たしかに、中学でのいじめ、校内暴力、非行などは、教師の教育不熱心さによると言えるかもしれない。サラリーマン型の教師が増えたことも事実だし、生徒に対する愛情や研究もたりない、自分の教える科目も、十分こなしていない教師も少なからずいることも事実だろう。

このような主張にも理由はある。が、教育荒廃のより根本的な原因は、学力偏差値だけで生徒の将来を決定することにある。進路を就職と大学進学に分けることを、アメリカではトラッキングと言っているが、そのトラッキングは、日本では中学時代にほぼ決定的になる。生徒たちは自分の人生のほとんどを決定するこの時期に、大いに悩み苦しむ。ついていけない子、いわゆるお客様と呼ばれる子どもの苦悩は、その子自身になってみなければ分かるまい。

お客様たちは、全然分からない授業の苦痛に耐えねばならない。もっとも、この苦痛に耐えることと、トレランス(耐性)を養うことが今日の学校教育の目的だという主張もないではないが、トレランスの養成だけが教育ではない。かくて、先生に対する反抗が出るのであるし、いじめが横行する。友だちをいじめるとスカッとする、と多くの子どもたちが答えている。それだけ、トラッキングのフラストレーションが生徒たちの心に重くのしかかっている。

現実に振り回される教師たち

この現状は、教師に負担がかかり、だから生徒指導がかつてみられないほど重要な役割を持つようになってきた。徹底して規則を守らせようとする先生も、トラッキングが激化するにつれて多くなってきた。修学旅行をするに際して、三〇とか五〇の規則を創案する教師も現れる。

熱心であればあるほど、厳しい先生になっていくし、反対にやさしいといわれる先生は、冗談や面白いことを言って、生徒に迎合するようになる。冗談も言わねば、厳しくもない、どちらでもない先生は、おろおろするだけで、生徒にばかにされるようになっていった。

日本の教師は、このように分析すると、とても、かなわぬ構造的問題に振り回されていると言えるだろう。厳しければ厳しいほど、規則をいっぱい作れば作るほど、道化師の操り人形のように悲

しい。

教師の責任の究極にあるものは、受験構造上の問題に負うところが大だが、教科のベテランであることも大切だし、生徒の悩みや問題行動を把握する洞察力も必要であろう。廊下に面したガラス窓に、生徒の作品を貼り、中をのぞくこともできない密室教室で授業が行なわれてもいる。教師は独断に陥りがちになるし、他のどのような社会組織にもみられない密室で仕事をしている。同僚、上司、一般社会人の直接批判をも受けないのは明らかにおかしい。臨教審ではこの視点から、一年間の初任者研修を提案し、政府もこれを実行し始めた。ここで、最も重要なこととして、on the job training (OJT) が強調されていることがある。OJTは、仕事をしながら学ぶことだが、それには、公開されていること、他人の批判が前提とされていることが必須である。

教師のあり方は、単なる研修だけで解決するわけではない。一年間の新任研修は、むしろ、中学校が置かれている文化上の位置、社会構造上の位置を考え、それに教師がどう対応するかが最大問題である。

学校教育の目的と生徒の目的

日本の教育は、世界のどの国よりも学校教育の目的と、生徒たち（あるいは親たち）の目的と乖離していることに問題がある。先生や社会のリーダーたちの言う教育目的と、親や生徒の教育目的が乖離していると考えるべきだ。アメリカでも、中国でも韓国でも、学校当局の理念と生徒や親の理念とに大きな差がない。

諸外国では少なくとも、クラスの人気者、クラスのリーダーは、正義感や親切心のある子ども、そして、勉強もできる子である。クラスの人気者は、生徒たちの間で主流を占める価値観によって決定される。したがって諸外国では、子どもたちの間に、正義感の強いこと、だれに対しても親切

であることが高い評価を受けている。残念ながら日本ではそうでない。
日本では勉強のできる子は、ガリ勉あるいはエゴイストと否定的評価を受け、正義感や親切心より、面白く冗談のうまい子が高く評価される。学校や社会一般でいわれる正義や、やさしい心は評価されない。学校教育の持っている学校文化、教師文化と、子どもたちの持っている生徒文化、クラス文化に大きな乖離があり、それが問題なのである。
アメリカでは、たとえば自分が毎日図書館で一時間勉強する、足の不自由な子を教室移動と登下校の際助けると自身で決めて実行している子どもが、よい生徒として、教師からも生徒仲間からも評価される。中国でも韓国でも、新聞配達をしながら母親を助け、友だちにも親切な子が、先生からも仲間からも評価される。日本ではそうでない。諸外国の大勢からみれば、驚くべきいびつな状況にある。先生がよいと思うことは、子どもがよいと思わないのだ。
子どもたちの流行はこのことを如実に示している。こういう現実の中で、教師がどうあるべきか、教師同士で悩み、子どもたちとも話し合いながら、なおかつ、正義や親切心を教えるのが大切だろう。

ここで再び、生徒文化と教師のあるべき姿勢を考えてみよう。

生徒文化と教師のあり方

それを中学の教師に語りかけるという形で、述べておきたい。
道徳教育を充実させるべきだ、というのが臨教審の答申だった。校内暴力やいじめの発生は、教師の徳育教育が不足だから、というのが、臨教審メンバー多数派の意見である。
たしかに、おおかたの教師は、道徳の授業にのり気ではない。躊躇して逃げ腰でさえある。道徳

の授業は生徒にきらわれるというのも一つの理由だが、自分はそんなに道徳的でない、道徳の教師にふさわしくないという良心のせいでもあるらしい。事実、道徳などより、受験校の進学のために、道徳の時間をつぶして数学をやった方がいいと思っている者もいるし、不純異性交遊などともっともらしいことを言う前に、自分をも含めた社会の性解放があまりにも進んでいる。とてもとても、道徳を説くことなんてできない相談だ、という思いを抱く者もある。

だから、臨教審は道徳教育に力を入れよ、と主張する。だが、臨教審の考え方は、直接、自身で道徳の授業をしないですむし、言わば、きれいごとを言ってすましていられる。現場の教師はそうはいかない。

道徳教育が不振を極めているのは、努力や自己犠牲の絶対的価値が崩壊したからである。自分は自分らしくやればいいという相対的価値の出現こそ、道徳教育を疎外し、生徒指導を困難にしているのである。道徳教育を疎外するホンネとタテマエの相対性こそ、まず退治せねばならぬ問題である。

この考え方は、社会が悪い、社会のせいだということとイコールである。この豊饒の社会を、貧しくて努力や人間の真実性がことのほか必要とされる昔の社会に引き戻すことはできまい。だが、日本の大人の社会も子どもの社会も、タテマエや目標もなく、ただ、おかしければよいというビートたけしや明石家さんまのホンネだけが喝采されるのも誤っている。

とはいうものの、子どもたちの文化、たけしやさんまの文化をまず理解する必要がある。そこで、大人たちが口を開けば言う努力・真実・正義などが、いかがわしい、クサイと受け止められている理由を発見すべきだろう。ここから、全く生徒に迎合するか、せいぜい無関心を装うか、それとも、

なおかつ、不易の絶対価値を教えるかの分かれ目があると考えられる。いたずらに、理由も分からず子ども文化を否定し鎮圧派に回るのは、臨教審の説くことではあっても愚かな誤りである。

それを納得したうえ、たけしやさんまの言うホンネだけでは、社会が成り立たないし、人間としても恥ずべきであること、社会がそうであっても、弱い子の味方をするという正義や、目的に向かって前進する努力、ときには、自己犠牲をしても他人のために頑張ることが、きっと、この受験社会でも正しいことと思うこと、そのために、ナウくなくても、この絶対的価値を大事にせねばならぬと説くこと、それがあるべき姿であろう。

生徒に説くこと、というよりは、教師も生徒といっしょに考えてみること、それが生徒指導の第一歩と考えられる。

生徒とともに社会の矛盾に対決する

子どもの世界には、子どもの文化がある。子ども文化の中には、子どもの価値観があり、ときに大人文化・学校文化と対立する。事実、先生の目から見てよい子は、必ずしも子どもたちのよき友人とは限らない。

生徒指導の極意は、この子ども文化の価値を理解することだろう。真面目に努力し、他人のために犠牲的精神を発揮すること、それが大人文化の中核だった。しかし、豊饒な社会となるにつれて、真面目であること、努力すること、犠牲的であることが、そんなに価値を持たなくなった。

何十年も耐えに耐えて頑張ってきたサラリーマンが、定年になってつぶしの効かない自分を発見し、少しは楽しく過ごさねばならぬと考えるようになった。

子どもたちは、サラリーマンのなれの果てをみて、自分らしく生きることの大切さを学んだので

ある。そこから、「自分らしく」「自分に忠実に」という子どもたちの言葉が生まれてきた。面白く、楽しく、という価値観が、「キン肉マン」というマンガを生み、根性もののベストセラーを棄てたのである。必然として、「巨人の星」の世界を死守しようとする学校文化と、キン肉マンの子ども文化が、いたるところで衝突した。

学校の教師は、ますます、巨人の星で身を固め、子どもたちは、キン肉マンの振り子を大きく振りすぎるようになってきた。どんな社会になっても、努力や犠牲的精神を欠かすことができないのだが、巨人の星の欠陥を隠したまま、キン肉マンを押さえつけることはできない相談である。そこに、硬派の生徒指導の限界があるのだろう。冗談を言って生徒に迎合するのは、論外だが、ともに生徒と社会の矛盾に悩みつつ生きることが望まれる。

日本・アメリカ・中国中学生調査・調査方法

(1)中学生調査

	日　本	アメリカ	中　国
時　期	1983年11月～12月	1984年4月～6月	1985年3月
地　域	全国21地点（21校）	全国21地点（21校）	上海市とその周辺地域
対　象	中学校1年生～3年生	中学校1年生～3年生	中学校1年生～3年生
抽出方法	大都市（100万人以上）、県庁所在地、その他の各地域の人口比率、およそ2対1対7の割合により、学校を無作為抽出	人口比率により、地域を抽出後、学校を無作為抽出	上海市とその周辺地域の中学校を無作為抽出
調査方法	学校における集団質問紙法	日本に同じ	日本に同じ
有効回収数	2,299名	1,458名	1,798名

(2)母親調査

	日　本	アメリカ	中　国
時　期	1983年11月～12月	1984年4月～6月	1985年3月
地　域	全国21地点	全国21地点	上海市とその周辺地域
対　象	中学生をもつ母親	日本に同じ	日本に同じ
抽出方法	中学生調査と同じく地点別サンプリングにより学校を抽出し、学校を通し、母親に依頼	中学生調査と同じく地点別サンプリングにより学校を抽出し、学校を通し、母親に依頼	中学生調査と同じく、上海市とその周辺地域の中学校を抽出し、学校を通し、母親に依頼
調査方法	自記式回答法（学校を通し質問紙を配布、回収した）	日本に同じ	日本に同じ
有効回収数	2,230名	930名	1,700名

(3)教師調査

	日　本	アメリカ	中　国
時　期	1984年11月～85年1月	1985年4月～5月	1985年3月
地　域	全国37地点（38校）	全国59地点（71校）	上海市とその周辺地域
対　象	中学校教師	日本に同じ	日本に同じ
抽出方法	層化二段抽出法（地点を政令指定都市：県庁所在市：その他の市郡＝2：1：7で層化、また学校規模を小規模：中規模：大規模＝4：5：1で層化し、学校を無作為抽出した後、その学校の教師を対象とした）	層化二段抽出法（地点を層化し、学校を無作為抽出した後、その学校の教師を対象とした）	上海市とその周辺地域の中学校を無作為抽出した後、その学校の教師を対象とした
調査方法	自記式回答法	日本に同じ	日本に同じ
有効回収数	880名	812名	374名

章扉写真・田村泰男
㈶教育美術振興会
図版製作・㈱ノムラ

千石　保（せんごく・たもつ）〈I章、VI章、VII章〉

1928年　富山県に生まれる
　　　　早稲田大学法学部卒業
1975年　総理府青少年対策本部参事官を経て
現　在　(財)日本青少年研究所所長
著　書　『日本人の人間観』(日経新書)『学歴主義のつぎにくるもの』(共著・学陽書房)『日本のサラリーマン』『日本の小学生』(以上NHKブックス)『現代若者論』(弘文堂) 他

鐘ケ江晴彦（かねがえ・はるひこ）〈II章、V章〉

1946年　東京都に生まれる
1978年　東京大学大学院教育学研究科博士課程修了
　　　　専修大学文学部講師を経て
現　在　専修大学文学部教授
専　攻　教育社会学
著　書　『地域と教育』(共著・教育学大全集9巻・第一法規)「地域と教育」(現代のエスプリ・至文堂) 他

佐藤　郡衛（さとう・ぐんえい）〈III章、IV章〉

1952年　福島県に生まれる
1982年　東京大学大学院教育学研究科博士課程修了
現　在　東京学芸大学助教授
専　攻　教育社会学
著　書　『教室のカルテ』(J. ホルト，共訳・新泉社)『教育調査法』(共著・有斐閣) 他

NHKブックス538

日本の中学生　国際比較でみる

1987年11月30日　第1刷発行
1995年2月10日　第11刷発行

〈検印廃止〉　著　者　千石　保
　　　　　　　　　　鐘ケ江晴彦
　　　　　　　　　　佐藤郡衛
発　行　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41-1
郵便番号150振替00110-1-49701
印刷　太平印刷社
製本　田中製本
装幀　栃折久美子

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
定価はカバーに表示してあります
ISBN4-14-001538-1　C1337

NHKブックス　時代の半歩先を読む

＊社会

- アメリカの家族　日本の家族　増田光吉
- 日本人の海外不適応　稲村　博
- 働く母親の時代　―子どもへの影響を考える―　岩男寿美子／杉山明子編
- 働く女たちの時代　原ひろ子／杉山明子編
- 高度情報社会と日本のゆくえ　濱口惠俊編著
- 大衆の病理　―袋小路にたちすくむ戦後日本―　西部　邁
- 図説　日本のマス・コミュニケーション　第三版　山本　明／藤竹　暁編
- 図説　現代日本の家族問題　湯沢雍彦
- 日本人はどう変わったのか　～戦後から現代へ～　祖父江孝男編
- 国際化と情報化　―比較文明学の視点から―　濱口惠俊編著
- 若者・アパシーの時代　―急増する無気力とその背景―　稲村　博
- 国際感覚と日本人　金山宣夫
- ダンディズム　―貴族趣味と近代文明批判―　山田　勝
- 日本とは何なのか　―国際化のただなかで―　梅原　猛編著
- 現代日本人の意識構造　第3版　NHK世論調査部編
- スウェーデン人はいま幸せか　訓覇法子
- 情報化社会に生きる女たち　―コミュニケーションの視点から―　岩男寿美子／武長脩行編
- ベストセラーの読まれ方　―イギリス16世紀から20世紀へ―　香内三郎
- 日常生活の社会学　山岸　健
- 「近代」の意味　―制度としての学校・工場―　桜井哲夫
- うわさと誤報の社会心理　廣井　脩
- デジタル思考とアナログ思考　吉田夏彦
- マグロと日本人　堀　武昭
- スタジアムは燃えている　―日米野球文化論―　杉本尚次
- 新・現代女性の意識と生活　神田道子／木村敏子／野口眞代
- 未婚化の社会学　大橋照枝
- 人間社会の形成　今西錦司
- 風景とはなにか　―都市・人間・日常的世界―　山岸　健
- イギリス人の表と裏　山田　勝
- 新版　同時代の人類学　―21世紀への展望―　米山俊直
- 赤ちゃんを産むということ　―社会学からのこころみ―　舩橋惠子
- 「みやこ」という宇宙　―都会・郊外・田舎―　園田英弘
- 外国人労働者と日本　梶田孝道
- 二十世紀とは何であったか　小林道憲

NHKブックス　時代の半歩先を読む

*歴史

NHKブックス既刊書から

孤立化する子どもたち　深谷昌志　No.436

日本の小学生《第二版》　千石 保／飯長喜一郎
——国際比較でみる　No.491

学校に背を向ける子ども　河合 洋
——なにが登校拒否を生みだすのか　No.507

日本の若者・アメリカの若者　千石 保／ロイズ・デビッツ
——高校生の意識と行動　No.642

学校は必要か　奥地圭子
——子どもの育つ場を求めて　No.655

ISBN4-14-001538-1 C1337 P850E

定価850円（本体825円）

日本放送出版協会 刊

＊日本の中学生は、世界の中学生からみると、いびつで異常な環境で育てられている。かつまた、中学生自身も異常である。これはなんとしても残念である。いま、社会のありとあらゆることの解放の中で、学校だけが規則の孤島になっている。かくて学校が持っている文化（学校文化）と、生徒たちが持っている文化（生徒文化）が、大きく乖離した。受験戦争の過熱が、生徒たちの心に深く「いびつ」「異常」の影を落としている。（本文より）